

和文概要

張之洞『輶軒語』訳註（二）

坂本具償^{*1}

財木美樹^{*2}

輶軒語は、光緒元年（一八七五）、張之洞が三十八歳、提督四川学政の時に院試の受験者や合格者のために執筆したものである。いかにすれば紳士となれるか、いかにすれば経史子に通じることができるか、いかにすれば考試に合格できるか、といったことが簡潔に記述されている。本稿では『輶軒語』の語行第一、および語學第二のうちの「通論讀書」の訳注を収める。

キーワード

語行 語學 讀書 科举

*1香川高等専門学校高松キャンパス一般教育科

*2比治山大学非常勤講師

張之洞『輜軒語』訳註(二)

坂本具儔
財木美樹

はじめに

本訳註は前年度の(一)を受けて語行第一、および語學第二のうちの「通論讀書」の訳註を収める。今回の部分は特に難解なところが多く、誤読、誤訳、未熟なところ、出典や典拠の未詳も多々あるので、博雅の士の指教を乞う次第である。

『輜軒語詳注』と『長文襄公全集』

前年度以降に参照することのできた資料に司馬朝軍『輜軒語詳注』(華東師範大学出版社、二〇一〇・九)と『長文襄公全集』(文海出版社影印、一九六三・八)がある。『輜軒語詳注』はおそらく『輜軒語』に対する最初の注釈書と思われる。ただ本文で引用される書に対する『四庫提要』の引用は詳しいが、出典に関する注は少ない。『輜軒語詳注』所収の『輜軒語』は戊辰(一九二八)仲春に刊行されたもので、今回の底本とした『慎始基齋叢書』とは少しく異同がある。今回はその異同を註で指摘する。

凡例

一、本訳註は張之洞『輜軒語』に対して訳註を施したものである。本稿では、『輜軒語』語行第一、および語學第二のうちの「通論讀書」の訳註を収める。

一、本訳註は『慎始基齋叢書』所収の『輜軒語』を底本とし、原文と【書き下し】【註】【通釈】【書目答問】から成る。底本では夾注は小字雙行である。

るが、今回はポイントを下げた活字とする。

一、【書目答問】は、本文に言及された書籍、人物に関する著作を『書目答問』から引用したものである。『書目答問』に掲載されてはいないが、『補正』(范希曾編)にあるものは【補正】として引用する。

一、原文と【書き下し】は原則として旧字体を使用し、【通釈】は固有名詞(人名、書名)には旧字体を使用する。

一、『經解入門』は京都弘文堂排印本(一九三〇年)を底本とし、頭注や勘誤などで文字を改めたところがある。また随時、周春健の校注本(華東師範大学出版社、二〇一〇)を参照した。

語行第一

教士之道、其宏綱要領、世祖皇帝臥碑八條、聖祖皇帝聖諭十六條、盡之。凡屬士林、恭敬遵守。此外儒先教條學規、具有成書、無待演說。茲擇其切於今日世風、本省士習者言之。

【書き下し】

行を語る。第一

士に教ふるの道、其の宏綱要領は、世祖皇帝『臥碑』八條、聖祖皇帝『聖諭』十六條、之を盡す。凡そ士林に屬するもの、恭敬遵守す。此の外、儒先の教條學規は、具さに成書有り、演說するを待つ無し。茲に其の、今日の世風、本省の士習に切なる者を選んで之を言ふ。

【註】

○世祖皇帝『臥碑』八條 世祖皇帝は清の順治帝。『臥碑』は生員の禁止事項を刻した碑で、学宮の明倫堂の左に建てられた。明の太祖の政治方針に共

鳴するところが多かった順治帝が、太祖の『聖諭』六言をもとに、順治九年に臥碑に刻して頒行した。その内容は次の通り。

(一) 生員之家、父母賢智者、子當敬愛。父母愚魯或有非爲者、子既讀書明理、當再三懇告、使父母不陷於危亡。(生員の家、父母賢智なる者は、子當に敬愛すべし。父母愚魯、或いは非爲有る者は、子既に書を讀みて理に明らかなれば、當に再三懇告し、父母をして危亡に陥らざらむべし)

(二) 生員立志當學爲忠臣清官。書記所載忠清事蹟、務須互相講究。凡利國愛民之事、更宜留心。(生員は志を立てて當に學んで忠臣清官と爲るべし。書記の載する所の忠清の事蹟は、務めて須く互いに相講究すべし。凡そ利國愛民の事は、更に宜しく心を留むべし)

(三) 生員居心忠厚、正直讀書、方有實用、出仕必作良吏。若心術邪刻、讀書必務成就、爲官必取禍患。行害人之事者、適以自殺其身。當宜思省。(生員は居心忠厚、正直に書を讀みて、方めて實用有れば、出仕して必ず良吏と作る。若し心術邪刻にして、書を讀み必ず成就に務むれば、官と爲りては必ず禍患を取る。人を害するの事を行ふ者は、適たま以て自ら其の身を殺す。當に宜しく思省すべし)

(四) 生員不可干求官長、交結勢要、希圖進身。若果心善德全、上天知之、必加以福。(生員は官長に干求し、勢要に交結し、進身を希圖す可からず。若し果たして心善にして徳全ければ、上天之を知り、必ず加ふるに福を以てす)

(五) 生員當愛身忍性。凡有司衙門、不可輕入。卽有切己之事、止許家人代告、不許干與他人詞訟、他人亦不許牽連生員作證。(生員は當に身を愛し性を忍ぶべし。凡そ有司衙門には、輕しく入る可からず。卽し己に切なるの事有らば、止だ家人に許^{ゆた}ねて代りて告し、他人の詞訟に干與するを許さず、他人も亦生員の作證に牽連するを許さず)

(一) 爲學當尊敬先生。若講說皆須誠心聽受。如有未明、從容再問、毋妄行辯難。爲師者亦當盡心教訓、勿致怠惰。軍民一切利病、不許生員上書陳言。如有一言建白、以違制論、黜革治罪。(學を爲すには當に先生を尊敬すべし。講說の若きは皆須く誠心に聽受すべし。如し未だ明らかならざる有らば、從容として再び問ひ、妄行辯難する母れ。師爲る者も亦當に心を盡くして教訓し、怠惰を致す勿れ。軍民の一切の利病は、生員の上書陳言を許さず。如し一言建白有りて、以て制論に違はば、黜革治罪す)

(二) 生員不許糾黨多人、立盟結社、把持官府、武斷鄉曲。所作文字、不許妄行刊刻。違者聽提調官治罪。(生員は多人を糾黨し、盟を立て社を結び、官府を把持し、鄉曲を武斷するを許さず。作る所の文字は、妄りに刊刻を行ふを許さず。違ふ者は提調官に聽^{まか}せて治罪す)

○聖祖皇帝『聖諭』十六條 聖祖皇帝は清の康熙帝。康熙帝は康熙十八年に『聖諭』十六條を頒行した。その十六條は次の通り。

聖諭第一條 敦孝弟以重人倫。(孝弟に敦くして以て人倫を重んず)

聖諭第二條 篤宗族以昭雍睦。(宗族に篤くして以て雍睦を昭らかにす)

聖諭第三條 和鄉黨以息爭訟。(鄉黨に和して以て爭訟を息む)

聖諭第四條 重農桑以足衣食。(農桑を重んじて以て衣食を足す)

聖諭第五條 尚節儉以惜財用。(節儉を尚んで以て財用を惜しむ)

聖諭第六條 隆學校以端士習。(學校を隆^{さか}んにして以て士習を端^{ただ}す)

聖諭第七條 黜異端以崇正學。(異端を黜^{しりぞ}けて以て正學を崇^{たか}ぶ)

聖諭第八條 講法律以儆愚頑。(法律を講じて以て愚頑を儆^{いまし}む)

聖諭第九條 明禮讓以厚風俗。(禮讓に明らかにして以て風俗を厚くす)

聖諭第十條 務本業以定民志。(本業に務めて以て民志を定む)

聖諭第十一條 訓子弟以禁非爲。(子弟に訓じて以て非爲を禁ず)

聖諭第十二條 息誣告以全善良。(誣告を息みて以て善良を全うす)

聖諭第十三條 戒匿逃以免株連。(匿逃を戒めて以て株連を免る)
 聖諭第十四條 完錢糧以省催科。(錢糧を完くして以て催科を省く)
 聖諭第十五條 聯保甲以弭盜賊。(保甲を聯して以て盜賊を弭む)
 聖諭第十六條 解讎忿以重身命。(讎忿を解きて以て身命を重んず)
 雍正帝はこの十六條を敷衍解釈して『聖諭廣訓』を作り、雍正二年に頒行した。院試までの学校試の最終試験において、かならず『聖諭廣訓』の内の指定された一條を筆写させた。

○儒先の教條學規 先学の教條や學規には、

- 『白鹿書院教規』一卷 宋朱熹撰、宋饒魯輯
- 『朱子讀書法』四卷 宋張洪齊同輯
- 『朱子論學切要語』二卷 清王懋竑輯
- 『程董二先生學則』一卷 宋程端蒙董銖同撰、宋饒魯輯
- 『程氏家塾讀書分年日程』三卷 元程端禮撰
- 『少湖徐先生學則辯』一卷 明徐階撰
- 『初學備忘』二卷 明張履祥撰
- 『讀書十六觀』一卷 明陳繼儒撰
- 『讀書十六觀補』一卷 明吳愷撰
- 『明經會約』一卷 明林希恩撰
- 『讀書社約』一卷 明丁奇遇撰
- 『證人社約』一卷 明劉宗周撰
- 『論學三說』一卷 清黃與堅撰
- 『讀書法』 清魏際瑞撰
- 『簞溪自課』一卷 明馮京第撰
- 『根心堂學規』 清宋瑾撰
- 『家塾座右銘』 清宋起鳳撰
- 『教習堂條約』一卷 清徐乾學撰

- 『塾講規約』一卷 清施璜撰
- 『學規類編』二十七卷 清張伯行撰
- 『學規七種』一卷『附錄』一卷 清賀瑞麟輯
- 『鍾山書院規約』一卷 清楊繩武撰
- 『教諭語』一卷 清謝金鑾撰
- 『先正讀書訣』一卷 清周永年輯
- 『黃氏塾課』三卷 清黃式三撰
- 『家塾條規』一卷『義莊條規』一卷『詞堂條規』一卷『家廟條規』一卷即『安陽馬氏條規』 清馬丕瑤輯併撰
- 『讀書法彙』一卷 清杜貴墀撰
- などがある。

【通釈】

行を語る。第一

士大夫に対する教育法の大綱や要領は、世祖皇帝『臥碑』八條、聖祖皇帝『聖諭』十六條に述べつくされている。士大夫階級に属するものはつつしんで遵守している。これ以外、先学の教條や學規には、出版されたものがあるので、わざわざ述べる必要はない。ここでは今日の世間の風潮や本省の士大夫の氣質に密切に関係することをえらんで述べる。

— 1 —

一、德行謹厚。

德行不必說到精深微妙處。心術慈良不險刻。言行誠實不巧詐。舉動安靜不輕浮。不爲家庭事興訟。不致以邪僻事令人告訐。不謀人良田美產。住書院者、不結黨妄爲。無論大場小場、守規矩、不生事。貧者教授盡心、富者樂

善好施、廣興義學、捐錢多買書籍、置於本處書院。即爲有德。
近今風俗人心、日益澆薄。厚之一字、尤宜加意。

【書き下し】

一、德行は謹厚なれ。

德行は必ずしも精深微渺の處を説き到らず。心術は慈良にして險刻ならず。言行は誠實にして巧詐ならず。舉動は安靜にして輕浮ならず。家庭の事の爲に訟を興さず。邪僻の事を以て人をして訐を告げしむるを致さず。人の良田美産を謀らず。書院に住む者は、黨を結びて妄爲せず。大場・小場を論ずる無く、規矩を守り、事を生ぜず。貧者は教授に心を盡し、富者は善を樂しみ施すを好み、廣く義學を興し、錢を捐して多く書籍を買ひ、本處の書院に置く。即ち有徳と爲す。

近今、風俗人心、日び益ます澆薄なり。「厚」の一字、尤も宜しく意を加ふべし。

【註】

○大場 科挙における郷試をいう。郷試は、三年に一度、子年、卯年、午年、酉年に行われる科挙の第一段階の試験である。以下、會試、殿試と続き、郷試に及第したものを舉人、會試に及第したものを貢士、殿試に及第したものを進士という。

○小場 科挙における院試をいう。院試は県学の入学資格をうるための最終試験であり、これに合格して県学の学生となったものを生員あるいは秀才という。

○書院 科挙受験のための、私立あるいは公立の学校。唐の開元十三年、集賢殿修書所を集賢殿書院と改めて、経籍の刊行や遺書の徵求を掌る。宋初になり、白鹿、嵩陽、應天、岳麓の四大書院が設立され、経籍の講論を主

とした。明清になると科挙受験のためのものが多くなる。

○義學 公費あるいは私費の義援で設立され、貧民の子弟を教育する学校。学費は免除される。

【通釈】

一、德行は慎しみ深くあれ。

德行については深く細かいところまで述べる必要はないであろう。性格は善良で陰險ではない。言行は誠実でうそをつかない。立ち居振る舞いは落ち着いていて輕薄ではない。家庭の事で訴訟をおこさない。弱みにつけこまれて人から旧惡を責められないようにする。人の土地や財産を奪わない。書院に居住するものは、徒党を組んで悪行を行わない。大きな試験・小さな試験に関係なく、規矩を守り、騒ぎを起こさない。貧しいものは教育に心をつくし、裕福なものは喜んで慈善事業や喜捨を行い、大規模に義學を設立し、多額の寄付をして書籍をたくさん買い集め、出身の書院に置く。このような人が有徳者である。

昨今、風俗人心とも、日ごとに輕薄になっている。「厚」という一字にとりわけ心掛けなければならない。

— 2 —

一、人品高峻。

不涉訟。不出入衙門。不結交吏胥。不參預本州縣局事。必不得已入局者、不侵漁。教書院義學、不素餐、求功名、不夤緣。試場不作弊。武生勿與帽頂來往。蜀人謂匪類爲帽頂。即爲有品。

【書き下し】

一、人品は高峻なれ。

訟に涉らず。衙門に出入りせず。交りを吏胥に結ばず。本州縣の局事に參與せず。必ず已むを得ずして局に入る者は、侵漁せず。書院・義學に教へ、素餐せず、功名を求め、夤緣いんえんせず。試場にて弊を作さず。武生は帽頂と來往する勿れ。蜀人は匪類を謂ひて「帽頂」と爲す。即ち有品と爲す。

【通釈】

一、人品は高潔であれ。

訴訟にかかわらない。官庁に出入りしない。小役人ときあわない。自分の州や県の官庁の仕事に関与しない。やむをえず官庁に勤めるものは、私利をはからない。書院や義學で教育にたづさわりの功績もないのに給料をもらわず、科擧の合格をめざし、縁故で官途につかない。試験場で不正行為をしない。武科の学生は帽頂ときあつてはならない。蜀の人は匪賊ごうとき、ならずもの」のことを「帽頂」という。このような人が人格者である。

— 3 —

一、立志遠大。

不以一衿而自足。不以能文而自滿。立志希古、不隨流俗。無論學行兩端、常與古人比較、不以今人自寬。是謂遠大。常讀書、常對古人、即是與古人比較法。常看史事、胸襟自然闊大。常覽古人言行、志氣自然增長。志在聖賢、固是遠大、即思立功名、圖進取、亦是立志。若得一青衿、視同極品、自雄鄉里、營營錙銖、陋哉。

【書き下し】

一、立志は遠大なれ。

一衿を以て自ら足りとなさず。能文を以て自ら滿たず。志を立て古を希ひ、流俗に隨はず。學行の兩端を論ずる無く、常に古人と比較し、今人を以て自ら寛ゆるさず。是れを「遠大」と謂ふ。常に書を讀み、常に古人に對する、即ち是れ古人と比較するの法なり。常に史事を看れば、胸襟は自然に闊大なり。常に古人の言行を覽れば、志氣は自然に增長す。志、聖賢に在るは、固より是れ遠大、即ち功名を立て進取を圖るを思ふも、亦是れ立志なり。一青衿を得て、視ること極品に同じ、自ら郷里に雄まさり、錙銖しゆに營營たるが若きは陋なるかな。

【註】

○「志氣自然增長」の下に全集本には「案『與古人比較法』下、一本作『立身目無臨深爲高之見、學問自無進幹坳堂之見』』という案語がある。

【通釈】

一、志は遠大であれ。

(院試に合格して)生員になったからといって満足しない。文章にたくみだからといって満足しない。志を立て古人を慕い、流行を追わない。學問と品行のいづれを問わず、つねに古人と比較し、今の人を基準として自分を甘やかさない。これを「遠大」という。つねに書物を讀み、つねに古人に相對することが、とりもおさず古人と比較する方法である。つねに歴史の事実をみれば、度量は自然に大きくなる。つねに古人の言行をみれば、氣概は自然に高くなる。聖人賢人になろうという志を持つことは、もちろん遠大であるが、科擧に合格し、立身出世を目指すのも、志を立てることである。(院試に合格して)生員となっただけで、身、人臣を極めたとみなし、郷里でいばりちらし、あくせくとわずかな金儲けに走り回るのは、みにくいことである。

— 4 —

一、砥厲氣節。

士人立身涉世、居官立朝、皆須具有氣節。當言則言、當行則行、持正不阿、方可無愧爲士。鄉愿一途、世俗所喜、聖人所惡。然氣節非可猝辦。必須養之於平日。惟寒微時、卽與正士益友以名節廉恥互相激發、則積久而益堅定矣。

【書き下し】

一、氣節を砥厲せよ。

士人、身を立て世を涉り、官に居り朝に立つるには、皆須らく氣節を具有すべし。當に言ふべくんば則ち言ひ、當に行ふべくんば則ち行ひ、正を持して阿せずして、方めて士たるを愧づる無かる可し。鄉愿一途は、世俗の喜ぶ所なるも、聖人の惡む所なり。然れども氣節は猝かに辦ず可きに非ず。必ず須らく之を平日に養ふべし。惟だ寒微の時、即ち正士益友と名節廉恥を以て互いに相激發すれば、則ち積むこと久しくして益ます堅定なり。

【註】

○鄉愿 みかけは誠実で慎しみ深いが、実は売名行為を行う偽善者。

○「然氣節非可猝辦」の「辦」を、全集本は「辨」に作る。

【通釈】

一、氣節を磨きなさい。

士人が身すぎ世すぎし、役人となり朝廷に出仕するには、氣節を身につけなくてはならない。言わなければならないときは言い、行わなければならないときは行い、正しい道を守り、人にへつらわない、そのようであつてはじめて士であることを恥じることはない。偽善者面するのは、世俗は喜

ぶことであるのかもしれないが、聖人はにくむことである。しかし氣節はすぐに身につくものではない。かならず平生から養い育ておかなければならぬ。ただ微賤な時に、よき先輩や友人と名節や廉恥でたがいに切磋琢磨しあえば、年月がたてばたつほど氣節はますます強固になる。

— 5 —

一、出門求師。

伏處鄉僻、不見勝己。不惟無師、抑且無書。見聞何由廣博、志氣何由激發。古人千里負笈、豈得畏難辭勞。若守一先生之言、必致俗陋相承、愈傳愈謬。名師固難、益友不少。果能虛心廣益、友卽師也。

【書き下し】

一、門を出でて師を求めよ。

郷僻に伏し處れば、己に勝るを見ず。惟だに師無きのみにあらず、抑そも且つ書無し。見聞何に由りて廣博ならん、志氣何に由りて激發せん。古人は千里笈を負ふ、豈に難きを畏れて勞するを辭するを得んや。若し一先生の言を守れば、必ず俗陋相承け、愈いよ傳へて愈いよ謬るに致る。名師は固より難きも、益友は少なからず。果して能く心を虚しくし益を廣むれば、友は即ち師なり。

【通釈】

一、門を出て師を求めなさい。

片田舎に暮らしていれば、自分よりすぐれたものに出会うことはない。師がいなくても、そもそも書物すらない。それでは見聞をどうやって広めればよいのか、志気をどうやって高めればよいのか。古人は千里の道

を笈^{おい}を背負つ（て旅をして師のもとへゆき、勉強し）たのに、今の人がどうして艱難をおそれて旅の苦勞を避けてよいものだろうか。もし一人の先生の言葉だけを墨守すれば、かならず俗悪がうけつがれ、伝われば伝わるほど誤つてゆくことになる。立派な師はもちろんで難いが、ためになる友人は少なくない。（打算的な）心を持たず、よいところを吸収すれば、友人がとりもなおさず師である。

6

一、講求經濟。

扶持世教、利國利民、正是士人所應爲。宋范文正、明孫文正、並皆身爲諸生、志在天下。國家養士、豈僅望其能作文字乎。通曉經術、明於大義、博考史傳、周悉利病、此爲根柢。尤宜討論本朝掌故、明悉當時事勢、方爲切實經濟。蓋不讀書者爲俗吏。見近不見遠、不知時務者爲陋儒。可言不可行、即有大言正論、皆蹈唐史所譏高而不切之病。本朝書、必宜讀者甚多。但皇朝三通、大清會典之類、寒士不易得見。若聖武記、滿漢名臣傳、皇朝經世文編、國朝先正事畧之類、坊間多有、必須寓目。有志經世者、不厭求詳。

【書き下し】

一、經濟を講求せよ。

世教を扶持し、國を利し民を利するは、正しく是れ士人の分の應に爲すべき所なり。宋の范文正、明の孫文正は、並びに皆身、諸生たるも、志は天下に在り。國家、士を養ふに、豈に僅かに其の能く文字を作るを望まんや。經術に通曉し、大義に明らかにし、博く史傳を考し、周く利病を悉す、此れを根柢と爲す。尤も宜しく本朝の掌故を討論し、當時の事勢に明悉なるべくして、方めて切實たる經濟と爲す。蓋し書を讀まざる者は俗吏と爲す。

近きを見、遠きを見ずして、時務を知らざる者は陋儒と爲す。言ふ可きも行ふ可からず、即ひ大言正論有るも、皆『唐史』譏る所の「高きも切ならず」の病を蹈む。本朝の書、必ず宜しく讀むべき者甚だ多し。但だ皇朝の『三通』、『大清會典』の類は、寒士、見るを得易からず。『聖武記』『滿漢名臣傳』『皇朝經世文編』『國朝先正事畧』の若きの類は、坊間多く有り、必ず須く目を寓すべし。經世に志有る者は、詳を求むるを厭はず。

【註】

○經濟 「經世濟民」の略。世を治め人民をすくうこと。

○宋の范文正 宋の范仲淹のこと。字は希文、文正は諡である。『宋史』卷三百十四。

○明の孫文正 明の孫承宗のこと。字は稚繩、文正は諡である。『明史』卷二百五十。

○『唐史』譏る所の「高きも切ならず」 『新唐書』卷二百一文苑傳の杜甫の伝記中に、

甫甫は曠放にして自ら檢せず、好んで天下の大事を論ずるも、高きも切ならず（曠放不自檢、好論天下大事、高而不切）。とある。

【通釈】

一、經世濟民を講求しなさい。

当代の礼教を遵奉し、國家や人民に利益をもたらすのは、まさしく士人の務めとしてなすべきことである。宋の范文正〔范仲淹〕や明の孫文正〔孫承宗〕は、いづれも諸生の身でありながら、天下を治めようとする志を持っていた。國家が士を養成するのは、文章がうまいだけの人材を望んでいるのではない。經術に通曉し、大義に明らかで、ひろく史傳を研究し、利

害をきわめつくすこと、これが根柢である。とりわけ本朝の故実典章をよく研究し、当時の事の趨勢をよく知っていてこそ、はじめて実用的な経世済民である。思うに書を読まないものは俗吏であり、卑近なことだけを見て、遠大なことを見ず、時勢の急務を知らないものは陋儒である。（彼らは）口先ばかりで行動が伴わず、たとえ大きなことや正しいことを言っているも、いづれも『唐史』が譏るような「高尚であるが現実的ではない」という欠点を踏襲している。清朝の書物で読まなければならないものはとても多い。ただ皇朝の『三通』、『大清會典』の類は、貧しい学生は容易に見ることはできない。『聖武記』、『滿漢名臣傳』、『皇朝經世文編』、『國朝先正事畧』の類は、世間にたくさん流布しており、かならず目を通しておかねばならない。経世で身を立てる決心をしたものは、幅広く閲覧するのを面倒くさがってはならない。

【書目答問】

- ・新唐書二百二十五卷。明南監本附宋董衝釋音二十五卷。
- ・皇朝通典一百卷。乾隆三十二年救撰。殿本。
- ・皇朝通志二百卷。乾隆三十二年救撰。殿本。
- ・皇朝通考二百六十六卷。乾隆三十二年救撰。殿本。
- ・大清會典圖說事例一千一百三十二卷。嘉慶二十三年四次救撰。殿本禮部印行。康熙三十三年、雍正五年、乾隆二十九年本、皆止會典一百卷、乾隆本增則例一百八十卷、坊行巾箱本單刻會典一百卷。
- ・聖武記十四卷。魏源。通行大本、小字兩本。平定粵匪紀略二十二卷、同治四年湖北省官撰、通行刻本、亦可備考。
- ・國朝滿漢名臣傳八十卷。依國史鈔錄。通行本。滿四十八卷、漢三十二卷。
- ・皇朝經世文編一百二十卷。賀長齡、魏源撰。長沙原刻本、翻本多譌。此書最切用。是書不盡奏議、此兩體爲多、陸燿切問齋文鈔實開其先、不如

此詳。

- ・國朝先正事畧六十卷。今人。長沙刻本。初學便於檢閱。

— 7 —

一、習尚儉樸。

川省戸口最繁、民生日窘、大爲可慮。在長吏表率、固自別有設施。卽以士林而論、補救之道、惟有力行節儉一策。嘗謂一鄉風俗、視乎士類。果能相率崇儉、鄉里必有觀感、浮華漸除、生計自然漸裕。城市讀書人、尤戒專講酬酢世故。卽異日顯達仕宦、亦望以此自持、則廉正無欲、必有政績可觀。

【書き下し】

一、習ひは儉樸を尚ぶ。

川省、戸口最も繁く、民生日び窘むは、大いに慮んばかる可きと爲す。長吏の表率に在りては、固より自ら別に設施有り。卽し士林を以て論ずれば、補救の道は、惟だ力めて節儉を行ふの一策有るのみ。嘗に謂へらく、一郷の風俗は、士類に視ふ、と。果たして能く相率ゐて儉を崇べば、郷里必ず觀感有り、浮華漸く除かれ、生計自然に漸く裕かなり。城市の讀書人は尤も専ら酬酢世故を講ずるを戒む。卽ひ異日顯達仕宦するも、亦此を以て自ら持するを望めば、則ち廉正無欲にして、必ず政績の觀る可き有らん。

【通釈】

一、儉約をたつとぶ習慣を身につけなさい。

四川省は人口がもっとも多く、人民の生活が日々苦しいのは、大いに考慮しなければならぬことである。管理職の模範については、もちろん別に言うべきことがある。もし士大夫階級を基準に論じたならば、救済する方

法は、儉約に努力するという一策しかない。わたしはつねにこのように思う、ひとつの郷里の風俗は、士大夫階級のまねをする。もし士大夫階級が率先して儉約を貴ぶことができれば、郷里はかならずそれを見て感化され、浮かれた風潮は日増しに除かれ、生活は自然に追い追い裕福になる。城市(まち)城市の読書人が処世や世渡りの話しかしないことをとりわけ戒しめる。たとえ将来役人となり出世したとしても、このような態度でみずからを律していけば、清廉無欲にして、かならずすぐれた政治成績をあげることができるであろう。

8

一、讀書期於有成。

古人爲士、期於博通今古、德成名立。即使不遇、講學著書、安貧樂道、足以(樂)「癯」飢。惟其有道、所以可樂。今人入塾應考者雖多、名則爲士、而師承固陋、作輟無恒、帖括之外、固無所知、應試詩文、亦不及格、勉強觀場、妄思弋獲、至於困頓垂老、變計無及。農工商賈、皆所不曉、貧窘顛踣、計無復之、遂至喪行敗檢。竊願讀書者、務須專精奮發、學必求成。如自揣志向不堅、不如及早棄去、自占一業、尚可資事畜。慎無冒士之名、無士之實、悠悠泄泄、自誤平生也。

【書き下し】

一、書を読むは成る有るを期す。

古人、士と爲れば、博く今古に通じ、徳成り名立つるを期す。即ひ遇せざらしむるも、學を講じ書を著はし、貧に安んじ道を樂しめば、以て飢乏を癯すに足る。惟だ其れ道有るは、樂しむ可き所以なり。今人、塾に入り考に應ずる者多しと雖も、名は則ち士と爲るも、而れども師承固陋にして、作

輟恒無く、帖括の外、固より知る所無く、試に應ずるの詩文も亦格に及ばず、勉強して場を觀、妄りに弋獲を思ひ、困頓垂老に至るも、變計及ぶ無し。農工商賈は皆曉らかならざる所にして、貧窘顛踣、計として之に復する無く、遂に喪行敗檢に至る。竊かに願はくは、書を読む者は務めて須く專精奮發し、學必ず成るを求むべし。如し自ら揣りて志向堅からざれば、早に及んで棄去し、自ら一業を占むるに如かず、尚ほ事畜に資する有る可し。慎しんで士の名を冒して、士の實無く、悠悠泄泄として、自ら平生を誤ること無れ。

【註】

○「樂」を、全集本が「癯」に作るのに従う。

【通釈】

一、書物を読むのは大成を求めるためである。

古人が士となれば、古今の事にひろく通じ、徳が備わり名声が上がることを求める。たとえ厚遇されなかったとしても、學問を講じ書物を著わし、清貧に安んじ道を樂しめば、飢餓を充分にやすことができる。道を有することだけが、樂しむことができる唯一の方法である。今の人は塾に入つて考試に應じるものが多いが、(及第して)士という身分になつても、師から習ったことだけをかたくなに守り、やることなすことに一貫性がなく、試験勉強以外、まったくなにも知らず、考試に應じる詩文も格にあてはまらず、むりやり試験を受けて、むやみに及第をこいねがい、困窮して年をとつても、計画を変えようとしない。農工商賈についてはまったく精通しておらず、貧窮して生活が破綻しても、(農工商賈に)もどろろとする考えはなく、結局面目を失い、身を滅ぼす。わたしは内心ひそかに願う。書物を読むものは努力して發憤奮起し、學問はかならず大成を求めなければな

らない。もしみづから意志が強くないと判断すれば、早々に見切りをつけて、みづから他の仕事を始めたほうがよく、まだ（そのほうが）妻子を養うことができる。士という名をけがすも、士としての実体がなく、ぐずぐずためらって、みづから人生を誤ることがけつしてないように、と。

— 9 —

一、戒早開筆爲文。

枵腹搜枯、苦而無益。破承起講、枝節成篇、終身不能佳矣。近今風氣、年方幼學、五經未畢、即令強爲時文、其胸中尚無千許字、何論文辭、更何論義理哉。常見有開筆十年、而文理仍未明順者。豈非欲速反遲。多讀書、多讀古文、多讀時文、沛然有餘、再使操觚、自然可觀、稍加繩削、期年即已入籀。豈不甘苦懸絶哉。

【書き下し】

一、早に筆を開きて文を爲るを戒む。

枵腹にして枯を搜せば、苦にして益無し。承起の講を破りて、枝節、篇を成すも、終身佳なる能はず。近今の風氣、年方に幼學なるも、五經未だ畢らざれば、即ひ強ひて時文を爲らしむるも、其の胸中尚ほ千許の字無し、何ぞ文辭を論ぜん、更に何ぞ義理を論ぜん。常に筆を開くこと十年なるも、文理仍ほ未だ明順ならざる者有るを見る。豈に速かならんと欲して反つて遅きに非ずや。多く書を読み、多く古文を読み、多く時文を読み、沛然として餘り有りて、再び觚を操らしめば、自然に觀る可く、稍や繩削を加ふれば、期年にして即ち已に籀に入る。豈に甘苦懸絶ならずや。

【註】

○籀に入る 未詳。「籀」は「おさ」である。織機の付属具のひとつであり、経糸の位置を整え、緯糸を通すことにおさを圧して、織り目を細密にするのに用いる。ここでは完成する、出来あがるという意味か。

【通釈】

一、早くから文章を学び、すぐに作りはじめることを戒しめる。

無学のもが無理に行うことは、苦しいだけでなんの利益もない。起承転結のきまりを守らず、あれこれ文章を作っても、一生涯よいものを書くことはできない。最近の風潮では、年が幼学「十歳」になっても、まだ五經を学びおえてなければ、無理に時文を作らせても、その胸中にはまだ千字ほどの文字も存在していないので、どうして文章を議論することができようか、さらにどうして義理を議論することができようか。文章を学びはじめて十年もたっているのに、文章の論理がまだはつきりしないものをつねに見かける。これは早く上達しようとしてかえって遅くなったものではないだろうか。（二方）たくさん書物を読み、たくさん古文を読み、たくさん時文を読み、内から湧き出るものができてから、もう一度筆をとらせて文章を作らせれば、自然に見所のある文章を書くことができ、それに少し添削を加えれば、一年ですぐに籀に入る（？）。（この二者は）甘いものと苦いものほどかけ離れているではないか。

— 10 —

一、戒早出考。

消沮英華、増長習氣、最爲大忌。俗師爲見功計、以愚其居停。子弟爲嬉游計、以欺其長老。叩其說、則曰、學規矩。夫場屋規矩、皆爲防弊而設。果使自出心裁、則橐筆而入、納卷而出、自無從觸犯規矩。何必學哉。不學文

藝、而學其僕僕風廊乎。此與早開筆一條、皆論語所謂賊夫人之子者。近今學人、天資高明者小就、質稟魯鈍者無成。正坐此病、不知斷喪幾許人材矣。今爲疾呼痛詆。慈父良師、各宜垂爲厲禁者也。

【書き下し】

一、早に考へを出だすを戒む。

英華を消沮し、習氣を増長するは、最も大忌と爲す。俗師、見功の爲に計りて、以て其の居停を愚とす。子弟、嬉游の爲に計りて、以て其の長老を欺く。其の説を叩けば、則ち曰く、「規矩を學べ」と。夫れ場屋の規矩は、皆弊を防ぐが爲に設く。果して自ら心裁を出ださしむれば、則ち橐筆して入り、納卷して出で、自ら規矩を觸犯するに従し無し。何ぞ必ずしも學ばんや。文藝を學ばずして、其の僕僕たる風廊を學ばんや。此れと「早に筆を開く」の一條とは、皆『論語』の所謂「夫の人の子を賊ふ」者なり。近今の學人、天資高明なる者は小しく就り、質稟魯鈍なる者は成す無し。正に此の病に坐して、幾許の人材を斷喪するかを知らず。今爲に疾呼痛詆す。慈父良師は、各おの宜しく垂れて厲禁を爲すべき者なり、と。

【註】

○風廊 未詳。「風廊」には風通しのいい廊下という意味しかなく、ここに合う適訳が見あたらない。繁雜な関係のないことを学ぼうかという意味か。

○『論語』の所謂「夫の人の子を賊する」 『論語』先進篇に、

子路、子羔をして費の宰と爲さしむ。子曰く、夫の人の子を賊はん。子路曰く、民人有り、社稷有り。何ぞ必ずしも書を讀み然る後に學と爲さん。子曰く、是の故に夫の佞者を惡む。(子路使子羔爲費宰。子曰、賊夫人之子。子路曰、有民人焉。有社稷焉。何必讀書然後爲學。子曰、是故惡夫佞者)

とある。

【通釈】

一、早くに自分の考えをおおやけにすることを戒しめる。

才能を消費し、悪い習慣を増長するのは、もつとも忌むべきことである。俗師は自分の功績を示そうとして、雇い主をたぶらかす。子弟は遊ぼうとして、年長者をあざむく。その対応策をたずねると、「規矩を学びなさい」という。そもそも試験場の規則は、いづれも弊害を防ぐために設けられたものである。もしみづから善惡の判断ができれば、筆記用具を携帯して入場し、答案用紙を提出して退場するので、必然的に規則を犯そうにも犯しやうがない。どうして(規則を)学ぶ必要があるうか。文芸を学ばずに、其の僕僕の風廊を學ばんや(？)。この條と「早に筆を開く」の條「九條」は、いづれも『論語』の所謂「あの人の子をそこなう」ものである。昨今の学生は、天分が高いものでもわずかに成功するだけで、資質が魯鈍なものは成就しない。まさしくこの病にかかって、どれくらい有能な人材を失ったかわからない。だから声を大にして言いたい。やさしい父やすぐれた師とは、それぞれ厳しい躰を行える人である、と。

— 11 —

一、戒傲倖。

功名得失、自有命存。幸而得之、郷里詬病、不足爲榮。挾持誅求、毀家破産、亦不償失。不幸而敗、荷校罹刑、辱莫甚焉。應試求榮、何爲出此。使者於此輩、深惡其鄙、尤閔其愚。如志在表異齊民、則援例納粟。一階一命、亦邀章服之榮、尚覺光明坦蕩、何必冒法網、與貧士爭一青衿哉。因歧冒而借人三代、詐僞出繼者、實爲悖理忘本之尤。蜀中此弊頗熾、武童尤多。此輩不可教訓。惟當以

官法治之耳。又童試多有年才五六十、而填注八九十者。希圖倖進、便可疊叨恩榜、坐致詞林、以嚇愚蒙、爲患鄉里。近年已事、較然可觀。此尤巧詐無賴、與舞弊作奸無異。保結者不得辭其責。

【書き下し】

一、倖倖を戒む。

功名得失には、自ら命の存する有り。幸ひにして之を得るも、郷里誦病すれば、榮と爲すに足らず。挾持誅求し、家を毀ち産を破るも、亦失を償はず。不幸にして敗れ、校を荷ひ刑に罹れば、辱焉れより甚しきは莫し。試に應じ榮を求むるは、何爲れぞ此に出でん。使者、此の輩に於て、深く其の鄙を惡み、尤も其の愚を閔む。如し志、異を表はし民を齊しくするに在れば、則ち例を援きて粟を納めよ。一階一命なるも、亦章服の榮を邀へ、尚ほ光明坦蕩を覺ゆ。何ぞ必ずしも法網を冒し、貧士と一青衿を争はんや。岐冒に因りて人に三代を借り、詐はりて出繼と僞する者は、實は理に悖りて本を忘るるの尤と爲す。蜀中、此の弊頗る熾なり、武童尤も多し。此の輩、教訓す可からず。惟だ當に官法を以て之を治むべきのみ。又童試にて多く年才かに五六十にして八九十と填注する者有り。倖進を希圖し、便ち疊ねて恩榜を叨にし、坐ながらにして詞林に致りて、以て愚蒙を嚇かし、患を郷里に爲さしむ。近年の已事に、較然として觀る可し。此れ尤も巧詐無賴にして、弊を舞はし奸を作すと異なる無し。保結する者、其の責を辭するを得ず。

【註】

○岐冒 不詳。前後から判断すると、三代が賤業であつたので受験資格がないということであろうか。

○三代 学校試には「三代清白」という規定がある。受験者の曾祖父・祖父・父の三代が賤業に従事していれば試験を受けることが認められなかった。
○童試 生員の資格をうるための縣試・府試・院試を総称して童試という。

○年才かに五六十にして云々 郷試には、老年者を優待する法がある。七十歳以上の受験者に対して、答案に犯則がなければ、定員以外に及第させて挙人の称号を与えた。嘉慶十八年以後は八十歳以上の受験者に限ることとした。官吏は七十歳で定年となるので、實質的にはその名譽に満足するのみであつた。宮崎市定『科挙史』（平凡社、東洋文庫）P153、同上『科挙』（中公文庫）P118等参照。

【通釈】

一、倖倖を戒しめる。

科挙に及第するかどうか、成功するかどうかはもちろん運命である。幸運にも手に入ったとしても、郷里から後ろ指を指されたとなると、榮譽とするには十分ではない。權勢にまかせて厳しく税を取り立て（た結果、相手の）家庭がこれれ財産を失つても、損失を償つたりはしない。不幸にして（運命に）敗れて、牢獄に入れられ刑罰をこうむつたとすれば、これよりひどい屈辱はない。考試に應じて榮譽を求めることは、これ以外にあるのか。使者（である私）はこれらのともがらに対して、深くその卑俗をにくみ、とりわけその愚かさをあわれむ。もし名を挙げて人民を救う志があれば、前例にしたがつて規定の粟を納め（て官職を購い）なさい。（たとえ）一階一命の（最下級の）官職ではあるが、官吏の服を着る榮譽に浴し、（心が）明るく広々となつたように感じる。どうして法律を犯してまで、貧しい学生と一枚の青衿（生員の地位）を争う必要があるのか。岐冒（？）であることから、人に（曾祖父・祖父・父の）三代の家系を借りて、養子であると詐称するものは、実は道理にもとり根柢を忘れるという最大の行いである。蜀にはこの弊害がとても多く、武科の学生がとりわけ多い。これらのともがらは教ええとすことはできない。ただ官法に照らして処罰するしかない。さらに童試において年齢がわずかに五六十歳なのに八九十歳と記入するものがたくさんいる。棚牡丹的な及第をもくろんだところ、すぐに恩恵による及第を何

度も賜り、いながらにして翰林院にまで昇りつめ、(その結果 愚昧な民をびつくりさせ、郷里に災いをもたらした。近年の事例のうちに、このようなことがはつきり見てとれることができる。これはとりわけ狡猾悪質であり、不正や悪事を行うのとなんら異ならない。保証人となったものはその責任をまぬがれることはできない。

— 12 —

一、戒濫保。

顧槍之弊、川省爲最。保結廩生、實爲罪魁。發覺褫黜、漁利有限、功名不貲、不待言矣。假如通縣廩生十二人、人保三槍、槍作三卷、則捉刀之作、已及百篇。況此閒槍替、一場尚不止數十人。學額能有幾何。童生有何幾望。如此十年、膠庠盡是富兒、寒士無一家一人讀書者矣。爲廩保者、獨不爲己之子弟應試計乎。不特此也。人人皆不讀書、則己欲求覓館地、亦不可得。豈非自貽伊戚哉。敬告爲廩生者、不保槍冒、即是修德積善、爲己身及子孫造福也。提學專主寬政者、往往於報政受代之日、將濫保褫黜者、通行開復、以致視禁令爲具文。使者目擊蜀事、意在救時、閱此孤寒無路、不憚身爲怨府也。

【書き下し】

一、濫保を戒む。

顧ふに槍の弊は、川省最と爲す。保結せる廩生は、實は罪魁と爲す。發覺すれば褫黜せられ、漁利限り有り、功名貲はざるごと、言を待たず。假如し通縣の廩生十二人、人、三槍を保し、槍、三卷を作れば、則ち捉刀の作、已に百篇に及ぶ。況んや此の閒の槍替は、一場に尚ほ數十人に止まらず。學額は能く幾何か有らん。童生何幾の望み有らん。此の如くすること十年なれば、膠庠盡く是れ富兒、寒士には一家に一人の書を読む者無し。廩保を爲す者は、獨り己の子弟の、試に應ずるの爲に計らざるや。特だ此れの

みならず。人人皆書を読まざれば、則ち己、館地を求覓せんと欲するも、亦得可からず。豈に自ら伊の戚ひを貽すに非ずや。敬しんで廩生たる者に告ぐ。槍冒を保せざるは、即ち是れ徳を修め善を積み、己が身及び子孫の爲に福を造すなり。提學の、専ら寬政を主とする者は、往往にして報政受代の日に於て、濫保褫黜者を將て、通行開復し、以て禁令を視して具文と爲すを致す。使者、蜀の事を目撃し、意は時を救ふに在り、此の孤寒路無きを憐み、身、怨府と爲るを憚らざるなり。

【註】

○保結せる廩生 「保結」は保証人となること。「廩生」は「廩膳生」の略で、生員のうちの、若干の学資を支給されるものである。童生が縣試をはじめとする学校試を受けるにあたって、廩生を保証人として立てなければならぬ。相当の謝礼が出るが、もし不正があればその責任をとって処罰される。

【通釈】

一、みだりに身元保証人となるのを戒しめる。

思うに替玉受験の弊害は、四川省がもつともひどい。(替玉受験者の)保証人となる廩生は、実は大罪人である。發覺すれば処罰され、利益もわずかで、(科挙及第という)名誉も受けられないことは言うまでもない。もし全県の廩生十二人、一人が三人の替玉の保証人となり、その替玉が三卷の答案を作れば、代筆の作はすでに百篇にもなる。ましてや当地の替玉受験者は、ひとつの試験会場に数十人に止まらない。そうすると不正及第者はどれほどの数になるであろうか。童生にどんな希望があるか。十年間このような状態であれば、学校は金持ちの子弟ばかりで、貧しい学生の家庭にはひとりとして書を読むものはいなくなる。童生の保証人となる廩生は、受験する自分の子弟のためだけにやってやることはできないものか。これ

だけではない。人々がだれひとり書を読まなければ、土地や建物を手に入れようと思つても手に入れることができない。みづから後悔を残すことではないだろうか。敬しんで廩生たるものに告ぐ。替玉受験者の保証人とならないことが、とりもなおさず徳を修め善行を積みかさね、おのが身と子孫のために福をもたらすことにほかならない、と。寛容な政治を中心とする提督学政は、往往にして任期を終えて転任する日に、替玉受験者の身元保証人となつて処罰されたものをもとの官にもどし、禁令を空文化してしまふ。使者（である私）は、蜀の事情を目の当たりにし、このような時勢を救おうという意志があり、これら貧乏で身寄りのない人たちに前途がないのを憐れんでおり、私が怨みの的となるのもいとわれない。

— 13 —

一、戒好訟。

川省士林、訟風甚熾。瑣瑣瀆告、已爲非理。甚者牟利居間、爲輔爲坐、最玷儒冠。或有本無所爲、負氣忿爭、株連糾結、尤爲無謂。不思敗者固辱、勝者僕僕對簿、徒隸雜處、亦有何榮。蓋百戰百勝、不如偃兵而民安、百訟百直、不如無爭而人服。且訟則終凶。未聞以此致富者。州縣到官之初、往往訪求訟師、多方捕治。積成冤對、終罹網羅、何苦爲此。

【書き下し】

一、訟を好むを戒む。

川省の士林、訟風甚だ熾なり。瑣瑣として告を瀆すは、已だ非理と爲す。甚だしき者は利を牟り閒に居り、輔を爲し坐を爲し、最も儒冠を玷つ。或いは本爲す所無く、氣に負ひて忿争し、株連糾結する有るは、尤も謂ひ無しと爲す。思はず、敗るる者は固より辱かしめられ、勝つ者は僕僕として簿に對し、徒隸もて雜處し、亦何の榮か有らんことを。蓋し百戰百勝は、

兵を偃せて民安んずるに如かず、百訟百直は、争ふ無くして人服するに如かず。且つ訟は則ち終れば凶なり、未だ此を以て富を致す者を聞かず。州縣、官に到るの初め、往往にして訟師を訪求し、多方に捕治す。積みて冤對を成し、終に網羅に罹る、何ぞ苦しんで此を爲さん。

【註】

○訟は則ち終れば凶なり 『周易』訟に、

訟は孚有りて窒がる。惕れて、中すれば吉、終れば凶なり。大人を見るに利あり。大川を渉るに利あらず。（訟、有孚、窒。惕、中吉、終凶。利見大人。不利涉大川）とある。

【通釈】

一、好んで訴訟をおこすことを戒しめる。

四川省の士大夫階級は、訴訟の風潮がとても盛んである。些細なことで訴訟をおこすのは、まったく道理にはずれた行為である。ひどいものは間に立つて利益を搾取し、弁護をしたり訴えたりする。（こういうた行為は）もつとも儒者としての威厳を傷つける。あるいはもともとないのに言いがかりをつけ、勢いにまかせて争い、（その結果）周りのものを巻き添えにして罪におとすのはもつとも無意味である。敗訴したものはもちろん恥辱をこうむるが、勝訴したものも何度も呼び出されて審問をうけ、奴隸のようなあつかいをされ、なんの榮譽ももたらさないことに考えが及ばない。思うに百回戦つて百回勝つのは、武器を使用せず人民が安んじるのにはおよばず、百回訴訟をおこして百回勝つのは、争わずに人が服するのにはおよばない。なおかつ訴訟は強引に行うと凶であり、これまで訴訟で裕福となつたものを聞いたことはない。州縣官が赴任して最初に行うのは、往

々にして違法な弁護人を探し求め、あらゆる手段を講じて取り締まる。(訴訟を繰り返すと、怨みが) 積み重なって怨恨となり、結局法の網にかかるというのに、どうしてわざわざ苦しんでこんなことを行う必要があるのか。

— 14 —

一、戒孳利爲利。

此乃天下通病。然須立志戒之。先除此病、然後可言品學經濟。墮行干禁、多由於此。犯此者、所以自解、或曰家貧、或曰親老、不知渴死不飲盜泉。祀親必求仁粟。何乃以此藉口耶。寒士謀生、自有正道。止可擇其不傷義者爲之耳。薛文清有言、爲學必先治生。或疑治生詎非爲利。要知不然。學者治生之道、修德勤儉、博學多能而已。有此數善、理無餓莩。卽如教授餬口者、苟能學優文美、訓課誠篤、成就後進、不較錙銖、自然履履爭迎、羔雁踵至。推此以求、凡執他業者、何獨不然。豈必損人自利。作奸犯科、乃可生於人世哉。

【書き下し】

一、孳利を爲すを戒む。

此れ乃ち天下の通病なり。然れども須く志を立てて之を戒むべし。先づ此の病を除き、然る後に品學經濟を言ふ可し。行を墮し禁を干すは、多く此に由る。此を犯す者、自ら解する所以は、或いは曰く、「家貧し」と、或いは曰く、「親老ゆ」と。知らざるか、渴死するも盜泉を飲まず、親を祀るには必ず仁粟を求むるを。何ぞ乃ち此を以て口を藉らんや。寒士、生を謀るに、自ら正道有り。止だ其の、義を傷つけざる者を擇んで之を爲す可きのみ。薛文清言有り、「學を爲すには必ず先づ生を治めよ」と。或ひと、「生を治むるは詎ぞ利を爲すに非ずや」と疑ふも、要ず然らざるを知る。學ぶ

者の生を治むるの道は、修德・勤儉・博學・多能のみ。此の數善有れば、理として餓莩無し。卽ひ教授して口に餬する者の如きも、苟しくも能く學優れ文美にし、訓課誠篤にして、後進を成就し、錙銖を較はざれば、自然に履履爭ひ迎へ、羔雁踵に至る。此を推して以て求むれば、凡そ他業を執る者、何ぞ獨り然らざらん。豈に必ず人を損ひ自ら利し、奸を作し科を犯して、乃ち人の世に生くる可けんや。

【註】

○渴死するも盜泉を飲まず 『淮南子』説山訓に、

曾子、廉を立て、盜泉を飲まず。(曾子立廉、不飲盜泉)

『新序』節士に、

故に孔子、席正しからざれば坐せず、割正しからざれば食はず、盜泉の水を飲まず。(故孔子席不正不坐、割不正不食、不飲盜泉之水)

陸機「猛虎行」に、

渴するも盜泉の水を飲まず、熱するも惡木の陰に息はず。(渴不飲盜泉水、

熱不息惡木陰)

とある。

○親を祀るには必ず仁粟を求む 「仁粟」の出典は未詳。ただ『史記』伯夷

列傳には、義として周の粟を食わない話として、

武王已に殷の亂を平らげ、天下周を宗するも、伯夷、叔齊之を恥ぢ、義として周の粟を食はず、首陽山に隱れ、薇を采りて之を食ふ。餓ゑて且

つ死するに及んで、歌を作る。(武王已平殷亂、天下宗周、而伯夷、叔齊

恥之、義不食周粟、隱於首陽山、采薇而食之。及餓且死、作歌)

などとある。

○薛文清 明の薛瑄のこと。字は德温、文清は諡である。『明史』卷二百八十二儒林傳に伝がある。この語の出典は未詳。ただ「戒子書」に、

男子は要ず治生を以て急と爲す。農商工賈の間に於て、務めて一業を執り、其の器具に精とし、其の利心に薄なるを、長久の計と爲す。（男子要以治生爲急。於農商工賈之間、務執一業、精其器具、薄其利心、爲長久之計）

とあり（正誼堂叢書『薛敬軒先生文集』卷一所收の「戒子書」にはこの一文がない。待考）、元の許衡は、

學を爲す者は、治生を最も先務と爲す。苟しくも生理足らざれば、則ち爲學の道に于て妨ぐる所有り。（爲學者、治生最爲先務。苟生理不足、則于爲學之道有所妨）

という（鄭士范「許魯齋先生年譜」）。

【通釈】

一、金儲けにはげむのを戒しめる。

これは天下の通弊である。しかし志を立ててこれを戒しめなければならぬ。まづこの弊害を取り除いてはじめて品行学問や経世済民を語ることができる。行いが墮落し禁令を犯すのは、これが原因であることが多い。この弊害を犯すものは、みづからいいわけをして、「家が貧しいからだ」といつたり、「親が年老いたからだ」という。たとえ喉が渴いて死んだとしても盗人の泉の水は飲まず、親を祀るには必ず仁粟を探し求めるということを知らないのか。どうしてこれを口実にしてよいものか。貧しい学生が生計を立てるには当然正しい方法がある。それはただ義を傷つけない方法を選んで実行するのみである。薛文清「薛瑄」は「学問を行うにはかならずまづ生計の道を確立しなければならない」というのに対して、あるひとは「生計の道を確立するのは金儲けをするということではないのか」と疑問を呈するが、決してそうではない。学ぶものが生計を立てる方法は、修徳・勤儉・博学・多能にすぎない。このいくつかの長所があれば、餓死する道理

はない。たとえ教授で生計を立てているものであっても、もし学問にすぐれ、文章がうまく、教え方が誠実で、後進を育て、わずかな利を争うことがなければ、自然に人が争って迎えにやってくる、礼物がこぞつてもたらされる。これから推測して考えると、他の職業についているものがどうして異なるうか。どうして人を傷つけ自分に利益をもたらし、不正を行い法律を犯しておきながら、人の世で生きることができようか。

—— 15 ——

一、戒輕言著書刻集。

士生今日、典籍詳備、但當讀書耳。讀且不能盡、名且不悉知、何暇言著書哉。四部九流、各種學問、專家成書、已如煙海。即以國朝人而論、已難殫述。今人偶有所得、早爲前人道及、甚至久爲前人唾棄而駁正之矣、尚津津然筆之於書乎。經學尤不可輕言著述、徒爲通人所訶而已。必能精通專門之學、讀盡專門之書、眞有所見出乎其外、方可下筆。至如詩文集、古人名家太多、當世識者亦不少。末學下士、既無根柢、又鮮功力。學作之則可。勿輕言刻集行世也。

【書き下し】

一、輕がるしく書を著し集を刻するを言ふを戒む。

士、今日に生れて、典籍詳備す。但だ當に書を読むべきのみ。讀むことすら且つ盡す能はず、名すら且つ悉くは知らざるに、何ぞ書を著すを言ふに暇あらんや。四部九流、各種の學問、專家書を成すこと、已に煙海の如し。即ひ國朝人を以て論ずるも、已に殫述し難し。今人偶たま得る所有るも、前に前人の道及と爲し、甚だしきは久しく前人に唾棄せられ之を駁正するも、尚ほ津津然として之を書に筆するに至るをや。經學は尤も輕がるしく著述

を言ふ可からず、徒だ通人の誦る所と爲るのみ。必ず能く専門の學に精通し、専門の書を讀み盡し、眞に見る所其の外に出づる有りて、方めて筆を下す可し。詩文集の如きに至りては、古人の名家太だ多く、當世の識者も亦少からず。末學下士は、既に根柢無く、又功力鮮し。之を作るを學ぶは則ち可、輕がるしく集を刻し世に行はると言ふこと勿れ。

【通釈】

一、著述や出版のことを輕々しく口にするのを戒しめる。

士が生まれた今日の世は、典籍が完備しているので、ただひたすら書を読むしかない。読むことさえ読みつくすことができず、書名さえ知りつくしていないのに、(そういうものが) どうして著述のことを口にする暇があるうか。四部九流をはじめとして、各種の學問には専門家の著述がすでに果てしない大海原のごとく多数存在している。國朝人を例として論じてみても、述べ尽すことはむづかしい。今の人がたまたま発見したことがあったとしても、早々と前人が言及していたり、はなはだしいことに前人に唾棄され、非難訂正された説なのに、それをなお嬉々として書物に記載することについてはなおさらである。とりわけ經學は輕々しく著述のことを口にしてはならず、(口にしたとしても) ただ通人に非難されるだけである。かならず専門の學に精通し、専門の書を読みつくし、自分の見解がほんとうに外に公表できるものであつて、はじめて筆を下すことができる。詩文集については、古人の名家はとも多く、當代の有識者も少なくない。淺學や下士は、根柢がないうえに、努力も少ない。作ることを學ぶのはよいが、輕々しく出版し世間に流通させることを口にしてはならない。

一、戒講學誤入迷途。

近年川省陋習、扶箕之風大盛。說文引尚書稽疑、字作呬。然非今日扶箕字。爲其術者、將理學釋老方伎、合而爲一。昨在省會、有一士以所著書來上。將陰陽文、感應篇、世俗道流所謂九皇經、覺世經、與大學、中庸、雜糅牽引。忽言性理、忽言易道、忽言神靈果報、忽言丹鼎符籙。鄙俚拉雜、有如病狂。此大爲人心風俗之害。當卽痛訶而磨去之。明理之士、急宜猛省。要知此乃俗語所謂魔道、卽與二氏亦無涉也。

此間奸民、更有託詞宣講聖論。實卽如上項所爲。名是實非。使官師里長、不能明禁、尤爲狡黠可慮。

士人志切科名、往往喜談陰陽文、感應篇二書。二書意在勸化庸愚。固亦無惡於天下。然二書所言、亦有大端要務。今世俗奉此、則惟於其末節碎事、營營焉用其心。良可怪也。儒者自有十三經、教人爲善、何說不詳。果能身體力行、倫紀無虧、事事忠厚正直、自然行道有福。何用更求他途捷徑哉。

【書き下し】

一、講學誤りて迷途に入るを戒む。

近年、川省の陋習は、扶箕の風大いに盛んなり。『說文』は『尚書』の「稽疑」を引きて、字を「呬」に作る。然れども今日の扶箕の字に非ず。其の術を爲す者、理學・釋老・方伎を將て、合して一と爲す。昨、省會に在りて、一士、箸す所の書を以て來り上る有り。『陰陽文』、『感應篇』、世俗の道流の所謂『九皇經』、『覺世經』を將て、『大學』、『中庸』と雜糅牽引す。忽ち性理を言ひ、忽ち易道を言ひ、忽ち神靈果報を言ひ、忽ち丹鼎符籙を言ふ。鄙俚拉雜にして、病狂の如き有り。此れ大いに人心風俗の害と爲す。當に卽ち痛訶して之を磨去すべし。理に明らかなるの士、急いで宜しく猛省すべし。要ず此れ乃ち俗語の所謂「魔道」にして、卽ち二氏と亦渉る無きを知るなり。此の間の奸民に、更に詞を聖論を宣講するに託する有り。實は卽ち上項爲

す所の如し。名は是なるも實は非なり。官師里長をして明禁する能はざらしむるは、尤も狡黠慮んばかり可きと爲す。

士人の志は科名に切なるも、往往にして喜んで『陰陽文』、『感應篇』の二書を談ず。二書は意、庸愚を勸化するに在り。固より亦天下に惡無し。然れども二書言ふ所にも亦大端要務有り。今、世俗、此を奉ずるは、則ち惟だ其の末節碎事に於て營營焉として其の心を用ふるのみ。良に怪しむ可きなり。儒者には自ら『十三經』有り、人に善を爲すを教ふること、何ぞ説くこと詳らかならざる。果して能く身體力行し、倫紀虧くる無く、事事忠厚正直ならば、自然に道を行ひて福有り。何ぞ更に他途捷徑を求むるを用ひん。

【註】

○扶箕 占いの一種。扶乩と同じ。

○『説文』は『尚書』の「稽疑」を引きて、字を「吓」に作る 『尚書』洪範に、

七に稽疑。擇んで卜筮人を建立し、乃ち卜筮を命ず。（七稽疑。擇建立卜筮人、乃命卜筮）
とあり、『説文』三下に、

吓は卜して以て疑を問ふなり。口卜に従ふ。讀むこと稽と同じ。書に云ふ、吓疑。（吓卜以問疑也。从口卜。讀與稽同。書云、吓疑）とある。

○『陰陽文』 『文昌帝君陰陽文』のこと。文昌帝君名義で頒行されたもので、人に陰徳を施すことを勧める。

○『感應篇』 『太上感應篇』のこと。天人感應と因果応報の思想について述べる。

○『九皇經』 『北斗九皇隱諱經』のこと。北斗九星玉皇神君の法について

述べる。

○『覺世經』 不詳。

○俗語の所謂「魔道」 仏教語で魔界をいう。

○全集本は「即與二氏亦無涉也」の下に「案一本多良士勿爲所惑」（案ずるに一本には『良士惑ふ所と爲る勿れ』多し）という案語がある。

【通釈】

一、講学があやまった道に入るのを戒しめる。

近年、四川省の惡習は、扶箕の風潮が盛んなことである。『説文』は『尚書』の「稽疑」を引いて、字を「吓疑」に作る。しかし今日の扶箕の字ではない。この術を行うものは、理学・釋老・方伎を合せてひとつにしている。昨日、省都にいと、自分が著わした書物をもつてひとりの士がやってきた。（その書物は『陰陽文』、『感應篇』、世俗の道流の所謂『九皇經』、『覺世經』を、『大學』、『中庸』とまじえて引用したものであった。突然性理について述べたかと思うと、突然易道について述べたり、突然神靈や因果応報について述べたかと思うと、突然丹鼎（道家で用いる、薬を練るための器）符籙（道家に伝わる秘文の総称）について述べる。鄙俗でまとまりがなく、まるで精神を病んでいるかのようだ。これは人心風俗に大いに弊害がある。ますます痛罵して排撃するべきである。道理をよくわきまえた士は今すぐ猛省しなければならぬ。これは俗語の所謂「魔道」というものであって、二氏（老子・釈迦）とはまったく関係がないことを知らなければならない。

当地の惡賢いやからに、さらに言葉を聖論の講義に仮託するものがあるが、實質は上項で述べたことと同じである。名称は正しくても実体はあやまりである。役人や村長にはつきり禁止させないようにするのは、とりわけ狡猾で憂慮すべきである。

士大夫は科挙に及第することが第一の目的であるのに、往々にして喜んで

『陰陽文』『感應篇』の二書について議論する。この二書は愚者を勧化する意図があり、もちろん天下に悪影響はない。しかし二書が述べる内容には重要なこともある。今、世間がこの書を信奉するのは、ただ枝葉な細かいことに對して心を用いるだけである。これはほんとうにおかしなことである。儒家には当然『十三經』があり、人に善を行わせることを詳しく説明しているではないか。もし身をもつて実行し、人としての道に欠けることなく、何事も忠厚正直であることができれば、自然に道を行ひ福がもたらされる。どうしてさらに他の道や近道を求める必要があるうか。

— 17 —

一、戒自居才子名士。

文學之道、先貴篤誠。世有聰明浮薄之人、能作淺薄詩數首、畧記僻冷書數語、便兀昇放蕩、乖僻不情、自命爲才子名士。不惟見笑大方、一染此種氣習、終身不可入道。如明之桑悅、徐渭、乃病狂人。陳繼儒、金人瑞、乃俗陋人。所爲不足效也。夫高陽才子、諸葛名士、果是何等人物、乃以纖人冒居、致令世俗詬病、視才子名士爲一等極可憎之人、累及嘉名、深可疾也。說文、才、草木之初也。與材通。本就草木之質言。舜所舉十六族、有德有用、如良材美器。故謂之才子。舜流四族、敗類害物、如惡木毒草。故謂之不才子。後世但以能文者爲才子、失之遠矣。月令、聘名士、禮賢者。正義引蔡中郎說、名士者謂其德行貞絕、道術通明。賢者名士之次。其推崇如此。近世直視爲江湖游客而已。

【書き下し】

一、自ら才子名士に居るを戒む。

文學の道は、先づ篤誠を貴ぶ。世に聰明浮薄の人有り、能く淺薄の詩數首を作り、畧しく僻冷の書數語を記し、便ち兀昇放蕩、乖僻不情、自ら命じ

て才子名士と爲すは、惟だに大方に笑はるるのみにあらず、一に此の種の氣習に染り、終身道に入る可からず。如へば明の桑悅・徐渭は乃ち病狂の人なり。陳繼儒・金人瑞は乃ち俗陋の人なり。爲す所は效ふに足らざるなり。夫れ高陽の才子、諸葛の名士、果して是れ何等の人物、乃ち纖人を以て冒居し、世俗をして詬病し、才子名士を視して一等極めて憎む可きの人と爲さしむるに致り、累、嘉名に及ぶ、深く疾む可きなり。『說文』に、「才は草木の初めなり」と。材と通ず。本、草木の質に就いて言ふ。舜舉ぐる所の十六族は、德有り用有ること、良材美器の如し。故に之を「才子」と謂ふ。舜の流する四族は、類を敗り物を害すること、惡木毒草の如し。故に之を「不才子」と謂ふ。後世但だ文を能くする者を以て才子と爲すは、之を失すること遠し。『月令』に「名士を聘し、賢者を禮す」と。『正義』蔡中郎を引きて、「名士とは其の德行貞絶、道術通明なるを謂ふ。賢者は名士の次なり」と説く。其の推崇すること此の如し。近世直ちに視して江湖の游客と爲すのみ。

【註】

○「篤誠」を全集本は「誠篤」に作る。

○桑悅 明の人。字は民懌。『明史』卷二百八十六。

○徐渭 明の人。字は文長。『明史』卷二百八十八。

○陳繼儒 明の人。字は仲醇。『明史』卷二百九十八。

○金人瑞 清の人。字は聖歎。『碑傳集補』卷四十四。

○高陽の才子 『左傳』文公十八年に、

昔、高陽氏に才子八人有り。蒼舒、隤數、樛戴、大臨、扈降、庭堅、仲容、叔達あり。齊聖廣淵、明允篤誠なり。天下の民、之を八愷と謂ふ。

(昔高陽氏有才子八人、蒼舒、隤數、樛戴、大臨、扈降、庭堅、仲容、叔達。齊聖廣淵、明允篤誠。天下之民、謂之八愷)

とある。

○諸葛の名士 この例が適當であるかどうかかわからないが、『三國志』卷三十

五蜀書・諸葛亮傳の注に『襄陽記』を引いて、

『襄陽記』に曰く、黄承彦なる者は、高爽開列にして、沔南の名士と爲す。諸葛孔明に謂ひて曰く、「君、婦を擇ぶと聞く。身に醜女有り。黄頭黒色なるも、才は相配するに堪ゆ」と。孔明許す。即ち載せて之を送る。時人以て笑樂と爲す。郷里、之が諺を爲りて曰く、「孔明の作に婦を擇ぶこと莫れ、正に阿承の醜女を得」と。（襄陽記曰、黄承彦者、高爽開列、爲沔南名士。謂諸葛孔明曰、「聞君擇婦。身有醜女。黄頭黒色、而才堪相配」。孔明許。即載送之。時人以爲笑樂。郷里爲之諺曰、「莫作孔明擇婦、正得阿承醜女」）とある。

○『説文』に、「才は草木の初めなり」 『説文』六上に、

才は艸木の初めなり。一の上に一を貫ぬくに従ふ。將に枝葉を生ぜんとす。一は地なり。（才、艸木之初也。从一上貫一。將生枝葉。一、地也）とある。

○舜擧ぐる所の十六族 高陽氏の才子八人と高辛氏の才子八人のあわせて十六人を指す。『左傳』文公十八年に、

昔、高陽氏に才子八人有り。蒼舒、隤斂、檮戴、大臨、扈降、庭堅、仲容、叔達あり。齊聖廣淵、明允篤誠なり。天下の民、之を八愷と謂ふ。高辛氏に才子八人有り。伯翳、仲堪、叔獻、季仲、伯虎、仲熊、叔豹、季狸あり。忠肅恭懿、宣慈惠和なり。天下の民、之を八元と謂ふ。此の十六族や、世よ其の美を濟し、其の名を隕さず。以て堯に至る。堯、擧ぐる能はず。舜、堯を臣とし、八愷を擧げ、后土を主りて、以て百事を揆らしむ。不時に序せざる莫く、地平らかに天成ぐ。八元を擧げ、五教を四方に布かしむ。父は義、母は慈、兄は友、弟は恭、子は孝にして、内平らかに外成ぐ。（昔高陽氏有才子八人。蒼舒、隤斂、檮戴、大臨、扈降、庭堅、仲容、叔達。齊聖廣淵、明允篤誠。天下之民、謂之八愷。高

辛氏有才子八人。伯翳、仲堪、叔獻、季仲、伯虎、仲熊、叔豹、季狸。忠肅恭懿、宣慈惠和、天下之民、謂之八元。此十六族也。世濟其美、不隕其名。以至于堯。堯弗能擧。舜臣堯、擧八愷、使主后土、以揆百事。莫不時序、地平天成。擧八元、使布五教于四方。父義、母慈、兄友、弟恭、子孝、内平外成）とある。

○舜の流する四族 帝鴻氏の子である渾敦、少皞氏の子である窮奇、顓頊氏の檮杌、さらに縉雲氏の子である饕餮の四人を言う。舜はこの四人を流罪に処し、四方の辺境を守らせた。『左傳』文公十八年に、

昔、帝鴻氏に不才子有り。義を掩ひ賊を隠し、好んで凶徳を行ひ、醜類惡物、頑嚚不友、是れ與に比周す。天下の民、之を渾敦と謂ふ。少皞氏に不才子有り。信を毀ち忠を廢し、惡言を崇飾し、靖なれば謗し庸なれば回ひ、讒を服ひ愚を蒐めて、以て盛徳を誣ゆ。天下の民、之を窮奇と謂ふ。顓頊氏に不才子有り。教訓す可からず、話を知らず、之に告ぐれば則ち頑、之を舍つれば則ち嚚、明徳を傲很して、以て天常を亂る。天下の民、之を檮杌と謂ふ。此の三族や、世よ其の凶を濟し、其の惡名を増して、以て堯に至る。堯去る能はず。縉雲氏に不才子有り。飲食に貪り、貨賄を冒り、侵欲崇侈して、盈厭す可からず、聚斂して實を積み、紀極を知らず、孤寡に分たず、窮匱を恤へず。天下の民、以て三兇に比し、之を饕餮と謂ふ。舜、堯を臣として、四門に賓し、四凶を流し、渾敦、窮奇、檮杌、饕餮、諸を四裔に投じて、以て螭魅を禦ぐ。是を以て堯崩じて、天下一の如く、心を同じくして舜を戴き、以て天子と爲す。其の十六相を擧げ、四凶を去りしを以てなり。（昔帝鴻氏有不才子。掩義隱賊、好行凶徳、醜類惡物。頑嚚不友、是與比周。天下之民、謂之渾敦。少皞氏有不才子。毀信廢忠、崇飾惡言、靖譖庸回、服讒蒐愚、以誣盛徳。天下之民、謂之窮奇。顓頊氏有不才子。不可教訓、不知話言、告之則頑、

舍之則歸、傲很明德、以亂天常。天下之民、謂之禱祝。此三族也、世濟其凶、增其惡名、以至于堯、堯不能去。縉雲氏有不才子。貪于飲食、冒于貨賄、侵欲崇侈、不可盈厭、聚斂積實、不知紀極、不分孤寡、不恤窮匱、天下之民、以比三兇。謂之饕餮。舜臣堯、賓于四門、流四凶、渾敦、窮奇、檮杌、饕餮、投諸四裔、以禦魑魅。是以堯崩、而天下如一、同心戴舜、以爲天子、以其舉十六相、去四凶也）とある。

○『月令』に「名士を聘し、賢者を禮す」 『禮記』月令・季春之月に、天子、徳を布し恵を行ひ、有司に命じ、倉廩を發し、貧窮に賜はり、乏絶を振ひ、府庫を開き、幣帛を出だし、天下に周し。諸侯に勉め、名士を聘し、賢者を禮す。（天子布徳行恵、命有司、發倉廩、賜貧窮、振乏絶、開府庫、出幣帛、周天下。勉諸侯、聘名士、禮賢者）とある。

○『正義』蔡中郎 蔡中郎は漢の蔡邕のことである。『禮記』月令・季春之月の正義に、蔡氏云ふ、名士とは其の徳行貞絶、道術通明、王者、臣とするを得ずして、隠居して位に在らざる者を謂ふなり。賢者は、名士の次なり。亦隱者なり。名士は優なるが故に束帛を加ふ。賢者は之を禮するのみ。（蔡氏云、名士者謂其徳行貞絶、道術通明、王者不得臣、而隠居不在位者也。賢者、名士之次。亦隱者也。名士優故加束帛、賢者禮之而已）とある。

【通釈】
一、みづからを才子名士に置くことを戒しめる。

文学の道は、まづ誠実さを貴ぶ。世の中には聰明だが輕薄な人間がおり、うすつぺらな詩数首を作り、その中に誰も知らないような語をいくつかい

れこむことができるだけで、すぐにうぬぼれて図に乗り、ひねくれて思いやりがなく、みづから才子名士と標榜するのは、世の中の人に笑はれるだけでなく、このような氣習にとつぷりと染り、一生涯正道に入ることができない。たとえば明の桑悦・徐渭は精神が異常な人である。陳繼儒・金人瑞は俗悪下品な人である。彼らの行いはまねる値打ちはない。そもそも高陽の才子、諸葛の名士とは、はたしてどのような人物であろうか。（彼らは）小人物なのに（才子名士という名のもとに）居座り、（その結果）世間に嫌惡を与え、才子名士をきわめて憎むべき人物とみなされるようにしてしまい、わざわざ（もととは）美名（であつた才子名士）にまでおよんだのである。これははなはだ憎むべきことである。『説文』に、「才は地面から芽を出す草木に象る」とあり、材に通じる。もともと草木の性質について言っている。舜が推挙した十六族は、すぐれた材料や器のように、有徳有用である。だから彼らを「才子」といったのである。舜が流罪に処した四族は、惡木毒草のように同類を傷つけ万物をそこなう。だから彼らを「不才子」といったのである。後世、文章がうまいだけのものを才子とするのは、あやまりもはなはだしい。『月令』に「名士を聘し、賢者を禮す」とあり、『禮記正義』は蔡中郎「蔡邕」の説を引いて、「名士とは徳行貞絶、道術通明なものをいう。賢者は名士に次ぐものである」というように、これほど尊崇されていたのである。近世では（名士を）単に江湖の遊覽客としかみなしていない。

— 18 —

一、戒吸食洋煙。

世間害人之物、無烈於此。此事乃古今奇變、不可以常情常理論者也。傷生耗財、廢事損志。種種流弊、不忍盡言。然而食之不煖不飽、不甘不芳、舉世趨之、眞如蓼蟲食苦。尤足異者、人爲他邪僻事所累、縱不幡然、亦有作輟、獨至此事、一隕其中、沈溺不返、骨肉知交、不能勸沮、良方上藥、不

肯嘗試、日有孳孳、斃而後已。嗟乎、擲春華於九幽、變白晝爲長夜、富庶轉爲溝瘠、志士廢爲尸居。君子慎始、勿待噬臍可也。此固非特士人所當戒。然士人爲此、更何望大成遠到乎。定例、職官、有功名人、及營兵、不准吸食。讀書明理之士、當上遵朝章、下愛生命。至於志士仁人、務其遠者大者、無待告誡矣。

【書き下し】

一、洋煙を吸食するを戒む。

世間の、人を害するの物、此より烈しきは無し。此の事は乃ち古今の奇變にして、常情常理を以て論ず可からざる者なり。生を傷つけ財を耗らし、事を廢し志を損ふ。種種の流弊は、盡くは言ふに忍びず。然り而して之を食するも暖からず飽かず、甘からず芳しからず、世を擧げて之に趨くと、眞に蓼蟲の、苦きを食するが如し。尤も異とするに足る者は、人、他の邪僻の事の累なる所たるは、縦ひ幡然たらざるも、亦作輟有るも、獨り此の事に至りては、一に其の中に隕ち、沈溺して返らず、骨肉知交も勸沮する能はず、良方上藥も肯て嘗試せず、日びに孳孳有り、斃れて後已む。嗟乎、春華を九幽に擲ち、白晝を變じて長夜と爲し、富庶轉じて溝瘠と爲り、志士廢して尸居と爲る。君子、始めを慎しめば、臍を噬むを待つ勿くして可なり。此れ固より特だに士人の當に戒むべき所に非ず。然れども士人、此を爲せば、更に何ぞ大成遠到を望まんや。定例に、職官、功名有るの人、及び營兵は、吸食に准はず。書を讀み理を明らかにするの士は、當に上は朝章に遵ひ、下は生命を愛すべし。志士仁人に至りては、其の遠き者大なる者に務めて、告誡を待つ無し。

【註】

○洋煙 阿片の俗称。

【通釈】

一、阿片の吸飲を戒しめる。

世の中で人に害を与えるもののうち、阿片よりひどいものはない。阿片の吸飲は古今の奇習であり、尋常の感情や道理で議論することはできない。（阿片は）寿命を縮め財を傾け、仕事の妨げとなり、生きる氣力を失わせる。（その他の）さまざまな弊害についてはくわしく述べるに忍びない。しかし阿片を吸つても暖かくならず、満腹にもならず、うまくもなく、においもよくないのに、世をあげて阿片を吸うのは、ほんとうに蓼蟲がにがい蓼を食べるのと同じである。とりわけ不思議に思うのは、次の点である。阿片以外の悪い習慣はたとえすぐにはなくとも止めることができるのに、この阿片の習慣だけは、その中にとつぷりおちこんで引き返すことができず、肉親や友人でも止めさせることはできず、良医や良薬であつても決して試そうとはせず、日に日にひどくなり、亡くなつてはじめて止めることができる。ああ、春の花を墓地に放り投げ、白晝を長夜にかえ、恰幅のよかつた人は瘦せ細り、志士は廢人となる。君子たるもの最初から阿片を吸引するあやまちを犯さなければ、臍をかむ（後悔する）必要がなくてよい。これはもちろん士大夫だけが戒しめるべきことではない。しかし士大夫が阿片に手を出せば、どうして大成を望むことができるか。条例につきのようにある、現職の官吏、科挙に及第した人、および兵士は、（阿片の）吸飲を禁止する。書物を読み道理をわきまえる人は、上は国家の典章にしたがい、下は人民の生命を愛さなければならない。志士や仁人については、遠大なことに努力し、いましめを受けてはならない。

語學第二

一、通論讀書。（讀書を通論す。）

— 1 —

讀書宜求善本。

善本非紙白板新之謂。謂其爲前輩通人、用古刻數本、精校細勘付葉、不譌不闕之本也。此有一簡易之法。初學購書、但看序跋。是本朝校刻、卷尾附有校勘記、而密行細字、寫刻精工者、卽佳。

善本之義有三。一、足本。無闕卷、未刪削。二、精本。一精校、一精注。三、舊本。一舊刻、一舊鈔。

【書き下し】

書を讀むには宜しく善本を求むべし。

善本とは紙白く板新しきの謂に非ず。其の、前輩通人、古刻數本を用ひ、精校細勘して葉に付し、譌せず闕けざるの本を謂ふなり。此れ一簡易の法有り。初學、書を購ふに、但だ序跋を看よ。是れ本朝の校刻にして、卷尾に附して校勘記有りて、密行細字、寫刻精工なる者は卽ち佳なり。

善本の義に三有り。一、足本。闕卷無し、未だ刪削せず。二、精本。一は精校、一は精注。三、舊本。一は舊刻、一は舊鈔。

【通釈】

書物を読むには善本を求めなければならない。

「善本」とは紙が白くて版木が新しいという意味ではない。先輩や通人が數本の古い刻本を用いて、精密に校勘して印刷に付し、誤りや欠落がない本をいう。（善本をみきわめる）簡単な方法がある。初學者は書を購入するにあたって、序跋を見なさい。清朝の校刻であるもの、卷尾に校勘記がつ

いているもの、密行細字であるもの、写刻が精巧なもの、これらが優れた本である。

— 2 —

讀書先宜校書。

校者以善本與俗本對勘、正其譌脱也。異同之間、常得妙悟。且校過一次、繁難處亦易記得。但校後宜讀。若校而不讀、便成笑柄。

魏邢子才云、誤書思之、恒是一適。若思而不得、則亦不勞讀書矣。此一時興到語。不可以訓。必如子才之博學殊資、始有思而得之之理。若淺學讀古書、不誤尚不能盡解。況既誤而能億知耶。

【書き下し】

書を讀むには先づ宜しく書を校すべし。

校とは、善本と俗本を以て對勘し、其の譌脱を正すなり。異同の間に、常に妙悟を得たり。且つ校過すること一次なれば、繁難の處も亦記得し易し。但だ校後宜しく讀むべし。若し校して讀まざれば、便ち笑柄と成る。

魏の邢子才、「誤書もて之を思ふは、恒に是れ一適。若し思ひて得ざれば、則ち亦書を讀むを勞せず」と云ふ。此れ一時の興到るの語なり。以て訓とす可からず。必ず子才の博學殊資の如くにして、始めて思ひて之を得るの理有り。若し淺學、古書を讀めば、誤まらざるも尚ほ盡くは解する能はず。況んや既に誤りて能く億知するをや。

【註】

○魏の邢子才 邢邵、字は子才。北齊の人。『北齊書』卷三十六、『北史』卷四十三に伝がある。『北齊書』に、

書を有すること甚だ多きも、甚だしくは讐校せず。人の書を校するを見て、常に笑ひて曰く、「何ぞ愚なることの甚だし、天下の書、死に至るまで讀むも遍くす可からず。焉んぞ能く始めて復た此を校せんや。且つ誤書もて之を思ふは、更に是れ一適」と。妻の弟李季節は才學の士なり。子才に謂ひて曰く、「世間の人多く聰明ならず、誤書を思ひて何に由りて能く得ん」と。子才曰く、「若し思ひて得る能はざれば、便ち書を讀むを勞せず」と。（有書甚多、而不甚讐校。見人校書、常笑曰、何愚之甚、天下書至死讀不可遍。焉能始復校此。且誤書思之、更是一適。妻弟李季節、才學之士。謂子才曰、世間人多不聰明、思誤書何由能得。子才曰、若思不能得、便不勞讀書）とある。

○全集本にはこの條なし。

【通釈】

書物を讀むにはまづその書物を校勘しなければならぬ。

「校」とは、善本と俗本をつきあわせ、誤字や脱字を正すことである。異同と異同の間に、つねに思いがけない発見がある。なおかつ一度校勘すると、複雑難解な箇所も記憶しやすいく。ただ校勘したあとと讀まなければならぬ。もし校勘しただけで讀まなければ、笑いのものとなる。

魏の邢子才（邢邵）は、「誤った書物を（讀みながら、どこが誤っているかを）考えることは、つねに書を読む楽しみのひとつである。もし考えながら讀んでも誤りがわからなければ、わざわざ書を読む必要はない」という。これは一時の興が乗ったときの發言であり、（普通の）教えとすることはできない。きっと子才のような博学異才であつて、はじめて考えながら讀ん

で誤りがわかるという理屈があるのであろう。もし浅学者が古書を読む場合、誤まつていなくてもすべて理解することはできない。ましてや誤りがあつたとしたら、（本当の意味を）推測理解することなど到底できるはずがないではないか。

3

讀書宜博。

先博後約、語孟通義。無論何種學問、先須多見多聞、再言心得。若株守坊本講章一部、兔園冊子數帙、而云致知窮理、好學能文、世無其理。

天下書、老死讀不可偏。四庫有未收者、有四庫書成後訪出者、有近人作者。博之爲道、將如何。曰、在有要而已。太史公曰、儒家者流、博而寡要。古（事）〔書〕不可不解。眞者不多。眞古書無無用者。有用之書、不可不見。不限古今。專門之書、不可不詳考貫通。立志爲何等學問、此類書即是專門。如是則有涯涘可窮矣。若治經者、雜覽苦思、而所据多僞書俗本。讀史者、記其詞語、而不曉史法、多蒐異聞、而本事始末、未嘗通考。爲詞章者、頗有僻典難字、而流別不明、華藻富豔、而字義不合雅訓、引用但憑類書、而不求本源。講經濟者、不通當代掌故、雖口如懸河、下筆萬言、猶之陋也。能祛數蔽、斯爲博矣。雖目有未見之書、文無希見之語、不害爲博。

【書き下し】

書を讀むには宜しく博なるべし。

先に博、後に約なるは、『語』『孟』の通義なり。何種の學問なるかを論ずる無く、先づ須く多見多聞なるべくして、再び心得を言ふ。坊本の講章一部、兔園冊子數帙を株守して、「知を致し理を窮め、學を好み文を能くす」と云ふが若きは、世よ其の理無し。

天下の書、老死まで讀むも偏くす可からず。四庫、未だ收めざる者有り、『四庫書』成りて後訪出する者有り、近人の作りし者有り。博の道たるや、將に如何せん」と。曰く、要するに在るのみ。太史公曰く、「儒家者流は博にして要寡し」と。古書は解せざる可からず。眞なる者は多からず。眞の古書は用無き者無し。有用の書は見ざる可からず。古今に限らず。専門の書は詳考貫通せざる可からず。志を立つれば何等の學問を爲すも、此の類の書は即ち是れ専門なり。是の如くんば則ち涯涘窮む可き有り。若へば經を治むる者は、雜覽苦思するも、据る所偽書俗本多し。史を讀む者は、其の詞語を記するも、史法に曉らかならず、多く異聞を蒐むるも、本事の始末は未だ嘗て通考せず。詞章を爲る者は、頗る僻典難字有るも、流別明らかならず、華藻富麗なるも、字義は雅訓に合せず、引用は但だ類書に憑りて、本源を求めず。經濟を講ずる者は、當代の掌故に通ぜず、口、懸河の如く、筆を下すこと萬言なりと雖も、猶ほ陋のごときなり。能く數蔽を祛ふ、斯を博と爲す。目、未だ見ざるの書有り、文、希見の語無きと雖も、博たるを害さず。

【註】

○坊本の講章 民間の書肆から出版された、科挙文を学んだり、講義に使用したりするために五經四書を編輯した書物。

○兔園冊子 もとは書名で、杜嗣先の『兔園冊府』という書があり、五代の時に民間の村塾で兒童に教えるための読本として用いられたことから、のちに卑近な書物のことをいうようになった。

○先に博、後に約なるは、『語』『孟』の通義なり 『論語』雍也第六に、子曰く、君子博く文を學びて、之を約するに禮を以てす。亦以て畔かざる可きか。(子曰、君子博學於文、約之以禮。亦可以弗畔矣夫)〔顏淵第十二にも同文があるが、「君子」の二字がない〕
子罕第九に、

顏淵喟然として歎じて曰く、之を仰げば彌いよ高く、之を鑽れば彌いよ堅し。之を瞻るに前に在れば、忽焉として後に在り。夫子循循然として善く人を誘ふ。我を博むるに文を以てし、我を約するに禮を以てす。罷めんと欲するも能はず。既に吾が才を竭くす。立つ所有りて卓爾たるが如し。之に従はんと欲すと雖も、由なきのみ。(顏淵喟然歎曰、仰之彌高、鑽之彌堅。瞻之在前、忽焉在後。夫子循循然善誘人。博我以文、約我以禮。欲罷不能。既竭吾才。如有所立卓爾。雖欲從之、末由也已)とある。さらに『孟子』離婁下に、孟子曰く、博く學んで詳らかに之を説くは、將に以て反て約を説かんとすればなり。(孟子曰、博學而詳說之、將以反說約也)とある。

○太史公曰く云々 『史記』太史公自序の「六家要旨」に、

儒者は博にして要寡く、勞して功少し。是を以て其の事は盡くは從ひ難し。然れども其の君臣父子の禮を序し、夫婦長幼の別を列するは、易ふ可からざるなり。(儒者博而寡要、勞而少功。是以其事難盡從。然其序君臣父子之禮、列夫婦長幼之別、不可易也)とある。

○古事不可不解 底本は「事」に作るが、前後の文、全集本、『經解入門』によって「書」に改める。

○『經解入門』 平日讀經課程五十一に重なる部分がある。

一讀書宜博。先博後約、語孟通義。學者先須多見多聞、再言心得。若株守一部、兔園冊子數帙、而云通經、必無其事。然則博之爲道、將如何。曰、在有要而已。太史公曰、儒家者流、時而有要。古書不可不解。(眞者不多。眞古書無無用者。)有用之書、不可不見。(不限古今。)専門之書、不可不詳考貫通。如是則有涯涘可窮矣。

【通釈】

書物を読むには博覧でなければならない。

さきに書物を博覧し、あとから要約整理するのが、『論語』『孟子』における不変の道理である。いかなる学問かに関係なく、はじめは多見多聞でなければならず、そのあとで（要約することによつてはじめて）心から理解することができる。坊本の講章一部、兔園冊子数帙を墨守するだけで、「智識がひろく理をきわめ、学問を好み文章がうまい」と誇示するような道理は世の中にはない。

天下の書物は、年老いて死ぬまで読んだとしても、読み尽くすことはできない。四庫にまだ収められていないものがあり、『四庫全書』が完成した後に見つかったものがあり、近人の作ったものがある。博覧となるにはどうすればよいのか。それは要約に務めることが重要である。太史公は、「儒家者流は博覧であるが要約がすくない」という。古書は理解しなければならない。（真の古書は多くない。真の古書に無用なものはない。有用な書物は閲読しなければならない。古今に關係ない。専門の書は詳しく研究し通曉しなければならない。学問で身を立てる決心をしたならば、いかなる学問を行おうとも、これらの書物すべてが専門である。このようにすれば果ての見えない水際さえ窮めることができる。經学を研究するものは、あれこれ博覧して苦悶するが、根拠とする書物に偽書や俗本が多い。史書を読むものは、詞語をよく記憶しているが、歴史法に明らかではなく、異聞をたくさんあつめるが、物事の顛末をわかっていない。詩や文章を作るものは、見かけない典故や難解な文字をよく使用するが、流別に明らかではなく、詞藻は華麗であるが、意味は正しい訓詁にあわず、引用は類書によるだけで、原書を参照しない。經世済民を講じるものは、当代の故実に通じておらず、立て板に水を流すように雄弁に語り、万言の文章をたちどころに執筆するが、やはり俗悪である。これらいくつかの弊害を除くことができるのが博覧である。まだ見ていない書物があったり、文章にあまり

見かけない言葉を使つていなくとも、博覧であるといつてもさしつかえない。

4

讀書宜有門徑。

汎濫無歸、終身無得。雖多無用。得門而入、事半功倍。或經或史、或詞章、或經濟、或天算地輿。經治何經、史治何史、經濟是何條、因類以求、各有專注。至於經注孰爲師授之古學、孰爲無本之俗學、史學孰爲有法、孰爲失體、孰爲詳密、孰爲疎舛、詞章孰爲正宗、孰爲旁門、尤宜決擇分析、方不致誤用聰明。此事宜有師承。然師豈易得。書卽師也。今爲諸生指一良師。將四庫全書總目提要是一書名。省文可稱四庫提要。讀一過、卽畧知學問門徑矣。析而言之、四庫提要、爲讀羣書之門徑。提要較多。未必人人能置一編。別有四庫簡明目録。乃將提要約撮而成、書止一帙。大抵初學須先將經史子集四種分清。何書應入何類、於此瞭然、則購書讀書、皆有頭緒。然簡明目録太畧。書之得失、亦未詳說。且四庫未收者、提要尚列存目於後、簡明目録無之。不得誤認爲世間所無也。畧一繙閱、然後可讀提要。漢學師承記、爲經學之門徑。國朝人著小學考、爲小學之門徑。說文通檢亦可謂初學繙檢說文之門徑。顧炎武音學五書、爲韻學之門徑。史通爲史學之門徑。國朝齊召南歷代帝王年表、爲讀史之門徑。古今僞書考、爲讀諸子之門徑。文心雕龍、鍾嶸詩品、爲詩文之門徑。國朝趙執信聲調譜、沈德潛說詩碎語、紀昀瀛奎律髓刊誤、孫梅四六叢話、近人歷代賦話、爲初學詩賦四六之門徑。孫過庭書譜、姜堯章續書譜、國朝包世臣所著安吳四種內藝舟雙楫一種、爲學書之門徑。

【書き下し】

書を読むには宜しく門徑有るべし。

汎濫歸する無くんば、終身得る無し。多しと雖も用無し。門を得て入れば、事

半ばにして功倍せり。或いは經、或いは史、或いは詞章、或いは經濟、或いは天算地輿。經は何れの經を治め、史は何れの史を治め、經濟は是れ何條、類に因りて以て求むれば、各おの專注有り。經注孰れか師授の古學と爲す、孰れか本無きの俗學と爲す、史學孰れか法有りと爲す、孰れか體を失すと爲す、孰れか詳密と爲す、孰れか疎舛と爲す、詞章は孰れか正宗と爲す、孰れか旁門と爲すかに至りては、尤も宜しく決擇分析すべくして、方めて誤りて聰明を用ふるに致らず。此の事宜しく師承有るべし。然れども師豈に得易からんや。書は即ち師なり。今、諸生の爲に一良師を指さん。『四庫全書總目提要』是れ一書名なり。文を省きて『四庫提要』と稱す可し。を將て讀むこと一過なれば、即ち畧ぼ學問の門徑を知る。

析して之を言へば、『四庫提要』は羣書を讀むの門徑と爲す。『提要』は較や多し。未だ必ずしも人人能く一編を置かず。別に『四庫簡明目錄』有り。乃ち『提要』を將て約撮して成り、書は止だ一帙。大抵初學は須く先づ經史子集の四種を將て分清すべし。何れの書應に何れの類に入るべきか、此に於て瞭然たらば、則ち書を購ひ書を讀むに皆頭緒有り。然れども『簡明目錄』は太だ畧なり。書の得失も亦未だ詳説せず。且つ四庫未だ收めざる者は、『提要』は尚ほ存目を後に列するも、『簡明目錄』は之れ無し。誤り認めて世間に無き所と爲すを得ざるなり。畧ぼ一繙閱して、然る後に『提要』を讀む可し。『漢學師承記』は經學の門徑と爲す。國朝の人の著はす『小學考』は、小學の門徑と爲す。『說文通檢』も亦初學、『說文』を繙檢するの門徑と謂ふ可し。顧炎武の『音學五書』は韻學の門徑と爲す。『史通』は史學の門徑と爲す。國朝の齊召南の『歷代帝王年表』は史を讀むの門徑と爲す。『古今僞書考』は諸子を讀むの門徑と爲す。『文心雕龍』、鍾嶸の『詩品』は詩文の門徑と爲す。國朝の趙執信の『聲調譜』、沈德潛の『說詩碎語』、紀昀の『瀛奎律髓刊誤』、孫梅の『四六叢話』、近人の『歷代賦話』は、初めて詩賦四六を學ぶの門徑と爲す。孫過庭の『書譜』、姜堯章の『續書譜』、國朝の包世臣著はす所の『安吳四種』内の『藝舟雙楫』の一種は、書を學ぶの門徑と爲す。

【註】

○「藝舟雙楫一種」の「種」を、全集本は「卷」に作る。

○『經解入門』門徑不可不清第四十五に重なる部分がある。

爲學各門徑。何況治經。門徑一清、斯中有把握、不至汎濫無歸、至其經注孰爲師授之古學、孰爲無本之俗學、尤宜抉擇分析、方不致誤用聰明。此事宜有師承。然師不易得。書即師也。余於目錄之學篇所列各種、本爲讀書門徑。今爲析而言之、四庫提要、爲讀羣書之門徑。（提要較多。未必人人能置一編。別有四庫簡明目錄。乃將提要約撮而成。書止一帙。大抵初學須先將經史子集四種分清。何書應入何類、於此瞭然、則購書讀書、皆有頭緒。然簡明目錄太略。書之得失、亦未詳説。且四庫未收者、提要尚列存目於後。簡明目錄無之。不得誤認爲世間所無也。略一繙閱、然後可讀提要。）經義考、爲治經之門徑。小學考、爲小學之門徑。音學五書、爲韻學之門徑。古今僞書考、爲讀諸子之門徑。學者先看此數書、由此而入、無不頭頭是道矣。

【通釈】

書を讀むには門徑がなければならない。

あれこれと手を広げると、生涯なにも身につかない。多くても役に立たない。正しい入り口から入れば、努力は半分で、効果は倍となる。經であれ、史であれ、詩文であれ、經世済民であれ、天算地輿であれ、いづれも同じである。經はどの經を研究すればよいのか、史はどの史を研究すればよいのか、經世済民とはどういうものか、同じ種類のものによって推測探求すれば、それぞれ専門の注がある。經書の注はどれが師から授けられた古学であるのか、どれが根拠のない俗学であるのか、史学はどれが法則を備えているのか、どれが体裁にあつていないのか、どれが詳密であるのか、どれが粗雑であるのか、詩文はどれが正統であるのか、どれが傍流であるのか、

などについては、とりわけ選択し分析しなければならず、（そうすることによって）はじめて聰明をあやまったところに用いることがなくなる。これらの事を身につけるには師から教えを受けなければならない。しかし師はどうして簡単に見つけられようか。書物がとりもなおさず師である。今、学生諸君のために良い師を紹介しよう。『四庫全書總目提要』これでひとつの書名であり、省略して『四庫提要』といってもよい。をひととおりひもとけば、学問の門徑がほぼわかる。

分別して言うと、『四庫提要』はあらゆる書物を読むための門徑である。『提要』はやや大部であり、かならずしもあらゆる人が所有できるものではない。これとは別に『四庫簡明目録』がある。これは『提要』を要約して作ったもので、一帙にとどまる。そもそも初学者は經史子集の四つをはっきり区別しなければならない。どの書物が何類に入っているのかがはっきりすれば、書物を購入したり読んだりするにあたつて、手がかりとなる。しかし『簡明目録』ははなはだ簡略であり、書物の得失についても詳しくは説明していない。

なおかつ四庫に収録されなかった書物は、『提要』では存目として後に附載されているが、『簡明目録』にはそれが無い。『簡明目録』に載っていないからといって世の中に存在していないと誤認してはならない。ひとまず『簡明目録』に目を通して、それから『提要』を読むとよい。『漢學師承記』は經学を研究するための門徑である。清朝の人が著わす『小學考』は小学を研究するための門徑である。『說文通檢』も初学者が『說文』をひもとくための門徑であるといえる。顧炎武の『音學五書』は音韻学を研究するための門徑である。『史通』は史学を研究するための門徑である。清朝の齊召南の『歷代帝王年表』は史を読むための門徑である。『古今偽書考』は諸子を読むための門徑である。『文心雕龍』、鍾嶸の『詩品』は詩文を研究するための門徑である。清朝の趙執信の『聲調譜』、沈德潜の『說詩碎語』、紀昀の『瀛奎律髓刊誤』、孫梅の『四六叢話』、近人の『歷代賦話』は初めて詩賦や四六文を学ぶための門徑である。孫過庭の『書譜』、姜堯章の『續書譜』、清朝の包世臣が著わす『安吳四種』内の『藝舟雙楫』の一種は書を

学ぶための門徑である。

【書目答問】

- ・四庫全書總目提要二百卷。乾隆四十七年敕撰。殿版大字本、揚州小字本、廣州小字本。
- ・四庫簡明目録二十卷。乾隆四十七年敕撰。翻閱較便、惟四庫歸存目者、簡明目録無之、亦間有與提要不合者。
- ・四庫未收書目提要五卷。阮元。即擘經室外集。原刻本。一百七十五種。
- ・國朝漢學師承記八卷、附經師經義目錄一卷。江藩。原刻本、粵雅堂本。
- ・小學考五十卷。謝啓昆。嘉慶丙子刻本。
- ・說文通檢十四卷。今人。同治十二年廣州新刻本、附說文後。此書爲翻檢說文而設、極便。毛模說文檢字二卷、止可檢汲古本、原刻重刻兩本、皆在成都。
- ・音學五書。顧炎武。
- ・史通通釋二十卷。唐劉知幾。浦起龍釋。原刻本。黃叔琳史通訓故補二十卷、原刻本、亦可。
- ・歷代帝王年表三卷。齊召南。文選樓本。仁和葉氏重刻本。此書最簡括。
- ・古今偽書考一卷。姚際恒。知不足齋本。
- ・文心雕龍輯注十卷。梁劉勰。黃叔琳注。盧氏廣州刻本、原刻本。
- ・鍾嶸詩品三卷。津逮本、學津本。
- ・聲調譜一卷。趙執信。單行本、珠塵本。
- ・聲調譜拾遺一卷。翟翬。珠塵本。
- ・四六叢話三十二卷。孫梅。嘉慶三年刻本。
- ・書譜一卷。唐孫虔禮。百川本。安氏石刻附釋文本。
- ・續書譜一卷。宋姜夔。三續百川本。
- ・藝舟雙楫六卷、附錄三卷。包世臣。安吳四種之一。活字版本、又單行

本。此編實是雜文、因内有論書二卷、附此。

— 5 —

讀書貴博貴精尤貴通。

該貫六藝、斟酌百家、既不少見而多怪、亦不非今而泥古、從善弃瑕、是之謂通。若夫偏袒一家、得此失彼、所謂是丹非素、一孔之論者也。然必先求博、則不至以臆說俗見爲通。先須求精、則不至以捭亂無主爲通。不博不精、通字難言。初學慎勿藉口。

國朝學人、極博者、黃宗羲、毛奇齡、朱彝尊、俞正燮。極精者、閻若璩、戴震。極博而又極精者、顧炎武、錢大昕。極博極精而又極通者、紀昀、阮元。經學訓詁極通者、王氏父子、念孫、引之。

【書き下し】

書を讀むには博を貴び精を貴び、尤も通を貴ぶ。

六藝を該貫し、百家を斟酌し、既に少見にして多怪ならず、亦今を非として古に泥まず、善に従ひて瑕を弃つ、是れを之れ「通」と謂ふ。夫れ一家に偏袒し、此れを得て彼を失するが若きは、所謂「丹きを是として素きを非とする」、一孔の論者なり。然れども必ず先づ博を求むれば、則ち臆說俗見を以て通と爲すに至らず。先づ須く精を求むべくんば、則ち捭亂して主無きを以て通と爲すに至らず。博ならず精ならざれば、「通」字言ひ難し。初學は慎んで口を藉る勿れ。

國朝の學人の、極めて博なる者は、黃宗羲、毛奇齡、朱彝尊、俞正燮。極めて精なる者は、閻若璩、戴震。極めて博にして又極めて精なる者は、顧炎武、錢大昕。極めて博、極めて精にして又極めて通なる者は、紀昀、阮元。經學訓詁の極めて通なる者は、王氏父子、念孫、引之。

【註】

○所謂「丹きを是として素きを非とする」「丹」は丹朱、「素」は白絹。一方だけを取って他方をすてるたとえ。江淹『雜體詩』序は「好丹非素」に作り、

世の諸賢の各おの迷ふ所に滞りて、甘きを論ずるも辛きを忌み、丹きを好むも素きを非らざる莫きに至りては、豈に所謂方に通じて恕を廣め、遠きを好んで兼ね愛する者ならんや。（至於世之諸賢、各滯所迷、莫不論甘而忌辛、好丹而非素。豈所謂通方廣恕、好遠兼愛者哉）とある。

○『經解入門』平日讀經課程第五十一に重なる部分がある。

一貴博貴精尤貴通。博而不精、則近于汎濫。精而不通、則近于拘執。然精通難言、必先由博而入、心力交致、方能臻斯境界。

また『經解入門』有考據之學第三十五にも重なる部分がある。

考據者、考歷代之名物象數典章制度、實而有據者也。此其學至博至大、而至難至精。古人有考一事而聚訟至數十百家、積千載而不能晰者。學者非熟讀十三經、縱覽諸子各史及先儒傳注記載之屬、不足以語於此。國朝顧炎武、閻若璩、毛奇齡、朱彝尊、戴震、錢大昕、紀昀、阮元諸人、皆該貫六藝、斟酌百家。故其考據始有可信。若夫偏袒一家、得此失彼、依前人之成說、作附會之空談、是丹非素、毫無所得、則一孔之論也。此學切實、有益於用、凡讀子讀史及言經濟者、皆當講求。但非倉猝可辦、學者必積數十年之實力、乃可以言貫通。不然、則泥今非古、皆無當也。余列目錄之學、示人以讀書之門徑。列校勘之學、示讀書之當細心。由是而通訓詁、精考據、則經學之事盡矣。即凡爲學之事亦盡矣。由是而見諸躬行、發爲經濟、則視其人之善自立也。

【通釈】

書物を読むには「博」を貴び「精」を貴び、とりわけ「通」を貴ぶ。

六芸をつらぬいてよく理解し、百家を酌みとつてよく研究し、見聞が狭くて何事にも驚くということがないうに、今を非難せず昔に束縛されず、よいものに従い、誤ったものを棄て去る、これを「通」という。そもそも一家にだけ荷担し、一方をとり一方を棄てるものは、いわゆる「あかいもの」を正しいとし、白いものを非難する」ような、偏見を持った論者である。しかしまづ博を求めれば、臆説俗見を「通」とみなすようなことはしない。まづ精を求めれば、混乱して主体がないものを「通」とみなすようなことはしない。博でもなく精でもなければ、「通」という字について語るのはむづかしい。初学者は決していいわけしてはならない。

清朝の学者のうち、きわめて博であるものは、黄宗羲、毛奇齡、朱彝尊、俞正燮。きわめて精であるものは、閻若璩、戴震。きわめて博できわめて精であるものは、顧炎武、錢大昕。きわめて博できわめて精、きわめて通であるものは、紀昀、阮元。経学の訓詁についてきわめて通であるものは、王氏父子、念孫、引之。

【書目答問】

- ・梨洲集 卷。黄宗羲。 靳治荆刻。
- ・西河文集一百三十三卷。毛奇齡。 並雜著合刻爲西河合集四百九十八卷。
- ・曝書亭集八十卷。附錄一卷。朱彝尊。
- ・曝書亭集外稿八卷。馮登府輯。
- ・經義考三百卷。朱彝尊。 揚州馬氏刻本、重刻通行本。
- ・癸巳類稿十五卷。俞正燮。 何氏刻本。
- ・癸巳存稿十五卷。俞正燮。 連筠簪本。
- ・古文尚書疏證八卷。閻若璩。 家刻本、吳氏天津刻本。

- ・東原集十卷。戴震。 戴氏遺書内、亦附經韻樓叢書。
- ・亭林文集六卷。顧炎武。

- ・潛研堂文集五十卷、詩集二十卷。錢大昕。

- ・攄經室集六十卷。阮元。 一集十四卷、二集八卷、三集五卷、四集二卷、詩集十二卷、外集五卷、續集十一卷、再續集六卷。

- ・讀書雜誌八十卷。王念孫。 家刻本。

- ・廣雅疏證十卷。王念孫疏證。 家刻本、學海堂本。

- ・經義述聞三十二卷。王引之。 自刻本、江西刻本、學海堂本只二十八卷。

- ・經傳釋詞十卷。王引之。 家刻本、守山閣本、學海堂本。

— 6 —

讀書宜多讀古書。

除史傳外、唐以前書宜多讀。爲其少空言耳。大約秦以上書、一字千金。由漢至隋、往往見寶。與其過也、無亦存之。唐至北宋、去半留半。南宋迄明、擇善而從。茲將先秦以上傳記、子史及解經之書、古人通名傳記。眞出古人手者、及漢魏著述、中理切用者、約舉其名於後。

國語、戰國策、大戴禮、七經緯、國朝人蒐集。較古微書爲備。緯與織異。乃三代儒者說經逸文。瑕不掩瑜、勿耳食而議之。山海經、世本、近人秦嘉謨輯補。逸周書、竹書紀年、穆天子傳、三書雖有假託、皆秦以前人所爲。周髀、素問、司馬法。班志列入禮家。其書皆言軍禮。以上諸書、皆有考證經義之用。

以上、三代古傳記。其餘皆是漢後僞書、斷不可信。國語、國策、大戴、最要。

老子、管子、孫子、晏子春秋、列子、莊子、文子、吳子、墨子、荀子、韓非子、鶡冠子、孔叢子、呂氏春秋、楚辭、此集類。然可證經。故附此。此外尚有尸子、商子、尹文子、關尹子、燕丹子。國朝人均有采集校刻本。

以上、周秦間諸子。其餘尚多、或僞作、或佚存無幾。荀、管、呂、最要。莊、墨之

屬、理雖悠謬、可證經文者極多。

乾鑿度、鄭注尚書大傳、韓詩外傳、春秋繁露、白虎通、春秋釋例、陸璣詩疏、皇侃論語疏、周易集解、經典釋文。二書雖唐初人集、乃漢魏六朝人舊說。此外尚有五經異義、駁五經異義、虞氏易注、鄭氏易注、荀九家易注、尚書馬鄭注、左傳賈服注、蔡邕明堂月令章句、箴膏肓、起廢疾、發墨守、毛鄭異同評、劉炫規杜、漢魏遺書、古經解鈎沈等書。皆元書亡佚。國朝人從他書采集者。

以上、漢至隋說經之書。唐至國朝、經學書太多。俟他日擇要標目。

急就篇、說文、字林、書久佚。國朝任大椿蒐集成書、名字林攷逸。玉篇、方言、釋名、廣雅、廣韻。廣韻即陸法言切韻、畧有增修。故列隋。此後、唐人一切經音義最勝。尚有汗簡、集韻、韻補、韻會、薛尚功鐘鼎款識之屬。亦資考證。但可少緩耳。倉頡凡將諸書、久已亡佚。任大椿蒐集之、名小學鈎沈。最好。

以上、漢至隋小學之書。說文、玉篇、廣雅、廣韻、尤要。

新序、說苑、列女傳、吳越春秋、越絕書、家語、王肅所集、故列此。漢官六種、三輔黃圖、水經注、華陽國志、淮南子、法言、鹽鐵論、新論、潛夫論、論衡、獨斷、風俗通、申鑒、齊民要術、文中子中說雖門人所作、體制未善、詞理頗精。不可廢。顏氏家訓、九章算術。此外隋前算經、尚有六種。算乃專門之學、極有實用。自唐至明、算書不少。後出愈精。至國朝而極精。此取其古爲通經之用。

以上、漢後隋前傳記諸子。此外如太玄經、易林、物理論、中論、人物志、高士傳、博物志、古今注、南方草木狀、洛陽伽藍記、荊楚歲時記、世說、抱朴子、金樓子之屬、雖頗翔實雅馴、僅資詞章談助、非其所急。難經、參同、無關儒術。理惑、拾遺、違正書理。其餘多是偽作、宜辨。新序、說苑、列女傳、水經注、最要。

【書き下し】

書を讀むには宜しく多く古書を讀むべし。

史傳を除きて外、唐以前の書は宜しく多讀すべし。其の空言少きが爲の^{ため}み。大約秦以上の書は一字千金。漢より隋に至るまでは、往往にして寶を見る。

其の過つよりは、亦之を存すること無からん。唐より北宋に至るまでは、半ばを去り半ばを留む。南宋より明に迄^{およ}ぶまでは、善を擇んで従ふ。茲に先秦以上の傳記の子史及び經を解するの書、古人通じて「傳記」と名づく。眞に古人の手に出づる者、及び漢魏の著述の、理に中^{あた}り用に切なる者を將て、其の名を後に約舉す。

『國語』『戰國策』『大戴禮』『七經緯』國朝の人の蒐集。『古微書』に較べて備はれりと爲す。緯は織と異なる。乃ち三代の儒者の說經の逸文なり。瑕^か瑜^ゆを掩^{おほ}はず、耳食して之を議する勿れ。『山海經』『世本』近人秦嘉謨輯補。『逸周書』『竹書紀年』『穆天子傳』三書、假託有りと雖も、皆秦以前の人の爲る所なり。『周髀』『素問』『司馬法』。『班志』は列して禮家に入る。其の書皆軍禮を言ふ。以上の諸書は皆經義を考證するの用有り。

以上、三代の古傳記なり。其餘は皆是れ漢より後の偽書、斷じて信ず可からず。『國語』『國策』『大戴』最も要なり。

『老子』『管子』『孫子』『晏子春秋』『列子』『莊子』『文子』『呉子』『墨子』『荀子』『韓非子』『鶡冠子』『孔叢子』『呂氏春秋』『楚辭』此れ集の類なり。然れども經を證す可し。故に此に附す。此外尚ほ『尸子』『商子』『尹文子』『關尹子』『燕丹子』有り。國朝の人均しく采集せる校刻本有り。

以上、周秦間の諸子なり。其餘尚ほ多きも、或いは偽作、或いは佚存^{ほと}幾んど無し。『荀』『管』『呂』最も要なり。『莊』『墨』の屬、理、悠謬なりと雖も、經文を證す可き者極めて多し。

『乾鑿度鄭注』『尚書大傳』『韓詩外傳』『春秋繁露』『白虎通』『春秋釋例』『陸璣詩疏』『皇侃論語疏』『周易集解』『經典釋文』。二書、唐初の人の集と雖も、乃ち漢魏六朝人の舊說なり。此外尚ほ『五經異義』『駁五經異義』『虞氏易注』『鄭氏易注』『荀九家易注』『尚書馬鄭注』『左傳賈服注』蔡邕『明堂月令章句』『箴膏肓』『起廢疾』『發墨守』『毛鄭異同評』『劉炫規杜』『漢魏遺書』『古經解鈎沈』等の書有り。皆元書亡佚す。國朝人、他書より采集せる者なり。

以上、漢より隋に至る説經の書なり。唐より國朝に至るまで、經學書^{はなは}太だ多し。他日要を擇んで目を標するを俟^{まち}たん。

『急就篇』『説文』『字林』書久しく佚す。國朝の任大椿蒐集して書を成し、『字林攷逸』と名づく。『玉篇』『方言』『釋名』『廣雅』『廣韻』『廣韻』は即ち陸法言の『切韻』にして、畧^{すこ}しく増修有り。故に隋に列す。此の後、唐人の『一切經音義』最も勝れり。尚ほ『汗簡』『集韻』『韻補』『韻會』薛尚功『鐘鼎款識』の屬有り、亦考證に資す。但だ少しく^{ゆるやか}緩にす可きのみ。『倉頡』『凡將』の諸書は久しく已に亡佚す。任大椿、之を蒐集し、『小學鈎沈』と名づく。最も好し。

以上、漢より隋に至る小學の書なり。『説文』『玉篇』『廣雅』『廣韻』尤も要なり。

『新序』『説苑』『列女傳』『吳越春秋』『越絶書』『家語』（王肅の集むる所なり。故に此に列す。）『漢官六種』『三輔黃圖』『水經注』『華陽國志』『淮南子』『法言』『鹽鐵論』『新論』『潜夫論』『論衡』『獨斷』『風俗通』『申鑒』『齊民要術』『文中子中説』『門人の作りし所にして、體制未だ善ならずと雖も、詞理頗る精なり。廢す可からず。』『顏氏家訓』『九章算術』。此の外、隋より前の算經に尚ほ六種有り。算は乃ち専門の學なるも、極めて實用有り。唐より明に至るまで、算書少からず。後出愈いよ精なり。國朝に至りて極めて精なり。此れ其の古くして經に通ずるの用を爲すを取る。

以上、漢より後、隋より前の傳記諸子なり。此より外、『太玄經』『易林』『物理論』『中論』『人物志』『高士傳』『博物志』『古今注』『南方草木狀』『洛陽伽藍記』『荊楚歲時記』『世説』『抱朴子』『金樓子』の如きの屬は、頗る翔實雅馴なりと雖も、僅かに詞章談助に資するのみにして、其の急ぐ所に非ず。『難經』『參同』は儒術に關する無し。『理惑』『拾遺』は、正に違ひ理を害す。其の餘は多く是れ偽作、宜しく辨ずべし。『新序』『説苑』『列女傳』『水經注』最も要なり。

【註】

○「急就篇、説文、字林」を、全集本は「説文、方言、釋名、急就篇、字林」に作る。

○「玉篇、方言、釋名、廣雅、廣韻」を、全集本は「玉篇、廣韻」に作る。

○『經解入門』經與子相表裏第二十に重なる部分がある。

周秦諸子皆與經相出入、如管子之治術、司馬之兵法、墨子之引書、荀子之傳詩、皆得經之古義。而讀者取其事實、可以補證經傳之簡略。知其旨歸、可以補證經傳之譌文佚文。知其古訓古音、可以訂經傳音注之得失、即漢魏諸子亦然。蓋漢魏去古遠、微言大義猶未絶于人間。故其義理雖純雜不一、而所以發明經義、仍瑕不掩瑜、與唐以後所謂子部者大別。惟讀之宜以細心、務在先求訓詁、必使確實可解。勿徒空論其文、臆度其理。即如莊子寓言、多烏有子虛之事。而其文字名物、仍鑿鑿可據。蓋凡古人著書斷未有。故令其語在可解不可解之間者。況天地間、人情物理、猥瑣纖末之事、經史所不能盡者、子部無乎不有。其趣妙處、較之經史、尤易引人入勝。以經學家實事求是之法讀之、斯其益無限。因取先秦以上傳記、子史及解經之書、古人通名傳記。眞出古人之手、及漢魏著述中理者、約舉其名于後。俾學者知所趨焉。

三代古傳記。國語、國策、大戴禮、最要。七經緯、國朝人蒐集。較古微書爲備。緯與織異。乃三代儒者說經逸文。勿以耳食而議其議。山海經、世本、逸周書、竹書紀年、穆天子傳上三書雖有假託、皆秦以前人所爲。周髀、素問、司馬法之類、皆足爲考證經義之用。

周秦間諸子。荀子、管子、呂氏春秋、最要。莊子、墨子之屬、理雖悠謬、可證經傳者甚多。此外、老子、孫子、晏子春秋、列子、文子、吳子、韓非子、鶡冠子、孔叢子、楚辭。楚辭集類。以其可證經者多。故附此。皆善。至於尸子、商子、尹文子、關尹子、燕丹子、近人均有采集校本。其餘子部尚繁。或偽作、或佚存無幾。不錄。

漢至隋説經之書。許氏五經異義、鄭氏駁異義、經典釋文爲要。注家得失篇、

已舉之矣。其餘善者、

乾鑿度、鄭注尚書大傳、韓詩外傳、春秋繁露、白虎通、春秋釋例、陸璣詩疏、皇侃論語疏、李氏周易集解、虞氏易注、鄭氏易注、荀九家易注、尚書馬鄭注、左傳賈服注、蔡邕明堂月令章句、鄭氏箴膏肓、起廢疾、發墨守、毛鄭異同評、劉炫規杜之屬。

漢魏遺書、古經解彙函、古經解鈎沈等書、或原部收入、或原書亡佚。各家從他書中輯出、亦備存焉。

漢至隋小學之書。說文、玉篇、廣雅、廣韻、最要。而急就篇、方言、釋名、字林四書、亦善。字林久佚。近人任大椿蒐集成書、名字林考逸。廣韻即陸法言切韻、略有增修。故列入隋。以下、唐人一切經音義爲勝。東洋刻本其餘汗簡、集韻、韻補、韻會、薛尚功鐘鼎款識之屬、亦資考證。但少緩耳。倉頡凡將諸書、久亡。任大椿蒐集之、名小學鈎沈。與小學彙函、皆宜讀。

漢後隋前傳記諸子。新序、說苑、列女傳、水經注、最要。而吳越春秋、越絕書、家語王肅所集、故列此。漢官六種、三輔黃圖、華陽國志、淮南子、法言、鹽鐵論、新論、潛夫論、論衡、獨斷、風俗通、申鑒、齊民要術、文中子中說、顏氏家訓、九章算術、皆宜讀。算經隋前、尚有六種。乃專門之學、極有實用。自唐至明、其書不少。後出愈善。至國朝而極精。此取其古爲通經之用。此外子部如太玄經、易林、物理論、中論、人物志、高士傳、博物志、古今注、南方草木狀、洛陽伽藍記、荊楚歲時記、世說、抱朴子、金樓子之屬、雖頗翔實雅馴、僅資詞章談助、非其所急。難經、參同契、無關儒術。理惑、拾遺、違正害理。與其餘僞作之書、咸宜辨別。

【通釈】

書物を読むには古い書物をたくさん読まなければならない。

史伝以外、唐以前の書物はたくさん読まなければならない。なぜならば空疎な言葉が少ないからである。おおまかにいうと、秦より前の書物は一字

が千金（に相当するほどの価値がある）。漢から隋までの書物には、往々にして珠玉のような言葉が存在する。あやま（り）があるからといって非難するより、残しておいたほうがよいのではないだろうか。唐から北宋までの書物は、半ばを捨て半ばを残す。南宋から明までの書物は、善いものを選んでそれにしたがう。ここでは先秦以前の伝記、子史と解経の書物を、古人はいづれも「伝記」と名づける。のうち、ほんとうに古人の手になるものと、漢魏の著述のうち、道理にかなない実用に役立つものを選んで、その名を以下に列挙する。

『國語』『戰國策』『大戴禮』『七經緯』清朝の人の蒐集したもの。『古微書』にくらべて完備している。緯は織とは異なり、三代の儒者が経を解説した逸文である。（傷はあるがその）傷が玉の美しさをそこなうことはない。よくないと聞いたからといって読まずに議論してはならない。『山海經』『世本』近人の秦嘉謨輯補。『逸周書』『竹書紀年』『穆天子傳』この三つの書物は、仮託の部分はあがあるが、いづれも秦以前の人が作ったものである。『周髀』『素問』『司馬法』班固の『藝文志』では礼家列入されている。この書はすべて軍礼について述べている。以上の書物はすべて経義を考証するのに役立つ。

以上、三代の古い伝記である。これ以外はすべて漢以後の偽書である、決して信じてはならない。『國語』『戰國策』『大戴禮』がもっとも重要である。

『老子』『管子』『孫子』『晏子春秋』『列子』『莊子』『文子』『呉子』『墨子』『荀子』『韓非子』『鶡冠子』『孔叢子』『呂氏春秋』『楚辭』これは集の類であるが、経書を考証することができるので、ここに附す。これ以外に、さらに『戸子』『商子』『尹文子』『關尹子』『燕丹子』がある。いづれも清朝の人が佚文を輯集し校刻した本である。

以上、周秦の間の諸子である。これ以外にもまだたくさんあるが、偽作であったり、散佚してほとんど残っていないかったりする。『荀子』『管子』『呂氏春秋』がもっとも重要である。『莊子』『墨子』の類は、荒唐無稽の内容だが、経文を考証できるものがきわめて多い。

『乾鑿度鄭注』『尚書大傳』『韓詩外傳』『春秋繁露』『白虎通』『春秋釋例』

『陸璣詩疏』『皇侃論語疏』『周易集解』『經典釋文』。このふたつの書物は、唐初の人が編集したものであるが、内容は漢魏六朝人の旧説である。これ以外にさらに『五經異義』『駁五經異義』『虞氏易注』『鄭氏易注』『荀九家易注』『尚書馬鄭注』『左傳賈服注』蔡邕『明堂月令章句』『箴書旨』『起廢疾』『發墨守』『毛鄭異同評』『劉炫規杜』『漢魏遺書』『古經解鈎沈』などの書物がある。いずれも原書は亡佚した。（現在あるものは）清朝の人が他の書物から輯集したものである。

以上、漢から隋までの、経を解説した書物である。唐から清朝まで、経学に関する書物はとても多い。後日、重要なものを選んで篇目を掲げるのを待ってほしい。

『急就篇』『説文』『字林』この書物は長い間亡佚していた。清朝の任大椿が蒐集して書物とし、『字林攷逸』と名づけた。『玉篇』『方言』『釋名』『廣雅』『廣韻』『廣韻』は陸法言の『切韻』であるが、いくらか増補されているので、隋のところに列する。これ以降では唐の人の『一切經音義』がもっともすぐれている。さらに『汗簡』『集韻』『韻補』『韻會』薛尚功『鐘鼎款識』などがあり、やはり考証に利用できる。ただ少しあとまわしでもよい。『倉頡』『凡將』の諸書は長い間亡佚していた。任大椿が輯集して、『小學鈎沈』と名づけた。もっともよい。

以上、漢から隋までの小学の書物である。『説文』『玉篇』『廣雅』『廣韻』がもっとも重要である。

『新序』『説苑』『列女傳』『呉越春秋』『越絶書』『家語』王肅が輯集したもので、ここに列する。『漢官六種』『三輔黄圖』『水經注』『華陽國志』『淮南子』『法言』『鹽鐵論』『新論』『潜夫論』『論衡』『獨斷』『風俗通』『申鑒』『齊民要術』『文中子中説』門人が作ったもので、体裁はよくないが、内容はすこぶる精密であり、棄て去ってはならない。『顔氏家訓』『九章算術』これ以外に、隋以前の算經にはさらに六種類ある。算術は専門の学問であるが、きわめて実用的である。唐から明まで、算術の書物は少なくない。後出のものほど精密である。清朝になってきわめて精密になった。ここでは古くて経に通じるのに利用できるものをあげた。

以上、漢以後、隋以前の伝記諸子である。これ以外の『太玄經』『易林』『物理

論』『中論』『人物志』『高士傳』『博物志』『古今注』『南方草木狀』『洛陽伽藍記』『荊楚歲時記』『世説』『抱朴子』『金樓子』などは、内容が詳細・精密で文章もすぐれているが、わずかに詩文や談話の助けとなるだけで、さしそまって必要なものではない。『難經』『參同』は儒術とは無関係である。『理惑』『拾遺』は、正義にそむき道理を傷つける。残りはほとんど偽作であるので、（真偽を）判別しなければならない。『新序』『説苑』『列女傳』『水經注』がもっとも重要である。

【書目答問】

- ・國語韋昭注二十一卷、附札記一卷。顧廣圻校。黃氏士禮居仿宋刻本、武昌局翻黃本。黃模國語補章、未見傳本。
- ・國語補音三卷。宋宋庠。微波榭本、吳氏望三益齋刻本。
- ・國語校注本三種二十九卷。三君注輯存四卷、國語發正二十一卷、國語考異四卷。汪遠孫。自刻本。
- ・國語韋昭注疏十六卷。洪亮吉。旌德呂氏刻本。龔麗正國語韋昭注疏、董斯垣國語正義、未見傳本。
- ・戰國策高誘注三十三卷、札記三卷。宋姚宏校正續注。顧廣圻校。士禮居仿宋刻本、武昌局翻刻本。
- ・戰國策高誘注三十三卷。宋姚宏校正續注。雅雨堂校本。鮑彪注本多竄改、不如如此兩本。
- ・戰國策校注十卷。宋鮑彪注。元吳師道補正。惜陰軒叢書本。
- ・國策地名考二十卷。程恩澤。狄子奇箋。粵雅堂本。
- ・戰國策釋地三卷。張琦。家刻本。
- ・大戴禮記盧辯注十三卷。雅雨堂校本、聚珍本、福本。
- ・大戴禮記補注十三卷、叙錄一卷。孔廣森。驛軒所著書本、揚州局本、學海堂本無叙錄。
- ・大戴禮記解詁十三卷、叙錄一卷。王聘珍。自刻本。

- 大戴禮記正誤一卷。汪中。學海堂本。
 - 七緯三十八卷。趙在翰輯。福州小積石山房刻本。
 - 古微書三十六卷。明孫穀。章刻本、陳刻本、活字版本、守山閣本、金壺本。孫書本有焚微、綫微、闕微、刪微四種、總名微書、此其刪微一種。
 - 山海經箋疏十八卷、圖讚一卷。郭璞注讚、郝懿行疏。阮刻單行本、又郝氏遺書本、郝勝於畢。別行山海經圖讚一卷、藝海珠塵及他叢書多有之。
 - 山海經十八卷。畢沅校。經訓堂本。
 - 世本一卷。孫馮翼輯。問經堂本、又高郵茆氏輯刻十種古書本。
 - 校輯世本二卷。雷學淇。自刻本。
 - 世本輯補十卷。秦嘉謨。原刻本。
 - 逸周書孔晁注十卷。盧文弨校。抱經堂本。
 - 逸周書補注二十四卷。陳逢衡。自著陳氏叢書本。
 - 周書集訓校釋 卷。朱右曾。自刻本。
 - 逸周書管箋十六卷。丁宗洛。刻本。
 - 校正竹書紀年二卷。洪頤煊。平津館本。
 - 竹書紀年集證五十八卷。陳逢衡。陳氏叢書本。
 - 竹書紀年補證四卷。林春溥。竹柏山房十一種本。
 - 考訂竹書紀年十四卷。雷學淇。家刻本。
 - 穆天子傳郭璞注七卷。洪頤煊校。平津館本、又古今逸史本。檀萃穆傳注疏、博而多謬、不錄。
 - 周髀算經二卷。漢趙君卿注、北周甄鸞述、唐李淳風釋。互見前古子。音義一卷。宋李籍。又聚珍本、福本、又津逮本、學津本。
 - 素問王冰注二十四卷。明仿刻宋高保衡等校本、近人重刻本。
 - 司馬法三卷、附逸文。指海本、又邢澍輯注折江刻本、又平津館本一卷。兵。
-
- 老子王弼注二卷。聚珍本、杭本、福本。河上公注偽。道。
 - 老子道德經考異上下卷。畢沅。經訓堂本。
 - 管子尹知章注廿四卷。舊題唐房玄齡注。明趙用賢校本、即管韓合刻本、附劉績補注。十子本同上、但多評語、不善。
 - 管子義證八卷。洪頤煊。傳經堂本。
 - 孫子魏武帝注三卷。平津館校本。兵。
 - 孫子十家注十三卷。岱南閣校本。
• 晏子春秋七卷、音義二卷。孫星衍音義。岱南閣本、經訓堂本、又吳鼎仿宋本。
 - 列子張湛注八卷、附殷敬順釋文。汪繼培校。湖海樓本、任大椿燕禧堂本附考異。道。
 - 列子盧重玄注八卷。秦恩復校刻本。
 - 莊子郭象注附釋文十卷。明鄒之嶧刻本、明胡氏世德堂大字本、十子本即世德堂本。道。
 - 文子二卷、附校勘記。守山閣本、又金壺本、吳刻二十子本。道。
 - 文子續義十二卷。宋杜道堅。聚珍本、福本。
 - 吳子一卷。平津館校本。兵。
 - 墨子十五卷、目錄一卷。畢沅校。經訓堂本。墨。
 - 荀子楊倞注二十卷。謝墉校本。通行蘇州王氏刻十子全書本、即謝校本。儒。
 - 荀子補注一卷。郝懿行。郝氏遺書本。
 - 韓非子二十卷、附識誤三卷。吳鼎校刻本、又明趙用賢校管韓合刻本即十子本、又明周孔教刻大字本。法。
 - 鶡冠子陸佃注三卷。聚珍本、福本、學津本。雜。
 - 孔叢子七卷。浙江新刻影宋巾箱本、漢魏叢書本三卷。儒。有依託、不盡偽。

- ・呂氏春秋高誘注二十六卷。經訓堂校本。 雜。
- ・呂子校補二卷。梁玉繩。 清白士集本。 呂子校補獻疑一卷。蔡雲。 自刻本。
- ・楚辭補注十七卷。漢王逸注。 宋洪興祖補。 汲古閣毛表校本。 楚辭章句十七卷、大小雅堂刻本、止王注。
- ・楚辭集注八卷。辨證二卷、後語六卷。宋朱子。 明成化吳氏刻本、明閔刻本無辨證、後語。
- ・尸子二卷。章宗源輯。 湖海樓注本、問經堂本、平津館本。 雜。
- ・尸子三卷、附錄一卷。任兆麟輯。 心齋十種本。
- ・商子五卷。嚴可均輯。 平津館別刻本、指海本、又明吳勉學刻二十子本。 法。
- ・尹文子一卷、附校勘記、遺文。守山閣本、又湖海樓本、又金壺本。 名。
- ・關尹子一卷。明吳勉學刻二十子本、珠叢別錄本。 道。
- ・燕丹子三卷。章宗源輯。 岱南閣本、又平津館本、問經堂本一卷。 雜。
- ・乾鑿度鄭注二卷。丁杰輯補。 雅雨堂本。
- ・高密遺書十四種。黃奭輯刻漢學堂本。 六藝論、易注、尚書注、尚書大傳注、毛詩譜、箴膏肓、釋廢疾、發墨守、喪服變除、駁五經異義、答臨孝存周禮難、三禮目錄、魯禘祫義、論語注、鄭志、禮記。
- ・韓詩外傳十卷。漢韓嬰。 趙懷玉校本、周廷榮校注本、吳氏望三益齋周趙合校本、古經解彙函本、又津逮、學津、通津草堂三本、皆遜。 陳瑒韓詩外傳疏證傳十卷、未見傳本。
- ・春秋繁露十七卷。漢董仲舒。 戴震、盧文弨校。 聚珍本、福本、抱經堂本。
- ・白虎通義四卷。漢班固。 抱經堂校本、聚珍本、福本。 此書皆言禮制、故入此類。
- ・春秋釋例十五卷。晉杜預。 岱南閣校本、聚珍本、福本、又席氏掃葉山房本、古經解彙函本。
- ・校正陸璣毛詩草木鳥獸蟲魚疏二卷。丁晏校。 六藝堂本、古經解彙函重刻丁本、又津逮本。
- ・陸璣疏考證一卷。焦循。 焦氏叢書本。
- ・論語義疏十卷。梁皇侃。 殿本、知不足齋本、古經解彙函重刻鮑本。
- ・周易集解十七卷。唐李鼎祚。 雅雨堂本、古經解彙函重刻盧本、明毛晉刻津逮秘書本、張海鵬照曠閣刻學津討源本、又明木瀆周氏刻本、仁和葉氏刻周本、盧本附釋文。
- ・經典釋文三十卷、考證三十卷。唐陸德明釋文、盧文弨考證。 抱經堂本、武昌局翻本、成都局翻本附孟子音義、通志堂本未善。
- ・五經異義、漢許慎。並駁義、漢鄭玄。 一卷、補遺一卷。王復輯。 問經堂本、珠塵本。
- ・五經異義疏證三卷。陳壽祺。 家刻本、學海堂本。 蒙按：皮錫瑞五經異義疏證 卷、長沙刻本。
- ・易義別錄十四卷。張惠言。 孟喜、姚信、翟子元、蜀才、京房、陸續、干寶、馬融、宋衷、劉表、王肅、董遇、王廙、劉瓛、子夏。
- ・鄭氏易注十卷。漢鄭玄。 盧見曾刻雅雨堂叢書輯本、又廣州刻古經解彙函本三卷、附補遺一卷。
- ・周易鄭注十二卷。丁杰輯補。 陳春刻湖海樓叢書本。
- ・周易荀氏九家義一卷。張惠言。 岱南閣別行本。 龔自珍尚書序大義、尚書馬氏家法、未見傳本。
- ・左傳賈服注輯述二十卷。李貽德。餘姚朱氏刻本。 馬宗樾先有輯本刊行、李書爲詳、且有發揮。
- ・蔡邕月令章句二卷。蔡雲輯。 道光四年王氏刻本、又馬瑞辰輯注本。

- ・箴膏肓一卷、起廢疾一卷、發墨守一卷。漢鄭玄。問經堂輯本、珠塵本、亦在黃奭輯高密遺書內。
- ・毛詩異同評三卷。晉孫毓。難孫氏毛詩評一卷。陳統。玉函山房輯本。
- ・劉炫規杜持平六卷。邵瑛。原刻本。
- ・古經解鈎沈三十卷。余蕭客輯。原刻本、魯氏重刻本。
- ・急就篇四卷。漢史游。唐顏師古注、宋王應麟補注。陳氏獨抱廬本、津逮本、學津本、玉海附刻本。
- ・急就章考異一卷。孫星衍。岱南閣別刻行本、小學彙函本。
- ・說文解字十五卷。漢許慎。宋徐鉉校定附字。平津館小字本、小學彙函重刻孫本、汲古閣五次剋改大字本、朱校大字本即毛本、藤花榭額氏刻中字本、廣州新刻陳昌治編錄一篆一行本、蘇州浦氏重刻孫本。孫本最善、陳本最便。
- ・字林考逸八卷。任大椿。燕禧堂本。
- ・玉篇三十卷。梁顧野王元本。唐孫強增字、宋陳彭年等重修。澤存堂本、小學彙函重刻張本、鄧顯鶴重刻張本附札記、棟亭五種本、又明經廠大字本。
- ・方言注十三卷。漢揚雄。晉郭璞注。丁杰校。抱經堂本、聚珍本、福本、小學彙函本。方言、釋名、小爾雅、廣雅四種、明郎奎金刻五雅、漢魏叢書、古今逸史、皆并有之、但無校注、不善。
- ・方言疏證十三卷。戴震。戴氏遺書本。錢繹方言箋疏十三卷、錢侗方言義證六卷、未刊。
- ・釋名疏證八卷、補遺一卷。漢劉熙。江聲疏補。經訓堂篆書、正書兩本、又瓊川書屋本、小學彙函本、無疏證。
- ・廣雅疏證十卷。王念孫疏證。家刻本、學海堂本。
- ・廣韻五卷。隋陸法言切韻元本、唐孫愐宋陳彭年重修。澤存堂本、鄧顯鶴重刻張本、曹寅棟亭五種本、又明經廠大字本、小學彙函重刻張本明本兩本、張本較勝。
- ・一切經音義二十五卷。唐釋玄應。莊炘校刻本、海山仙館本、杭州新校刻本。
- ・汗簡三卷、目錄叙略一卷。宋郭忠恕。汪啓淑刻本、汪立名一隅草堂本。此書多沿誤、鄭珍汗簡箋正七卷、極精、未刊。
- ・集韻十卷。宋丁度等。棟亭五種本、姚氏咫進齋本。
- ・韻補五卷。宋吳棫。連筠簃叢書校本。
- ・韻補正一卷。顧炎武。亭林遺書本、借月山房本、指海本、連筠簃本。苗夔韻補正、未刊。
- ・韻會舉要三十卷。元黃公紹原本、能忠刪。元刻明補本。注所引有古書。
- ・薛氏鐘鼎款識二十卷。宋薛尚功。阮刻本。
- ・倉頡篇三卷。孫星衍輯。岱南閣本。
- ・小學鈎沈二十卷。任大椿。山陽汪氏刻本。
- ・新序十卷。漢劉向。明經廠新序說苑合刻本、何良俊合刻本、漢魏叢書本。陳壽祺有新序、說苑校本、未刊。
- ・說苑二十卷。漢劉向。明經廠新序說苑合刻本、何良俊合刻本、漢魏叢書本。
- ・附圖列女傳七卷、續一卷。漢劉向。阮刻仿宋本。顧之達小讀書堆本、亦精、無圖。
- ・列女傳注八卷。郝懿行妻王照圓。郝氏遺書本。
- ・列女傳校注八卷。汪遠孫妻梁端。家刻本。
- ・吳越春秋十卷。漢趙曄。古今逸史、漢魏叢書本併爲六卷。
- ・越絕書十五卷。漢袁康。明仿宋刻本、古今逸史本、漢魏叢書本。
- ・家語王肅注十卷。汲古閣本。今通行李氏重刻汲古本作四卷。非古家語、

然不能廢。

・家語何孟春注八卷。盧文弨校刻本。

・家語疏證六卷。孫志祖。自刻本。

・漢官六種。漢官一卷、漢官解詁一卷、漢王隆撰、胡廣注。漢舊儀二卷、

補遺二卷、衛宏。漢官儀二卷、應劭。漢官典職儀式選用一卷、蔡質。

漢儀一卷、吳丁孚。平津館本。

・三輔黃圖一卷。莊達吉校。平津館本、自刻本。

・戴校水經注四十卷。魏麗道元。戴震校。聚珍本、杭本、福本、戴氏遺

書本。戴校以前、黃刻諸本皆遜、全祖望校水經注、靈石楊氏刻本未成、

今京師印行者止百餘葉。

・水經注釋四十卷、刊誤十二卷。趙一清。原刻本。

・水經注釋地四十卷、水道直指一卷、補遺一卷。張匡學。嘉慶二年新安張

氏刻本。

・水經注圖一卷。今人。武昌刻本。

・水經注圖說殘稿四卷。董祐誠。董方立遺書本。

・華陽國志十二卷、附錄一卷。晉常璩。顧廣圻校。廖寅刻足本。

・淮南子高誘注二十一卷。莊達吉校本。十子本即此本。兼道家。

・許叔重淮南子注一卷。孫馮翼輯。問經堂本。

・淮南萬畢術一卷。孫馮翼輯。問經堂本、又茆輯十種本。

・淮南天文訓補注二卷。錢塘。指海本。

・法言李軌注十三卷、音義一卷。漢揚雄。秦恩復仿宋大字本、又徐養原校

李賡芸刻本。

・法言五臣注十卷。世德堂本、十子本同。李軌、柳宗元、宋咸、吳秘、司

馬光。

・鹽鐵論十卷、考證三卷。漢桓寬。張敦仁考證。岱南閣刻本、明張之象

注本。

・新論一卷。漢桓譚。問經堂輯本。

・潛夫論箋十卷。漢王符。汪繼培箋。湖海樓本、漢魏叢書本無箋。

・論衡三十卷。漢王充。明刻單行本、漢魏叢書本。

・獨斷二卷。漢蔡邕。抱經堂校本、又百川本、漢魏叢書本、聊城楊氏刻附

蔡中郎集本、揚州局刻附疏證。

・風俗通義十卷。漢應劭。漢魏叢書本、又仿宋單行本。四庫本有附錄一卷、

即輯姓氏篇佚文、詳見後。

・補風俗通姓氏篇一卷。張澍。二酉堂本。錢大昕輯本、在羣書拾補中。

・申鑒五卷。漢荀悅。漢魏叢書本。

・齊民要術十卷。魏賈思勰。津逮本、學津本、秘冊彙函本。

・中說十卷。舊題隋王通。宋阮逸注。世德堂本。即文中子。

・顏氏家訓注七卷。北齊顏之推。趙曦明注。抱經堂本、又知不足齋本。

兼釋家。

・九章算術九卷。漢人。魏劉徽注、唐李淳風釋、戴震補圖。音義一卷。宋

李籍。附策算一卷。戴震。又聚珍本、福本、常熟屈氏重刻本。

・戴校算經十書三十七卷。戴震校。微波榭本。

・太玄經十六卷。漢揚雄。蜀范望注。明刻仿宋本、孫氏古棠書屋叢書本。

・太玄經集注十卷。宋司馬光。嘉慶庚午陶五柳仿宋本。

・易林十六卷。舊題漢焦贛。依徐養原、牟廷相、定爲漢崔篆。士禮居校宋

本、單行重刻黃本、津逮本、學津本並爲四卷。

・物理論一卷。晉楊泉。平津館輯本。

・中論二卷。魏徐幹。漢魏叢書本。

・人物志三卷。魏劉邵。守山閣本、金壺本。舊入名家。

・高士傳三卷。晉皇甫謐。漢魏叢書本。嚴可均輯嵇康高士傳、未刊。

・博物志十卷、附逸文。舊題晉張華。指海本、又士禮居本。

・古今注三卷、晉崔豹。附中華古今注三卷。五代馬縞。古今逸史本、漢魏

叢書本。

・南方草木狀三卷。晉嵇含。漢魏叢書本。

・洛陽伽藍記五卷、集證一卷。魏楊街之。吳若準集證校刻本、叢書多有、吳本最善。

・荊楚歲時記一卷。梁宗懷。漢魏叢書本。

・世說新語三卷。宋劉義慶。明袁氏仿刻宋本、道光戊子周氏紛欣閣重刻袁本、惜陰軒本。

・抱朴子內外篇八卷。晉葛洪。平津館本。兼道家。

・抱朴子內篇校勘記一卷、佚文一卷。外篇校勘記一卷、佚文一卷。嚴可均。四錄堂類集本。

・金樓子六卷。梁元帝。知不足齋本。兼釋老。

— 7 —

讀古書宜分眞僞。

此事本朝諸老論之最詳、辨之最精。卽四庫提要中、已具大畧。試取觀之、自然昭若發蒙。國朝姚際恒古今僞書考、有單行本。又收知不足齋叢書中。簡便易看。

【書き下し】

古書を讀むには宜しく眞僞を分つべし。

此の事、本朝の諸老、之を論ずること最も詳らかなり、之を辨ずること最も精なり。卽ち『四庫提要』中に、已に大畧を具ふ。試みに取りて之を觀れば、自然に昭らかなること蒙を發するが若し。國朝の姚際恒の『古今僞書考』單行本有り。又『知不足齋叢書』中に收む。は簡便にして看易し。

【註】

○『經解入門』群經辨僞第四に重なる部分がある。辨僞之事、近人最詳。卽四庫提要中、已具大略。姚際恒古今僞書考、亦簡便可讀。

【通釈】

古書を讀むには眞僞を弁別しなければならない。

この事については、清朝の諸老がもつとも詳細に議論し、もつとも精密に弁別している。『四庫提要』中にすでに大要が具わっている。試みにこれを閲読すれば、覆われているものが取りはられるように自然とはつきりする。清朝の姚際恒の『古今僞書考』單行本があり、『知不足齋叢書』中にも収録されている。は簡便で読みやすい。

【書目答問】

・四庫全書總目提要二百卷。乾隆四十七年敕撰。殿版大字本、揚州小字本、廣州小字本。

・古今僞書考一卷。姚際恒。知不足齋本。

・知不足齋叢書。鮑廷博。

— 8 —

讀書宜讀有用書。

有用者何。可用以考古、可用以經世、可用以治身心三等。唐人崇尚詞章、多撰瑣碎虛誕無理之書。宋人筆墨繁冗、公私文字、多以空論衍成長篇。著書亦然。明人好作應酬文字、喜談賞鑒清供。又好藍本陳編、改換敷衍、便成著作、以致累車連屋、眩人耳目、耗人精神、不能專意要籍。唐以後書、

除史部各有所用外、凡記典章風俗軼事地理之屬、皆史類。明人地志最劣。其餘陳陳相因之經注、無關要道之譜錄、庸猥應酬之詩文集、明人書尤無謂者、鄙陋不根之方志、書帕饋贈之小品、變名射利之評本、程試湊集之類書。皆宜屏絕廓清。庶幾得有力、以讀有用之書耳。近代文集、鄙者無論、即佳者少看數部亦無妨。多讀經子史、乃能工文。但讀集、不能工文也。詩亦同。若論其深、總須人有餘於詩文者佳、詩文餘於人者必不佳。

【書き下し】

書を読むには宜しく有用の書を読むべし。

「有用」とは何ぞや。以て古を考するに用ふ可し、以て世を経するに用ふ可し、以て身心を治むるに用ふ可きの三等なり。唐人は詞章を崇尚し、多く瑣碎虚誕無理の書を撰す。宋人の筆墨は繁冗、公私の文字は多く空論を以て長篇を衍成す。著書も亦然り。明人は好んで應酬の文字を作り、喜んで賞鑒清供を談ず。又藍本陳編を好み、改換敷衍して、便ち著作を成し、以て車を累ね屋を連ね、人の耳目を眩はし、人の精神を耗するを致し、意を要籍に専らにする能はず。唐以後の書、史部各おの用ふる所有るを除きて外、凡そ典章・風俗・軼事・地理を記するの属は、皆史の類なり。明人の地志は最も劣る。其の餘の陳陳相因の經注、要道に關する無きの譜錄、庸猥應酬の詩文集は、明人の書の尤も謂無き者は、鄙陋不根の方志、書帕饋贈の小品、變名射利の評本、程試湊集の類書なり。皆宜しく屏絶廓清すべし。庶幾はくは日力有りて、以て有用の書を読むを得るのみ。近代の文集、鄙なる者は論ずる無く、即ち佳なる者少しく數部を見るも亦妨ぐる無し。多く經子史を讀みて、乃ち能く文に工なり。但だ集を讀むのみにては、文に工なる能はざるなり。詩も亦同じ。若し其の深きを論ずれば、總須人、詩文より餘り有る者は佳なり、詩文、人より餘る者は必ず佳ならず。

【通釈】

書物を読むには有用の書物を読まなければならない。

「有用」とはなにか。古代のことを考察するのに利用できる、世の中を治めるのに利用できる、自分の身心を治めるのに利用できる、の三つである。唐の人は詩文をたつとび、くどく、でたらめで、道理のない書物をたくさん編纂した。宋の人の作品は冗長で、公私の文章は、空論を用いて長篇を作製することが多い。著書も同様である。明の人は好んで應酬の文章を作り、好んで書画骨董を談論した。さらに種本や古書を好み、それを改変増補し、すぐに著作に仕立て、似たような書物を何冊も著し、人の耳や目をまどわし、人の精神を疲れさせ、重要な書籍に心をよせることができなかつた。唐以後の書物では、史部の書物がそれぞれ利用するところがあるのを除き、典章・風俗・軼事・地理を記載するものはすべて史部の類である。明の人の地志はもともと劣る。それ以外の変わりばえのしない經注、重要な道理に關係しない譜錄、平凡で卑俗な詩文集は、明の人の書物でももとも意味のないものは、鄙陋で根柢のない方志、贈答奉呈の小品、名を変えて營利を求める評本、科擧の答案を集めた類書である。すべて駆逐掃討しなければならない。わたしの願いは日々の力をつくして有用の書物を読んでもらいたいだけにすぎない。近代の文集では、鄙俗なものはいうまでもなく、すぐれたものならいくつか閲読してもかまわない。經子史の書物をたくさん読んで、はじめて文章がうまくなることができるのであつて、集の書物を読んだだけでは文章はうまくならない。詩も同様である。もしもつと深い点を論じたならば、總体的に人物が詩文よりすぐれている人の作品はよいが、詩文が人物よりすぐれている人の作品はかならずよくない。

宋學書宜讀近思錄。

宋儒以後理學家書、推明性理、洵發前代未發。然理無盡藏、師無定法、涯

涖難窮。其高深微妙、下學未能猝解。朱子近思錄一書、言約而達、理深而切、有益身心。高下咸宜。所宜人置一編。其餘俟積久基成、自宜廣覽。國朝江永有校注本。極精。近湖北局刻亦好。

王陽明學術宗旨、雖與程朱不同、然王出於陸、亦宋學也。猶如繼別之後、更分大宗小宗。不必強立門戶、互相訾訾。

講宋學者、必先將二程遺書、朱子語類、明儒學案三書讀過。字字寓目、方可幾望入門耳。國朝王懋竑最深於朱子之學。所著白田雜著必當看。

【書き下し】

宋學の書は宜しく『近思錄』を読むべし。

宋儒以後の理學家の書は、性理を推明し、洵に前代未だ發せざるを發す。然れども理に盡藏無く、師に定法無く、涯涘窮まり難し。其の高深微妙は、下學未だ猝かに解する能はず。朱子の『近思錄』の一書は言約にして達し、理深くして切、身心に益有り。高下咸宜し。宜しく人ごとに一編を置くべき所なり。其餘は積久基成を俟ちて、自ら宜しく廣く覽るべし。國朝の江永に校注本有り。極めて精なり。近ごろ湖北局刻も亦好し。

王陽明の學術宗旨は、程・朱と同じからずと雖も、然れども王は陸より出づれば、亦宋學なり。猶ほ繼別の後、更に大宗小宗に分かるるが如し。必ずしも強ひて門戸を立て、互いに相訾訾せず。

宋學を講ずる者は、必ず先づ『二程遺書』『朱子語類』『明儒學案』の三書を將て讀過し、字字目に寓して、方めて門に入るを幾望す可きのみ。國朝の王懋竑最も朱子の學に深し。著す所の『白田雜著』は必ず當に看るべし。

【註】

○言約にして達し、理深くして切 『禮記』學記に「善く歌ふ者は、人をして其の聲を繼がしむ。善く教ふる者は、人をして其の志を繼がしむ。其

の言や約にして達し、微にして臧く、譬罕にして喻す、志を繼ぐと謂ふべし」(善歌者、使人繼其聲。善教者、使人繼其志。其言也約而達、微而臧、罕譬而喻、可謂繼志矣)とある。

【通釈】

宋学の書物は『近思錄』を読まなければならない。

宋儒以後の理學家の書物は、性理を推し明らかにし、実に前代にまだ言われてこなかったことを表明している。しかしながら理には深い内容もなく、師には決まった教えもなく、はてまで極めるのが難しい。その理の高く奥深いさまは、下学の者は、すぐには理解できない。朱子の『近思錄』という書物は、言葉は簡明であるが広くゆきわたり、道理も深くて要領を得、身心にとって有益である。高学の者から下学の者まですべてに適した書物である。人ごとにその書物一編を備え置かなければならない。それ以外の書物は、時間をかけて基礎が完成するのを待つて、自ら広く閱覧しなければならぬ。(清朝の江永に校注本がある。極めて精密なものである。最近の湖北局刻本もすぐれている。)

王陽明の學術の中心的考えは、程子・朱子と同じではないといつても、しかし王陽明は陸象山から出ているので、これまた宋学である。ちょうど別子を継いだ後、さらに大宗(本家)・小宗(分家)に分かれるようなものである。強いて門戸を立てて、互いに批判しあう必要はない。

宋学を研究する者は、必ず先づ『二程遺書』『朱子語類』『明儒學案』の三書を読破し、一字一字目を通して、はじめて入門することを希望することができる。(清朝の王懋竑は最も朱子の学問に深い。著した『白田雜著』は必ず閱覧しなければならない。)

【書目答問】

- ・近思錄集注十四卷。宋朱子呂祖謙同撰。江永注。原刻本、武昌局本、吳氏望三益齋本。
- ・二程全書。遺書二十五卷、附錄一卷、外書十二卷、文集十二卷、遺文一卷、附錄一卷、周易傳四卷、經說八卷、粹言二卷。同治十年求我齋江甯刻本、又寶誥堂呂氏刻本。
- ・朱子語類一百四十卷。宋黎靖德編。明刻本。日本刻本。
- ・明儒學案六十二卷。黃宗羲。乾隆己未慈谿鄭氏補刊本。又故城賈氏刻本。萬氏原刻本未足。此書爲陸王之學。
- ・白田雜著八卷。王懋竑刻本。
- ・傳習錄三卷。明王守仁。明刻單行本、王文成公集本。
- ・王文成全書三十八卷。明王守仁。明刻本、又通行本亦稱陽明全集。
- ・金元明八大家文選五十三卷。李祖陶編。元好問、姚燧、吳激、虞集、宋濂、王守仁、唐順之、歸有光。
- ・象山語錄四卷。宋陸九淵。附象山全集本、止二卷。

10

爲學忌分門戶。

近代學人、大率兩途。好讀書者宗漢學。講治心者宗宋學。逐末忘源、遂相詬病、大爲惡習。夫聖人之道、讀書治心、誼無偏廢、理取相資。詆謀求勝、未爲通儒。甚者、或言必許鄭、或自命程朱。夷考其行、則號爲漢學者、不免爲貪鄙邪刻之徒。號爲宋學者、徒便其庸劣巧詐之計。是則無論漢宋、雖學奚爲。要之、學以躬行實踐爲主。漢宋兩門、皆期於有品有用。使行誼不修、蒞官無用。楚固失矣、齊亦未爲得也。若夫欺世自欺之人、爲漢儒之奴隸、而實不能通其義、爲宋儒之佞臣、而並未嘗讀其書。尤爲大謬、無足深

責者矣。經典義理、舍文字訓詁、何從知之。此事恐難析離。

宋儒表章學庸。然禮記乃二戴所傳、七十子後學者所記。見『漢書』藝文志。夫云七十子後學者、非秦漢以來經師而何。是真漢學也。漢志有中庸說二篇。在『戴記』後。隋志有梁武帝中庸講疏一卷。宋天聖八年、以大學賜新第王拱辰等。專尊中庸、義有所昉。況樂記一篇、漢人所撰、据別錄有賈公一篇知之。實括論性主靜諸義。董子韓嬰、備言性道中和。然則性理之學、源出漢儒。強生分別、不知學者也。考證校勘之學、乃劉攽、宋祁、曾鞏、沈括、洪邁、鄭樵、王應麟、開其端。實亦宋學也。

愚性惡聞人詆宋學、亦惡聞人詆漢學。意謂、好學者即是佳士。無論真漢學未嘗不窮理、真宋學亦未嘗不讀書。即使偏勝、要是誦法聖賢、各適其用、豈不勝於不學者。乃近人著書、入主出奴、互相醜詆、一若有大不得已者、而於不學者則絕不訾議。是誠何心。良可怪也。近年士人、既嫌漢學讀書太苦、又嫌宋學律身太拘。五經幾於廢閣、名文亦厭披覽。但患其不學耳。何暇慮及學之流弊哉。洛蜀交訌、章蔡快意。於是世之不學者、襲兩家之賸言。無論漢宋、一律謗毀、必欲天下同歸於不學、而後快。此亦如恥獨爲君子者耳。好學者各尊所聞、各行所知、勿爲所動。

【書き下し】

學を爲すには門戸を分つを忌む。

近代の學人には大率兩途あり。讀書を好む者は漢學を宗とす。治心を講ずる者は宋學を宗とす。末を逐ひ源を忘れ、遂に相詬病するは、大いに惡習と爲す。夫れ聖人の道は、讀書治心、誼として偏廢する無く、理として相資を取る。詆謀勝を求むるは未だ通儒と爲さず。甚だしき者は、或いは許・鄭を必すと言ひ、或いは自ら程・朱を命とす。夷^{たひ}らかに其の行ひを考ふれば、則ち漢學を爲すと號する者は、貪鄙邪刻の徒たるを免れず。宋學を爲すと號する者は、徒だ其の庸劣巧詐の計に便なるのみ。是れは則ち漢宋

を論ずる無く、學ぶと雖も奚をか爲さん。之を要するに、學は躬行實踐を以て主と爲す。漢宋兩門は皆有品有用に期す。行誼をして修めざらしめば、官に泣んで用無し。楚は固より失するも、齊も亦未だ得と爲さざるなり。夫の世を欺き自ら欺くの人、漢儒の奴隸と爲るも、實は其の義に通ずる能はず、宋儒の佞臣と爲るも、並びに未だ嘗て其の書を讀まざるが若きは、尤も大謬と爲し、深く責むるに足る者無し。經典の義理は、文字訓詁を捨て、何に従ひて之を知る。此の事恐らくは析離し難し。

宋儒は『學』『庸』を表章す。然れども『禮記』は乃ち二戴の傳ふる所、七十子の後學者の記する所なり。『漢書』藝文志に見ゆ。夫れ七十子の後學者と云ふは、秦漢以來の經師に非ずして何ぞや。是れ眞の漢學なり。『漢志』に『中庸說』二篇有り。『戴記』の後に在り。『隋志』に梁武帝『中庸講疏』一卷有り。宋の天聖八年、『大學』を以て新第の王拱辰等に賜はる。専ら『中庸』を尊ぶは、義に昉むる所有ればなり。況んや『樂記』一篇は漢人の撰する所に於て、『別錄』に『賈公』一篇有るに据りて之を知る。實は論性主靜の諸義を括るをや。董子韓嬰備さに性道中和を言ふ。然らば則ち性理の學は、源、漢儒に出づ。強ひて分別を生ずるは、學を知らざる者なり。考證校勘の學は乃ち劉敞、宋祁、曾鞏、沈括、洪邁、鄭樵、王楙、王應麟、其の端を開く。實は亦宋學なり。愚性として人、宋學を詆るを聞くを惡む、亦人、漢學を詆るを聞くを惡む。意謂へらく、學を好む者は即ち是れ佳士なり。眞の漢學未だ嘗て理を窮めずんばならず、眞の宋學も亦未だ嘗て書を讀まざるを論ずる無し。即ひ偏勝せしむるも、要ず是れ聖賢を誦法し、各おの其の用に適ひ、豈に不學者に勝らざらん。乃ち近人の箸書、入るは主とし出づるは奴とし、互いに相醜詆するは、一に大いに已むを得ざる者有り、而るに不學者に於ては則ち絶へて訾議せざるが若きは、是れ誠に何の心かあらん。良に怪しむべきなり。近年の士人、既に漢學は書を讀むこと太だ苦しきを嫌ひ、又宋學は身を律すること太だ拘なるを嫌ふ。五經は廢閣に幾く、名文も亦披覽を厭ふ。但だ其の不學を患ふ

るのみ。何ぞ慮、學の流弊に及ぶに暇あらんや。洛蜀交訌し、章蔡意を快くす。是に於て世の不學者、兩家の牘言を襲ひ、漢宋を論ずる無く、一律に謗毀し、必ず天下同じく不學に歸し、而る後に快くせんと欲す。此れ亦獨り君子と爲るを恥づる者の如きのみ。學を好む者は各おの聞く所を尊び、各おの知る所を行ひ、動く所と爲る勿れ。

【註】

○楚は固より失するも、齊も亦未だ得と爲さざるなり。ここでは漢学か宋学かいずれか一方に偏ることとどちらにも弊害が生じてしまふありようを言つたもの。『漢書』卷百十七司馬相如列伝第五十七に、楚の子虚が楚の雲夢沢の狩獵のようすを自慢したのに対して、斉の烏有先生が斉王を擁護して斉王の遊戲の楽しみ、苑囿の大きさを述べ、さらにその両者の意見を聞いていた無是公がにつこりと笑いながら「楚は則ち失す。齊も亦未だ得たりと爲さざるなり」（楚則失矣、齊亦未為得也）と言ふ一節がある。なお、この話は『文選』には、「子虚賦」「上林賦」の二つの作品として収められている。

○七十子後學者 『漢書』藝文志に「記百三十一篇。七十子の後學者の記する所なり」とある。

○中庸說二篇 『漢書』藝文志に「中庸說二篇」とあり、顔師古注に「今禮記に中庸一篇有るも、亦本禮經に非ず、蓋し此の流れならん」（今禮記有中庸一篇、亦非本禮經、蓋此之流）とある。なお、全集本は「中庸說一篇」に作る。

○中庸講疏一卷 『隋書』經籍志に「中庸講疏一卷 梁武帝撰」とある。

○宋の天聖八年 『玉海』卷五五「天聖賜進士中庸大學」に、

五年四月辛卯、新第の王堯臣已下に中庸を賜ふ。八年四月丙戌、王拱辰已下に大學を賜ふ。後に登第せる者は、必ず儒行及び中庸大學を賜はり

て以て常と爲す。（五年四月辛卯、賜新第王堯臣已下中庸。八年四月丙戌、賜王拱辰已下大學。後登第者、必賜儒行及中庸大學以爲常）とある。

○『別録』に『寶公』一篇有るに据りて之を知る 『禮記』樂記第十九の冒頭の疏に、

劉向校する所の二十三篇、別録に著せらる。今の樂記の斷取する所十一篇、餘に十二篇有り、其の名猶ほ在り。三十四卷、記に録する所無きなり。其の十二篇の名は、別録十一篇を案ずるに、餘次は奏樂第十二、樂器第十三、樂作第十四、意始第十五、樂穆第十六、說律第十七、季札第十八、樂道第十九、樂義第二十、昭本第二十一、招頌第二十二、寶公第二十三、是れなり。（劉向所校二十三篇、著於別録。今樂記所斷取十一篇、餘有十二篇、其名猶在。三十四卷、記無所録也。其十二篇之名、案別録十一篇、餘次奏樂第十二、樂器第十三、樂作第十四、意始第十五、樂穆第十六、說律第十七、季札第十八、樂道第十九、樂義第二十、昭本第二十一、招頌第二十二、寶公第二十三、是也）とある。

○董子韓嬰備さに性道中和を言ふ 董子は董仲舒のこと。「中和」については、張之洞が董仲舒の著作のどの一節を踏まえているのかはよくわからないが、『春秋繁露』「循天之道第七十七」に、

天の道に循ひて、以て其の身を養ふ、之を道と謂ふなり。天に兩和有りて、以て二中を成し、歳に其の中を立て、之を用ふるも窮まること無し。是の故に北方の中にて、用て陰に合して、物始めて下に動く。南方の中にて、用て陽に合して、物始めて上に養はる。其の、下に動く者、東方の和を得ざれば、生ずる能はず、中春是れなり。其の、上に養はるる者、西方の和を得ざれば、成る能はず、中秋是れなり。然らば則ち天地の美は惡くに在り。兩和の處に在り。二中の來り歸りて、其の爲を遂ぐる所

なり。是の故に東方に生じて西方に成る。東方の和にて生ずるは、北方の起こす所なり。西方の和にて成るは、南方の養ふ所なり。之を起こすも、和の所に至らざれば、生ずる能はず。之を養ふも、和の所に至らざれば、成る能はず。和に成るも、生ずるは必ず和なり。中に始まるも、止まるは必ず中なり。中は天地の終始する所にして、和は天地の生じ成る所なり。夫れ徳は和より大なるは莫く、道は中より正なるは莫し。中和は天地の美口達理にして、聖人の保ち守る所なり。『詩』に「剛ならず柔ならず、布政優優たり」と云ふは、此れ中和の謂に非ずや。是の故に能く中和を以て天下を理むる者は、其の徳大いに盛んなり。能く中和を以て其の身を養ふ者は、其の壽、命を極む。（循天之道、以養其身、謂之道也。天有兩和、以成二中、歳立其中、用之無窮。是故北方之中、用合陰、而物始動於下。南方之中、用合陽、而物始養於上。其動於下者、不得東方之和、不能生、中春是也。其養於上者、不得西方之和、不能成、中秋是也。然則天地之美惡在。在兩和之處。二中之所來歸而遂其爲也。是故東方生而西方成。東方和生、北方之所起。西方和成、南方之所養。起之、不至於和之所不能生。養之、不至於和之所不能成、成於和、生必和也。始於中、止必中也。中者天地之所終始也。而和者天地之所生成也。夫徳莫大於和、而道莫正於中。中和者天地之美口達理也、聖人之所保守也。詩云、不剛不柔、布政優優、此非中和之謂與。是故能以中和理天下者、其徳大盛。能以中和養其身者、其壽極命。

などであり、ここでは天には二和と二中があり、それが無限に循環することにより万物が生長し、人の場合も天の中和にしたがって身体を保養することにより長生きできると言う。なお、右に引いた『春秋繁露』「循天之道第七十七」については、拙稿『春秋繁露』訳注稿循天之道篇』（『香川高等専門学校研究紀要』第1号、二〇一〇年）を参照。

なお、「董子韓嬰」は、全集本は「董子之書」に作る。また、司馬朝軍撰

『輜軒語詳注』も、「韓嬰、冀本、鄂本作之書」と言う。これに従って「董子之書」とするならば、韓嬰の著作に出版を求めることに意味はなくなるが、韓嬰『漢詩外傳』に強いて求めるならば、その卷三に、

伯夷・叔齊は目に惡色を視ず、耳に惡聲を聽かず。其の君に非ざれば事へず、其の民に非ざれば使はず。横政の出づる所、横民の止まる所は、居るに忍びざるなり。郷人と居るを思ふこと、朝衣朝冠して塗炭に坐するがごときなり。故に伯夷の風を聞く者は、貪夫は廉に、懦夫は志を立つる有り。柳下惠に至りては則ち然らず、汗君を羞ぢず、小官を辭せず。進みて賢を隱さず、必ず其の道に由る。陋窮するも憫れまず、遺佚するも怨みず。郷人と居りて、愉愉然として去らざるなり、我が側に袒裼裸裎すと雖も、彼安くんぞ我を浼さんや。故に柳下惠の風を聞くものは、鄙夫は寛く、薄夫は厚し。孔子の魯を去るに至つては、遲遲乎として其れ行くなり、以て去るべくして去り、以て止まるべくして止まるは、父母の國を去るの道なり。伯夷は、聖人の清なる者なり、柳下惠は、聖人の和なる者なり、孔子は、聖人の中なる者なり。詩に曰はく、「競はず綵がず、剛ならず柔ならず」とは、中庸和通の謂なり。（伯夷叔齊目不視惡色、耳不聽惡聲。非其君不事、非其民不使。横政之所出、横民之所止、弗忍居也。思與郷人居、若朝衣朝冠坐於塗炭也。故聞伯夷之風者、貪夫廉、懦夫有立志。至柳下惠則不然、不差汗君、不辭小官。進不隱賢、必由其道。陋窮而不憫、遺佚而不怨。與郷人居、愉愉然不去也、雖袒裼裸裎於我側、彼安能浼我哉。故聞柳下惠之風、鄙夫寛、薄夫厚。至乎孔子去魯、遲遲乎其行也、可以去而去、可以止而止、去父母國之道也。伯夷、聖人之清者也、柳下惠、聖人之和者也、孔子、聖人之中者也。詩曰、「不競不綵、不剛不柔」中庸和通之謂也）

とある。なお、「中和」の語は、周知のごとく『禮記』中庸篇に、
天の命ずるを之れ性と謂ふ。性に率ふを之れ道と謂ふ。道を修むるを之

れ教と謂ふ。道なる者は、須臾も離るべからざるなり。離るべきは、道に非ざるなり。是の故に君子は其の睹られざる所に戒慎し、其の聞かれざる所に恐懼す。隠すより見はるるは莫く、微かなるより顯かなるは莫し。故に君子は其の獨りを慎しむなり。喜、怒、哀、樂の未だ發せざる、之を中と謂ふ。發して皆節に中る、之を和と謂ふ。中なる者は、天下の大本なり。和なる者は、天下の達道なり。中和を致して、天地位し、萬物育す。（天命之謂性。率性之謂道。修道之謂教。道也者、不可須臾離也。可離、非道也。是故君子戒慎乎其所不睹、恐懼乎其所不聞。莫見乎隱、莫顯乎微。故君子慎其獨也。喜、怒、哀、樂之未發、謂之中。發而皆中節、謂之和。中也者、天下之大本也。和也者、天下之達道也。致中和、天地位焉、萬物育焉）
とある。

○入るは主とし出づるは奴とし 韓愈「原道」に、
周道衰へ、孔子没して、秦に火あり、漢に黃老あり、晉、魏、梁、隋の間に佛あり。其の道德仁義を言ふ者、楊に入らざれば、則ち墨に入り、老に入らざれば、則ち佛に入る。彼に入れば、必ず此を出づ。入る者は之を主とし、出づる者は之を奴とす。入る者は之に付き、出づる者は之を汗とす。（周道衰、孔子没、火于秦、黃老于漢、佛于晉、魏、梁、隋之間。其言道德仁義者、不入于楊、則入于墨。不入于老、則入于佛。入于彼、必出于此。入者主之、出者奴之。入者附之、出者汗之。）
とあり、こちらに入るものは主として尊ぶが、こちらを出るものは奴として卑しむの意。

- 劉攽 字は貢父。『宋史』卷三百十九。
- 宋祁 字は子京。『宋史』卷二百八十四。
- 曾鞏 字は子固。『宋史』卷三百十九。
- 沈括 字は存中。『宋史』卷三百三十一。

○洪邁 字は景廬。『宋史』卷三百七十三。

○鄭樵 字は漁仲。『宋史』卷四百三十六。

○王楙 字は勉夫。

○王應麟 字は伯厚。『宋史』卷四百三十八。

○洛蜀交訌し、章蔡意を快くす 「洛蜀」は、北宋の哲宗の元祐年間に分裂して激しく争った旧法党の三つの党派である洛蜀朔三党のうちの二つで、洛陽の程頤率いる洛党、蜀の蘇軾率いる蜀党を指す。「章蔡」は、その旧法党と対立する新法党の章惇、蔡京を指す。

【通釈】

学問を為すには門戸を分けることを避ける。

近代の学問する人には凡そ二種類ある。（一つは）読書を好む者は漢学を中心とする。（もう一つの）治心を講じる者は宋学を中心とする。末節を追求めて本源を忘れ、遂に互いに悪口を言うのは、大いに悪習とする。そもそも聖人の道は、読書・治心は、一方に偏って一方を廃するということなく、互いによいところを選び取るのが道理である。そしりあざむいて勝とうとするものは、まだ通儒とは言えない。甚だしい場合は、あるものは許慎・鄭玄は絶対であると言ひ、あるものは自ら程子・朱子を命より大切なものとする。その行いを公平に考えれば、漢学を学ぶと言明する者は、欲深くて卑しい徒であることを免れない。宋学を学ぶと言明する者は、ただその愚劣で巧みなばかりごとに都合がよいだけである。これは漢学が宋学に関係なく、学ぶといつても何をなそうというのか。要するに、学問は自らが行い実践することを主眼とする。漢宋両門（の学問の目的）は、いずれも人格者となり実用的な働きを身につけるためである。もし品行を修められなければ、官職に就いても役に立たない。（いわゆる）楚はもろろん失ったが、斉も獲得したとはしない（というものである）。あの世間を欺き

自らを欺く人は、漢儒の奴隸となつても、実際にその道義に通じることではできず、宋儒の佞臣となつても、みないまだかつてその書物を読んだことがないというようなことは、とりわけ大きな誤謬であり、深く責める価値もない。（經典の意味道理は、文字訓詁を捨てて、何によってそれを知るのか。この事は恐らくは切り離したいであらう。）

宋儒は『大學』『中庸』を広く世間に明らかに知らせようとする。しかしながら『禮記』は二戴（戴徳・戴聖）が伝えたものであり、七十子の後学の者が記録したものである。（『漢書』藝文志に見える。）そもそも七十子の後学の者というのは、秦漢以来の経師でなくてだれであらう。これこそ真の漢学である。『漢書藝文志』に『中庸説』二篇が有る。（『戴記』の後にある。）『隋書経籍志』に梁武帝『中庸講疏』一卷が有る。宋の天聖八年、『大學』を新たに及第した王拱辰等に賜わった。ひたすら『中庸』を尊ぶのは、意味がそこから始まるものがあるからである。ましてや『樂記』一篇は漢人の撰述したもので、『別録』に『費公』一篇が有ることによってこのことを知る。）実際に論性主静に関する諸義を包括するものであればなおさらである。董仲舒・韓嬰はみな性道中和を言う。そうであるならば性理の学は、その淵源は、漢儒から出ているのである。強いて分別するのは、その学問を知らない者である。（考証校勘の学は劉歆、宋祁、曾鞏、沈括、洪邁、鄭樵、王楙、王應麟が、その端緒を開いたのである。実はこれもまた宋学なのである。）

私は性分として人が、宋学を誹るのを聞くことを嫌悪し、人が、漢学を誹るのを聞くことも嫌悪する。思うに、学問を好む者はとりもなおさず立派な人である。本当の漢学が今までに理を窮めなかったためしはなく、本当の宋学も今までに書を読まなかったためしがないことはいうまでもない。たとえどちらかに偏りがあつたとしても、必ず聖賢を手本として則り、それぞれ用度になつたことについて役に立つことを勉強しており、どうして不学の者に勝らないであらうか。また近人の著書は、（こちらに）入るも

のは主とし（て尊ぶが、こちらを）出るものは奴とし（て卑しむ）、互いに悪口を言い合うのは、まことに大いにどうしようもないことがあるかのようであるが、不学の者に対しては、まったく悪口を言つて議論するということをしてしない。これは本当にどのような思いがあつてのことであらうか。まことに不可解である。（近年の士人は、漢学は書を読むことがたいそう苦しいのをすっかり嫌つたうえに、宋学は身を律するのにとっても束縛されるのをいやがる。五経は荒れ果てた樓閣に近い存在となつてしまい、名文もまた開いて見ることをいやがる。ただその不学を憂慮するだけである。どうして学問の弊害にまで思い及ぶいとまがあるうか。）洛党・蜀党は内部で争い、（それを見た）章惇・蔡京はほくそえんでいる。ここで世の不学の者は、漢学・宋学の重要でないことを踏襲し、漢学か宋学かに関係なく、一律に誹謗中傷し、必ず世の中は等しく不学者ばかりになつて、その後快哉を叫ぼうとする。これはまたただ君子としては恥ずかしい者のようである。学を好む者は各おの（自分が）聞いたこと尊び、各おの（自分が）知つたことを行い、（周りに）動かされてはならない。

【書目質問】

- ・十三經注疏。共四百一十六卷。乾隆四年武英殿刻附考証本、同治十年廣州書局覆刻殿本、阮文達公元刻附校勘記本、明北監本、明毛晉汲古閣本。目列後。阮本最於學者有益、凡有關校勘處旁有一圈、依圈檢之、精妙全在於此。四川書坊翻刻阮本、訛謬太多、不可讀、且削去其圈、尤謬。明監、汲古本不善。禮記正義六十三卷、漢鄭玄注、唐孔穎達正義。
- ・春秋繁露十七卷。漢董仲舒。戴震、盧文弨校。聚珍本、福本、抱經堂本。
- ・春秋繁露注十七卷。凌曙注。古經解匯函本。
- ・韓詩故二卷。韓詩內傳一卷。韓詩說一卷。漢韓嬰。
- ・韓詩外傳十卷。漢韓嬰。趙懷玉校本、周廷棠校注本、吳氏望三益齋刻周趙合校本、古經解匯函本、又津逮、學津、通津草堂三本、皆遜。陳瑒韓詩外

傳疏証十卷、未見傳本。

- ・彭城集四十卷。宋劉翬。聚珍本、福本。
- ・漢書一百二十卷。唐顏師古注。即宋慶元附三劉刊誤、宋祁校語本。明監本、汲古本、掃葉本無校語。
- ・宋景文筆記三卷。宋宋祁。百川本、學津本。
- ・宋景文集六十二卷。補遺二卷。附錄一卷。宋宋祁。聚珍本、福本。
- ・隆平集二十卷。舊題宋曾鞏。康熙四十年彭期校刻本。
- ・元豐類稿五十卷。宋曾鞏。顧崧齡刻本。
- ・夢溪筆談二十六卷。補二卷。續一卷。宋沈括。津逮本、學津本。
- ・容齋隨筆十六卷。續筆十六卷。三筆十六卷。四筆十六卷。五筆十卷。宋洪邁。通行本。
- ・唐人萬首絕句九十一卷。宋洪邁。明翻宋本七十五卷、明趙宦光編刻本四十卷。
- ・通志二百卷。宋鄭樵。明刻本、殿本三通合刻、謝刻本、廣州重刻本。
- ・野客叢書三十卷。附野老紀聞一卷。宋王楙。唐宋叢書本、稗海本。
- ・詩地理考六卷。宋王應麟。玉海附刻本、津逮本、學津本。
- ・三家詩考一卷。宋王應麟。玉海附刻本、津逮本、學津本。
- ・六經天文編二卷。宋王應麟。學津本、玉海附刻本。
- ・急就篇四卷。漢史游。唐顏師古注、宋王應麟補注。陳氏獨抱廬本、津逮本、學津本、玉海附刻本。
- ・漢書藝文志考証十卷。王應麟。玉海附刻本。
- ・通鑑地理通釋十四卷。宋王應麟。津逮本、學津本、玉海附刻本。
- ・漢制考四卷。宋王應麟。津逮本、學津本、玉海附刻本。
- ・姓氏急就篇二卷。宋王應麟並自注。玉海附刻本。
- ・翁注困學紀聞二十卷。宋王應麟。家刻本、長沙重刻巾箱本。此注更勝七箋本。

・玉海二百卷。宋王應麟。嘉慶丙寅康基田校。江寧藩庫刻本、又明正德以來
 修補本。

・翁注困學紀聞二十卷。宋王應麟。翁元圻注。家刻本、長沙重刻巾箱本。

— 11 —

作秀才後宜讀書。

今人爲童子時、尚與經傳相親。身入膠庠、自命成學、弁髦敝之矣。此爲天下通病。夫學僅讀書、不過上口粗通。豈能鉤深致遠。入學以後、神智漸長、閱世稍深。此時讀書、方能尋其要領、探其精微。乃以惡濫時文、奪其本務、抑何謬哉。蓋惟入學後、正宜讀書。通籍後更好讀書耳。袁伯業長大而能勤學。吾願諸生效之。

【書き下し】

秀才と作りて後宜しく書を讀むべし。

今人、童子たる時、尚ほ經傳と相親しむ。身、膠庠に入れば、自ら學を成すを命じ、弁髦のごとく之を敝つ。此れ天下の通病と爲す。夫れ學僅、書を讀むは、上口粗通に過ぎず。豈に能く深きを鉤し遠きを致さんや。學に入りて以後、神智漸く長じ、世を閱すること稍く深し。此の時、書を讀み、方めて能く其の要領を尋ね、其の精微を探る。乃ち惡濫の時文を以て其の本務を奪ふは、抑そも何ぞ謬らん。蓋し惟だ學に入るの後、正に宜しく書を讀むべし。籍に通ずるの後、更に書を讀むを好むのみ。袁伯業は長大にして能く學に勤む。吾れ諸生之に效ふを願ふ。

【註】

○弁髦のごとく之を敝つ 司馬朝軍撰『輜軒語詳注』は、昭公九年の左傳に、

文、武、成、康の母弟を建てて、以て周に蕃屏とするも、亦其の廢隊を是れ爲けん^{たす}とす。豈に弁髦の如くにして、因りて以て之を敝てんや。（文
 武成康之建母弟、以蕃屏周、亦其廢隊是爲。豈如弁髦、而因以敝之）
 とあるのを引く。「弁」は黒い木綿の冠で、元服の時に用い、終われば捨てる。「髦」は髪飾りで、父母が亡くなると取り去るもの。いずれも無用のものの意に用いる。

○惡濫の時文を以て よくわからないが、「でたらめな時文を勉強すること」の意と解しておく。司馬朝軍撰『輜軒語詳注』は、「惡濫」について、「猶濫竿充數」と注するが、これは『漢語大詞典』の説明をそのまま踏襲したものであろう。「濫竿」という言葉については、『漢語大詞典』が『韓非子』内儲説上に、「齊宣王使人吹竽、必三百人。南郭處士請爲王吹竽、宣王説之、廩食以數百人。宣王死、湣王立、好一一聽之、處士逃」（齊宣王使人吹竽、必三百人。南郭處士請爲王吹竽、宣王説之、廩食以數百人。宣王死、湣王立、好一一聽之、處士逃）とあるのを引き、これ以後「本當の秀才の持ち主がいらないことを比喻するようになった。また時に自ら謙遜することを表示する」と説明する。これによれば「猶ほ濫竿、數を充たすがごとし（猶濫竿充數）」というのは「能力の劣った者を優秀な人材としてその數を充たしている」状態を意味するのであろう。一説としておく。「時文」は、科擧の試験に用いた文体のこと。

○袁伯業長大にして能く學に勤む 『三國志』魏書卷一武帝紀第一「山陽太守袁遺」の裴松之の注に、

遺、字は伯業、紹の從兄。長安の令と爲る。河間の張超は嘗て遺を太尉朱儁に薦め、遺を稱して「冠世の懿、幹時の量有り。其れ忠允亮直、固より天の縱つ所なり。乃ち載籍を包羅し、百氏を管綜し、高きに登りて賦を能くし、物を觀て名を知るが若きは、之を今日に求むるに、邈焉として儔靡し。」と。事は超集に在り。英雄記に曰はく、紹の後、遺を用ひ

て揚州刺史と爲し、袁術の敗る所と爲る。太祖「長大にして能く學に勤むる者は、惟だ吾と袁伯業とのみ」と稱す。語は文帝典論に在り。(遺字伯業、紹從兄。爲長安令。河間張超嘗薦遺于太尉朱儁、稱遺有冠世之懿、幹時之量。其忠允亮直、固天所縱。若乃包羅載籍、管綜百氏、登高能賦、覩物知名、求之今日、邈焉靡儔。事在超集。英雄記曰、紹後用遺爲揚州刺史、爲袁術所敗。太祖稱長大而能勤學者、惟吾與袁伯業耳。語在文帝典論)とある。

【通釈】

秀才となった後も書物を読まなければならない。

今の人は、幼児の時から、なお経伝になれ親しんでいる。その身が、学校に入ると、自ら学問を成就するように命じて、弁髦のように無用のものとして経伝を捨ててしまう。これは世の中に共通する弊害である。そもそも幼き学生が書物を読んでも、暗唱しておおざっぱに理解するに過ぎない。どうして深く究明して高いレベルにまで達しようか。学校に入ってから、才知も徐々にすぐれ、次第に世の中を深く観察するようになる。この時に書を読み、初めてその要点を尋ね、その細かな点を探求する。それなのにでたらめな時文を勉強することで、本来の務め(である経伝の勉強をする時間)を奪うのはなんたる誤りであろうか。思うにただ学校に入ってから、まさに書を読まなければならない。仕官した後も、さらに好んで書を読むことにつぎ。袁伯業(袁遺)は大きく成長してから学問に励むことができた。私は諸君が袁伯業を見習うことを願う。

— 12 —

讀書不必畏難。

以上所言、當讀之書、如此其繁。讀書之道、如此其密。似乎莫殫莫究。何暇省身致用耶。是又不然。一經一史、古集一家、詞章一體、講經史者、詞章亦不可竟廢。可以涵養性靈、兼資筆札。經濟一門、經濟存乎其人。生性開弱者、不講亦可。專精探討。果能精通一經、則羣經大旨要義、皆已瞭然矣。通鑑古子、觀其大畧、知其要領、又其次涉獵而已。如此爲之、不過十年、卓然自立。聰強而得師友者、所得尚不止此。自茲以往、左右逢源。兼精羣籍原好。但人生、精力歲月有限。以一爲主、以餘爲輔。已可終身用之不盡。才力有餘者、任自爲之。夫航斷港而求至海、驅北轍而求至越則難。若津渡顯然、定向有在、循途而行、計日而到、何難之有。蓋讀書一事、古難今易。無論何門學問、國朝先正、皆有極精之書。前人是者證明之、誤者辯析之、難考者考出之、參校旁證。不可見之書、采集之。一分眞僞、而古書去其半。一分瑕瑜、而列朝書去其十之八九矣。且諸公最好著爲後人省精力之書。一蒐補。或從羣書中蒐出、或補完、或綴緝。一校訂。譌脫同異。一考證。据本書、据注、据他書。一譜錄。提要及紀元地理、各種表譜。此皆積畢生之精力、踵曩代之成書、而後成者。故同此一書、古人十年方通者、今人三年可矣。前人甚苦、在前人卻於己無大益、校書及注古集尤甚。後人甚樂。諸公作室、我輩居之。諸公製器、我輩用之。今日止須善買書讀書、便省力易見效。士生今日、若肯讀書、眞可不費無益之精神、若無諸公、自考之則甚勞。不考之則多誤。而取益身心、坐收實用、据漢學之成書、玩宋學之義理、此時不再考證、亦已足用。但多覽先正考證之書、而篤信之可矣。此事亦無窮。力有餘者聽之。事半古人、功必倍之。慎無驚怖其言、以爲河漢而無極也。

【書き下し】

書を読むには必ずしも難きを畏れず。

以上言ふ所、當に讀むべきの書は此の如く其れ繁なり。書を読むの道は此の如く其れ密なり。殫くる莫く究むる莫きに似たり。何ぞ身を省きて用を

致すに暇あらんや。是れ又然らず。一經一史、古集一家、詞章一體、經史を講ずる者は詞章も亦竟に廢す可からず。以て性靈を涵養し、兼ねて筆札に資す可し。經濟一門、經濟は其の人に存す。生性闇弱なる者は講せざるも亦可なり。專精探討す。果して能く一經に精通すれば、則ち羣經の大旨要義は皆已に瞭然たり。『通鑑』、古子は其の大畧を觀、其の要領を知れば、又其の次は涉獵のみ。此の如く之を爲さば、十年を過ぎずして卓然として自ら立つ。聰強にして師友を得る者は得る所尚ほ此に止まらず。茲れより以往、左右源に逢ふ。兼ねて羣籍に精なるは原より好し。但だ人生れて、精力歲月に限り有り。一を以て主と爲し、餘を以て輔と爲す。已に終身之を用ひて盡くさざる可し。才力餘り有る者は自ら之を爲すに任す。夫れ斷港を航して海に至るを求め、驅して轍を北にして越に至るを求むるは則ち難し。若し津渡顯然として、定向在る有り、途に循ひて行き、日を計りて到れば、何の難きことか之れ有らん。蓋し讀書の一事は古は難く今は易し。何門の學問かを論ずる無く、國朝の先正に皆極精の書有り。前人是なる者は之を證明し、誤る者は之を辯析し、考し難き者は之を考出し、參校し、旁證す。見るべからざるの書は之を采集す。一、眞偽を分かつて、古書、其の半ばを去る。一、瑕瑜を分てば列朝の書、其の十の八九を去る。且つ諸公最も好んで後人の爲に精力を省くはぶの書を著はす。一、蒐補。或いは羣書中より蒐出し、或いは補完し、或いは綴輯す。一、校訂。譌脱同異。一、考證。本書に据り、注に据り、他書に据る。一、譜録。『提要』及び紀元地理、各種の表譜。此れ皆畢生の精力を積み、曩代の成書を踵ぎ、而る後に成る者なり。故に同じく此の一書にして、古人十年にして方めて通ずる者は、今人三年にして可なり。前人甚だ苦しみ、前人に在りては卻て己に於いて大益無し、書を校す及び古集に注すること尤も甚し。後人甚だ樂しむ。諸公室を作り、我が輩之に居る。諸公器を製し、我が輩之を用ふ。今日止だ須く善く書を買ひ書を読むべきのみ、便ち力を省きて效を見はし易し。士、今日に生れ、若し肯て書を読み、眞に無益の精神を費さざる可くして、若し諸公無く、自ら之を考すれば則ち甚だ勞す。之を考せざれば則ち誤り多し。益を身心に取り、

坐して實用を收め、漢學の成書に据り、宋學の義理を玩べば、此の時再び考證せざるも亦已に用ふるに足る。但だ多く先正の考證の書を覽、篇く之を信じて可なり。此の事も亦窮まり無し。力餘り有る者之に聽け。事、古人に半ばにして、功必ず之に倍す。慎んで其の言を驚怖して以て河漢にして極まり無しと爲す無れ。

【註】

○經濟 「經世濟民」の略。世を治め人民をすくうこと。語行第一の――6――

「一、講求經濟」の註參照。

○左右源に逢ふ 『孟子』離婁下に、

孟子曰く、「君子の深く之を造きむるに道を以てするは、其の之を自得せんと欲すればなり。之を自得すれば、則ち居ること安く、居ること安ければ、則ち資づくこと深く、資づくこと深ければ、則ち之を左右に取ること其の原に逢ふ。故に君子は其の之を自得せんと欲するなり。」（孟子曰、君子深造之以道、欲其自得之也。自得之、則居之安。居之安、則資之深。資之深、則取之左右逢其原、故君子欲其自得之也。）

とある。道に沿って深く追求すること、日常の左右身の回りのこともその根源に合致することをいう。これが出典となつて、何事も徹底して行う意として用いられる。

○斷港を航して海に至る とても無理なことの例え。韓愈の「王墳を送る序」に、

學者は必ず其の道の所を慎しむ。楊墨老莊佛の學に道つて聖人の道に之かんと欲する者は、猶ほ斷港絶潢に航して以て海に至らんことを望むなり。故に聖人の道を觀んことを求めば、必ず孟子より始む。（學者必慎其所道。道於楊墨老莊佛之學、而欲之聖人之道者、猶航斷港絶潢以望至於海也。故求觀聖人之道者、必自孟子始。）

とある。

○誤る者は之を辯析し「誤者辯析之」は、全集本は「誤者辨析之」に作る。

○其の言を驚怖して以て河漢にして極まり無しと爲す無れ『莊子』逍遙遊篇に、

肩吾、連叔に問ひて曰はく、「吾、言を接輿に聞くに、大にして當たる無く、往きて反らず。吾、驚怖す。其の言猶ほ河漢のごとくにして極まること無し。大いに逕庭有りて、人情に近からず」と。(肩吾問於連叔曰、吾聞言於接輿、大而無當、往而不反。吾驚怖。其言猶河漢而無極也。大有逕庭、不近人情焉)

○この一段は、次に示す『經解入門』平日讀經課程第五十一と一致する部分がある。

一、戒畏難。如前所言、層累曲折、其功似乎難竟。然物有本末、事有先後、依次而入、久之自不能已。且今人讀書、有較易于古人百倍者。古人書籍少、一字一義、皆當自己尋覓。今人生明備之會、諸先正皆有極精之書。前人是者證明之、誤者辨析之、難考者考出之、不可見之書采集之。一分眞僞、而古書去其半。一分瑕瑜、而列朝書去其十之八九。且諸公最好著爲後人省精力之書。一蒐補。(或從羣書中蒐出、或補完、或綴緝。)一校訂。一考證。一補錄。此皆積畢生之精力、踵曩代之成書而後成者。故同一書、古人十年方通者、今人三年可矣。前人甚苦、後人甚樂。諸公作室、我輩居之。諸公製器、我輩用之。今日若肯用功、眞可不費無益之精神、而收身心之實效者、慎無驚怖其言以爲河漢而無極也。

【通釈】

書を読むには必ずしも困難であることを恐れない。

以上に言ったこと、読まなければならない書はこのように繁多である。書を読む道はこのように緻密である。(読んでも読んでも) 尽くすことも究めることもないかのようなものである。どうして身を省みて役立てる暇があるうか。(しかしながら) これまたそうではない。一經一史、古集一家、詞章一体、經史を講究する者は詞章も同様に最後まで廃棄してはならない。それによって心をしだいに養い、併せて文章を書くのに役に立つはずである。經世濟民という一部門を、經世濟民はその人の才能に関係する。生まれつき愚かで臆病な者は講究しなくてもよい。一生懸命探求する。もし、一經に精通することができれば、群經のおよその意味要点は皆もはや明らかである。『資治通鑑』、古子はその大略を見、その要領を知ると、さらにその次の次は書物を広く漁って読むだけである。このようにすれば、十年を過ぎないうちに高く優れ自立できる。聡明で師友に恵まれた者は、得るものはなおこれだけに止まらない。これより以後、日常の身の回りのあらゆるものがその根源に一致する。併せて多くの書籍に精通することはもちろんすばらしい。ただ人は生まれて、精力、歲月ともに限りがある。一つの書籍を主たる対象とし、それ以外の書籍は補助とみなす。もはや一生用いても尽きないはずである。才力に余裕がある者は自分で行うに任せる。そもそも行き詰まりの川を航行して海にたどり着くことを求め、疾駆して轍を北にむけながら越にたどり着くことを求めるのは困難である。もし渡し場がはつきりしていて、向かう方向が定まり、道に沿って行き、日数を計算して到着しようとすれば、何の困難もないであろう。思うに読書という一事は、古は困難であったが今は容易である。どの門の学問であるかを論じるまでもなく、本朝の先賢に皆極めてすばらしい書物が有る。前人が正しいことを言っている場合は証明し、誤っている場合は見分け、考えがたい場合は考え出し、多くの資料を照らし合わせて考え、広範囲にわたって考証する。見ることでできない書物は採集する。一、眞僞を見分ければ、古書のうち、その半分ほどは除き去ることになる。一、欠点と長所とを見分け

れば歴代の書物のうち、その十のうちの八九割を去ることになる。しかも諸公が最も好んで後人のために精力を省いて読める注釈書を著わしている。一、集補。あるいは群書の中から集め出し、あるいは補完し、あるいは綴り集める。一、校訂。誤り・脱字・同異。一、考証。本書に基づき、注に基づき、他書に基づく。一、系譜。『四庫提要』及び紀元地理、各種の表譜。これらは皆一生の精力を積み重ね、先代が出版した書物を継いで、初めて完成したものである。だから同じ書物で、古人が十年かかって初めて精通したものは、今人なら三年でそれが可能である。前人はたいそう苦勞したが、前人にあつてはかえつて自分には大きな利益はなく、書を校訂すること及び古集に注することがもつとはなはだしく苦勞した。後人はたいそう楽しんでゐる。諸公が室を作り、我々はそこに居る。諸公が器を製作し、我々はそれを用いる。今日ただ多く書物を買ひ書物を読むことが大切である。すると少ない力で効果を表しやすい。士よ、今日に生まれ、もしあえて書を読み、まことに無益の精神を費すことなく、もし諸公が存在せず、自分でこれを考察したらたいそう苦勞するだろう。これを考察しなければ誤りが多いだろう。利益を身心に受け取り、いながらにして実用を収め、漢学の出版された書物に基づき、宋学の義理を玩味すれば、この時再び考證しなくても亦すでに用いるのに十分である。ただ多く先賢の考証の書物を見、篤くこれを信じてよいのである。この事も亦はてしない。力の有り余っている者はこれに聴け。勉強量は、古人の半分でありながら、効果は必ず倍になる。どうかその言葉にびつくりして天の川のようににはてしないもの（ありもしないこと）としないであらう。

【書目答問】

- ・資治通鑑二百九十四卷。宋司馬光。元胡三省音注。胡克家仿元本、武昌局翻胡本。戰國至五代。
- ・通鑑考異三十卷。同上。通鑑全書附刻本、胡注本已將考異散附本書各條下。

- ・通鑑目錄三十卷。同上。蘇州局翻宋本。體若表譜、以便尋檢通鑑。
- ・通鑑稽古錄二十卷。同上。單行本、學津本、武昌局本。
- ・通鑑地理通釋十四卷。宋王應麟。津逮本、學津本、玉海附刻本。
- ・通鑑釋文辨誤十二卷。元胡三省。胡刻通鑑、武昌局刻通鑑附刻本、通鑑全書附刻本。
- ・通鑑胡注舉正一卷。陳景雲。文道十書本、原書十卷。
- ・通鑑注辨正二卷。錢大昕。潛研堂本。
- ・通鑑注商十八卷。趙紹祖。原刻本。
- ・資治通鑑補二百九十四卷。嚴衍。附刊誤二卷。童和豫。咸豐元年江夏童氏活字本、印行不多。
- ・通鑑補識誤 卷、通鑑補略 卷。張敦仁。自刻本。
- ・通鑑問疑一卷。宋劉義仲。津逮本、學津本。
- ・御批通鑑輯覽一百二十卷。乾隆三十二年敕撰。殿本、杭州局本、武昌局本、南昌巾箱本。伏羲迄明末。是書兼用通鑑及綱目義例。
- ・通鑑外紀十卷、目錄五卷。宋劉恕。蘇州局本。包義至周。宋金履祥通鑑前編十八卷、舉要三卷、坊行通鑑全書附刻本、不如劉書。
- ・漢紀三十卷。漢荀悅。
- ・後漢紀三十卷、晉袁宏。附字句異同考一卷。蔣國祥。兩紀合刻本、又明黃省曾合刻本。
- ・續資治通鑑長編五百二十卷。宋李燾。昭文張氏愛日精廬活字版本、四庫傳鈔本。北宋七代。原闕不全、此卷數乃四庫館重定。
- ・續資治通鑑三百二十卷。畢沅。原刻蘇州補印本。宋、元、明人續通鑑甚多、有此皆可廢。
- ・明紀六十卷。陳鶴。陳克家續成。蘇州局本。西漢年紀三十卷。宋王益之。掃葉山房本、金華叢書本。改竄前人史書以為著述、乃宋、明人通病、此取其有可刊正漢書文字之處。

- ・御批通鑑綱目五十九卷、首編十八卷、外紀一卷、舉要三卷、續編二十七卷。
- 康熙四十六年。殿本。綱目凡例、宋朱子作、餘趙師淵作、前編金履祥、續編明商輅。
- ・綱目訂誤四卷。陳景雲。文道十書本。
- ・綱目釋地糾繆六卷。張庚。原刻本。
- ・綱目釋地補注六卷。同上。

— 13 —

讀書勿諉記性不好。

每見今人不好讀書者、輒以此藉口。此欺人也。日記一葉、月記一卷、十年之內、可記百餘卷矣。非不能、實不爲耳。朱竹垞有言、世豈有一覽不忘、一字不遺者。但須擇出切要處記之耳。竹垞爲本朝第一博雅人、其說如此。以告學者。

【書き下し】

書を讀むには記性好からざるに諉^{かこ}つくる勿れ。

今人の書を読むを好まざる者を見る毎に、輒^{すなは}ち此を以て口を藉^かる。此れ人を欺くなり。日に一葉を記し、月に一卷を記せば、十年の内に百餘卷を記すべし。能はざるに非ず、實は爲さざるのみ。朱竹垞言ふ有り、「世に豈に一覽して忘れず、一字も遺^{のこ}さざる者有らんや。但だ須く切要の處を擇び出し之を記すべきのみ」と。竹垞は本朝第一の博雅の人と爲すも、其の説此の如し。以て學ぶ者に告ぐ。

【註】

○朱竹垞言ふ有り 朱竹垞は朱彝尊のこと。この朱竹垞の言葉の出典は不明。

【通釈】

書を読むには記憶力がよくないことを口実にしてはいけない。

私が、今人の書を読むことを好まない者に会うたびに、すぐにこのことを言い訳にする。これは人を欺いているのである。一日に一葉を記憶し、月に一卷を記憶すれば、十年の内には百余卷を記憶することができる。できないのではない、実はしないだけなのである。朱竹垞（朱彝尊）が次のように言う、「世の中にどうして一度見て忘れず、一字も遺漏しない者がいるか。ただ大切な箇所を選び出してそれを記憶することが大切である」と。竹垞は清朝第一の博雅の人であるが、このように説いている。以上學者に告げておく。

【書目答問】

- ・經義考三百卷。朱彝尊。揚州馬氏刻本、重刻通行本。
- ・曝書亭集八十卷。附錄一卷。朱彝尊。
- ・曝書亭詩注二十二卷。朱彝尊。楊謙注。孫銀槎注本、不如楊注本、別行互見。
- ・曝書亭詞注七卷。朱彝尊。李富孫注。

— 14 —

讀書勿諉無書無暇。

能購讀之、不能借之、隨得隨看、久久自富。若必待插架三萬、然後議讀、終身無此日矣。即使四部駢羅、豈能一日讀盡。何如姑盡所有、再謀其他。更有一弊、勸人讀書、多謂無暇。不思嬉遊晝寢、爲暇多矣。一葉數行、偶然觸目、他日遇事、或即恰收其用。自非幼學、眞讀書者、斷無終日整襟危

坐、限定讀書時刻之事也。

【書き下し】

書を読むには書無く暇無きに誘^{かこ}つくる勿れ。

能く購^{あがな}へば之を購ひ、能はざれば之を借り、随ひて得て随ひて看れば、久にして自ら富む。若し必ず插架三萬を待ちて、然る後に讀むを議すれば、終身此の日無し。即^{たと}ひ四部をして駢羅せしむるも、豈^あに能く一日にして讀み盡くさん。何如ぞ姑^{しばら}く有する所を盡くし、再び其の他を謀らん。更に一弊有り、人に書を読むを勸むれば、多く暇無しと謂ふ。嬉遊晝寢は暇を爲すこと多きを思はず。一葉數行、偶然に目に觸れ、他日事に遇ひ、或いは即ち恰^{あたか}も其の用を收む。幼學に非ざるよりは、眞に書を読む者は、斷じて終日襟を整へて危坐し、書を読むの時刻を限定するの事無れ。

【註】

○更に一弊有り 「更有一弊」は、全集本は「更有一蔽」に作る。

【通釈】

讀書に際しては本がないことや読む暇がないことを口実にしてはいけない。書物は購入できるならば購入し、（それが）できなければ借りて、手に入れるとすぐに読むようにすれば、長い間に自然と豊かになる。もし必ずや書棚に三万もの書物が揃ってから初めて読もうとするならば、死ぬまでその日はこないであろう。たとえ四部の書物がずらりと並んでいても、どうして一日で読み尽くすことができようか。どうしてとりあえず持っている書物を読み尽くし、それからさらにその他の書物を読もうとしないのか。さらに弊害が一つあって、人に讀書を勧めると、多くの者が暇がないと言う。楽しく遊んだり昼寝したりする時間は多くあるとは考えないのである。一

葉の數行が、偶然にも目に觸れ、後日あることに遭遇したときに、それがちょうど役に立つこともある。十歳の子どもでもないかぎりには、まことに讀書する者は、斷じて終日襟を整へて正座し、讀書する時間を限定することがあつてはならない。

—15—

買書勿吝。

田穀之利、不及什一。商賈之利、止於三倍。典籍之利、淑身興宗、化愚爲賢、子孫永保、酌之不竭、一卷之書、有益天下。此其爲利、不可勝言。節衣縮食、猶當爲之。惟買書須得其門。若無通人可訪、則常過書肆、流觀架上。名近雅馴者、索取繙檢、要籍精本、必時遇之。即使買而不讀、果於此道篤好。子孫亦必有能讀之者。

蜀人尚義好施。書院社學、所至莘莘。義卷賓興、色目非一。今有一義、更爲進之。仰屋冥搜、專攻帖括、澤竭壁枯、終鮮宏益。以云振救孤寒則有之。如謂興起人文則未也。儻有好禮者、廣買典籍、置之書院、計最要各部、所費不過千餘金而已。千金之書、百年以內、不至壞爛、三十年內、不即散亡。一縣高材、咸得霑丐、展轉授受、流澤無窮。一鄉之中、通人接踵。何憂不成爲冠蓋里乎。較之募集多金、爲文昌魁星、修造樓閣、號稱培植文風者、有實效多矣。文昌六星、雖有司祿、何與學校。魁乃斗宿之一、俗以奎壁書府、傳誤作魁。與其傲福於星辰、責效於土木、不如求諸人事之爲愈也。

【書き下し】

書を買ふには吝^をしむ勿れ。

田穀の利は、什一に及ばず。商賈の利は三倍に止まる。典籍の利は、身を淑くし宗^{おこ}を興し、愚を化して賢と爲し、子孫永く保ち、之を酌みて竭^つきず、

一卷の書、天下に益有り。此れ其の利を爲すや、言ふに勝^たふべからず。衣を節し食を縮めても、猶ほ當に之を爲すべし。惟だ書を買ふには須く其の門を得るべし。若し通人の訪ぬべき無くんば、則ち常に書肆を過ぎ、架上を流観せよ。名、雅馴に近き者、索取繙檢すれば、要籍精本、必ず時に之に遇ふ。即^たひ買ひて讀まざらしむるも、果たして此の道に於て篤好なり。子孫も亦必ず能く之を讀む者有らん。

蜀人は義を尚び施すを好む。書院社學、至る所萃萃たり。義卷賓興[？]、色目一に非ず。今一義有り、更に爲^たに之を進めん。屋を仰いで冥搜し、専ら帖括を攻め、澤竭^つき壁枯れ、終に宏益鮮し。以て孤寒を振救すと云ふは則ち之れ有り。如し人文を興起すと謂ふは則ち未だし。儻^もし禮を好む者有れば、廣く典籍を買ひて、之を書院に置き、最要の各部を計るも、費す所は千餘金に過ぎざるのみ。千金の書、百年以内、壞爛に至らず、三十年の内、即ち散亡せず。一縣の高材、咸^みな露丐を得、展轉授受し、流澤窮まり無し。一郷の中、通人踵を接す。何ぞ冠蓋里と成爲せざるを憂へんや。之を多金を募集し、文昌魁星の爲に樓閣を修造し、號して文風を培植すと稱する者に較べて、實效有ること多し。文昌六星、司祿有りと雖も、何ぞ學校に與らん。魁は乃ち斗宿の一、俗に奎壁の書府なるを以て傳誤して魁に作るならん。其の福を星辰に倣^もて、效を土木に責^もむるよりは、諸を人事に求むるの愈^まされんと爲すに如かざるなり。

【註】

○書院 科挙受験のための、私立あるいは公立の學校。語行第一の「一、德行謹厚」の註参照。

○社學 郷村の子弟を教授した學校。

○義卷賓興 よくわからない。「義卷」は、私塾で生徒を集めて行^う試験の意か。「賓興」は、郷試に応じる時に地方官が宴を設けてもてなすこと。

○澤竭^つき壁枯れ 「澤竭壁枯」は、全集本は「澤渴壁枯」に作る。

○冠蓋里 「冠蓋」は、冠と車の掩い。「冠蓋里」とは、漢の宣帝の時代に、今の湖北省襄陽県に在る峴山の南から宜城に至る百里余りの間をさしていう。漢代、卿士刺史二千石の者數十家が住み、冠蓋が互いに覆い尽くしたことから名付けられたという。『襄陽耆舊記』に、

襄陽郡峴山の南より宜城百餘里、漢の宣帝の時、卿士刺史二千石數十家有^り、冠蓋掩映す。荊州刺史、其の盛んなるを歎し、之を號して冠蓋里と曰ふ。(襄陽郡峴山南宜城百餘里、漢宣帝時、有卿士刺史二千石數十家、冠蓋掩映、荊州刺史歎其盛、號之曰冠蓋里)とある。

○文昌魁星 以下の註参照。

○文昌六星、司祿有りと雖も、何ぞ學校に與らん 「文昌」については、『史記』天官書に、

斗魁、戴匡の六星を文昌宮と曰ふ。一に曰はく上將、二に曰はく次將、三に曰はく貴相、四に曰はく司命、五に曰はく司中、六に曰はく司祿。(斗魁、戴匡六星曰文昌宮。一曰上將、二曰次將、三曰貴相、四曰司命、五曰司中、六曰司祿)

とあり、北斗星の魁の前にある六星を文昌宮という。「司祿」は『史記索隱』が『春秋元命包』に「司祿は功を賞し士を進む」とあるのを引き、これによれば、「司祿」は手柄を立てた者を賞して爵祿を進めることを司るもの。結局「文昌」は、學校とは関連性がないという。

○魁は乃ち斗宿の一、俗に奎壁の書府なるを以て傳誤して魁に作るならん 「魁」については、

平旦に建する者は魁なり。(平旦建者魁)とあり、その『史記集解』に、

孟康曰はく、傳に曰はく、斗第一星は日に法り、齊を主るなり。魁は斗の首なり。(孟康曰、傳曰、斗第一星法於日、主齊也。魁、斗之首)

とある。「魁」は北斗星の第一星。

また、「奎」は、二十八宿の一つで、同じく『史記』天官書に、

奎曰封豕，為溝瀆。（奎曰封豕，為溝瀆）

とあり、その『史記正義』に、

奎は天の府庫なり、一に天豕と曰ひ、亦封豕と曰ひ、溝瀆を主る。（奎、

天之府庫、一曰天豕、亦曰封豕、主溝瀆）

とあるように、天の府庫（文書等の保管庫）に相当すると捉えられていた。

また、「壁」については、『晋書』天文志に、

東壁の二星は、文章を主り、天下の圖書の祕府なり。（東壁二星、主文章、天下圖書之祕府也）

とあるように、文章を司るもので、図書を保管する書庫に相当すると捉えられていた。

【通釈】

書物を買うのに費用を惜しんではならない。

田の穀物の利益は、十分の一にもならない。商売の利益は三倍に止まる。

典籍の利益は、身を良くし、おおもとを興起し、愚昧な者を賢者にし、子孫は永く保ち、いくら酌んでも尽きることなく、一巻の書物は、天下に有益である。どんな利益があるかは、いちいち言うことができない。

衣食を節約してでも、なお書物を買うべきである。ただ書物を買うには、どういう入り口から入るかが大切である。もし通人を訪ねることができなければ、常に書店を行き来し、棚の上を見渡しなさい。書名の雅馴なものを求め調べれば、重要な書籍善本には、必ず時々遭遇するものだ。たとえ買って読まなかったとしても、やはりその道に対しては篤く優れているといえる。子孫の中にもまた必ずそれを読む者が出てくるだろう。

蜀の人は義を重視し施すことを好む。書院・社学は、至る所に多くある。

模擬試験や激励の宴が行われ、受験者の顔色や目の色もひとつではない。

今もう一つ意味があるので、さらに話を進よう。ため息をついて心の中で考え、ひたすら試験勉強し、沢の水が付き家の壁が崩れるほどに時間をかけても、ついに大きな利益は少ない。それによって孤独で貧しい者を救うというならそれはありえる。しかしもし（それによって）礼教文化を興起するというならそれはありえない。もし礼を好む者がいれば、広く典籍を購入し、これを書院に置き、最も重要な各部の書物を計算しても、費用は千金余りに過ぎないのである。千金で買った書物は、百年以内に、ぼろぼろになることはなく、三十年以内に、散逸してしまうこともない。一果の優秀な人材は、みな利益を受け、次々に授受し、後代に与える恩沢は限りない。一郷の中にも、通人者は後から後から続いてあらわれる。どうして冠蓋里にならないことを憂慮することがあろうか。このことをお金を多く集めて、文昌魁星のために楼閣を建造し、声高に文徳強化の風を養成すると公言する者に比べてみると、実際に効果がたくさんある。文昌の第六星に、司禄という星は有るが、どうして学校と関係があろうか。魁は斗宿の一つであり、俗に奎・壁が文書の府であるとされることから伝え誤って魁に作ったのであろう。その福を星辰に求めて、効果を土木建築に求めるよりも、人事に求めることが勝っているとするほうがよい。

讀書期於明理、歸於致用。

書猶穀也。種稷春揄、炊之成飯、佐以庶羞、食之而飽、飢膚充悅、筋骸疆固。此穀之效也。若終歲勤動、僕僕田間、勞勞爨下、並不一嘗其味、蒔穀何爲。近人往往以讀書明理、判爲兩事、通經致用、視爲迂談。淺者爲科舉、博洽者著述取名耳。於己無與也、於世無與也、亦猶之穫而弗食、食而弗肥也。即如『說文』小學、誠爲讀經局鑰。乃吹求無窮、膠柱不化、是守此筭鑰、以終其身、仍

不免爲門外人、何由望見美富。此豈通六書之本意哉。其他考据家流弊、亦多此類。使世人譬漢學者、此輩爲之也。隨時讀書、隨時窮理、譬諸農家、年耕年食、不聞必待備嘗百穀、富積千倉、然後謀一飽也。心地清明、人品自然正直、從此貫通古今、推求人事、果能平日講求、無論才識長短、筮仕登朝、大小必有實用。易大畜之象曰、「君子以多識、識、『釋文』劉作志。前言往行、以畜其德」。多識畜德、事本相因。若讀書者、既不明理、又復無用、則亦不勞讀書矣。使者諄諄勸諸生讀書、志在使全蜀士林美質、悉造成材、上者效用於國家、其次亦不失爲端人雅士。非欲驅引人才、盡作書蠹也。此條特爲能讀書者發之。

【書き下し】

書を読むには理を明らかにするに期し、用を致すに歸す。

書は猶ほ穀のごときなり。種多穫り春き揃し、之を炊きて飯と成し、佐くるに庶羞を以てし、之を食して飽き、飢膚充悦し、筋骸彊固す。此れ穀の效なり。若し終歲勤動し、田間に僕僕とし、爨下に勞勞とし、並びに一も其の味を嘗めざれば、穀を蒔くは何の爲なるか。近人往往にして讀書・明理を以て判ちて兩事と爲し、通經・致用を視して迂談と爲す。淺き者は科擧の爲にし、博洽なる者は著述して名を取るのみ。己に於て與る無きなり、世に於て與る無きは、亦猶ほ之れ穫りて食せず、食して肥へざるのごときなり。即ち『説文』・小學の如きは、誠に經を読むの局論と爲す。乃ち吹き求むるも窮むる無く、柱に膠して化せざるは、是れ此の筭輪を守りて、以て其の身を終へ、仍ほ門外の人たるを免がれず、何に由りて美富を望みせん。此れ豈に六書に通ずるの本意ならんや。其の他考据家の流弊も亦此の類多し。世人をして漢學を譬らしむる者は、此の輩之を爲すなり。時に隨ひて書を読み、時に隨ひて理を窮め、諸を農家に譬ふれば、年に耕して年に食し、必ず偏く百穀を嘗め、富、千倉に積むを待ちて、然る後に一飽を謀るを聞かざるなり。心地清明、人品自然に正直、此に従ひて古今を貫通し、人事を推求し、果して能く平日講求すれば、才識の長短を論ずる無く、仕を筮ひ朝に登り、

大小必ず實用有り。『易』大畜の象に「君子以て多く前言往行を識し、識、『釋文』劉は志に作る。以て其の徳を畜ふ」と曰ふ。識を多くし徳を畜ふるは、事本相因ればなり。若し書を読む者既に理に明らかならず、又復た用ふる無ければ、則ち亦書を読むを勞せず。使者諄諄として諸生に書を読むを勸むるは、志は全蜀の士林の美質をして悉く成材と造し、上者は用を國家に效し、其の次も亦端人雅士と爲るを失せざらしむるに在り。人才を驅引して盡く書蠹と作らんと欲するに非ざるなり。此の條特だ能く書を読む者の爲に之を發す。

【註】

○讀書期於明理、歸於致用 全集本は「讀書期於明理、明理歸於致用」に作る。

○吹き求めて 『韓非子』大體第二十九に、

古の大體を全うする者は、天地を望み、江海を觀、山谷に因り、日月の照らす所、四時の行る所、雲布き風動く。智を以て心を累はさず、私を以て己を累はさず。治亂を法術に寄せ、是非を賞罰に託し、輕重を權衡に屬す。天理に逆らはず、情性を傷らず、毛を吹きて小疵を求めず、垢を洗ひて知り難きを察せず。繩の外に引かず、繩の内に推さず。法の外に急くせず、法の内に緩くせず。成理を守り、自然に因る。禍福は道法より生じて愛惡より出でず、榮辱の責めは己に在りて、人に在らず。(古之全大體者、望天地、觀江海、因山谷、日月所照、四時所行、雲布風動。不以智累心、不以私累己。寄治亂於法術、託是非於賞罰、屬輕重於權衡。不逆天理、不傷情性。不吹毛而求小疵、不洗垢而察難知。不引繩之外、不推繩之內。不急法之外、不緩法之內。守成理、因自然。禍福生乎道法而不出乎愛惡、榮辱之責在乎己、而不在乎人)とあり、「吹き求めて」とは、大切な要点を身につけた者は、毛を吹いて小

さな疵を探し出すようなことはしないということで、ここでは字句の細かい点にこだわってそこで言わんとする大要を見失ってしまうことを指すか。

○諸を農家に譬ふれば 「譬諸農家」は、全集本は「譬如農家」に作る。

○『易』大畜の象に「天、山中に在るは、大畜なり。君子以て多く前言往行を識^しし、以て其の徳を畜ふ」（天在山中、大畜。君子以多識前言往行、以畜其徳）とある。なお、阮元『校勘記』に「『識』は、岳本、閩、監、毛本同じ。『釋文』に「識」は劉、「志」に作る。按ずるに、『周易集解纂疏』は「志」に作る」とある。

【通釈】

書を読むのは理を明らかにするためであり、活用するためである。

書物はちようど穀物のようなものである。種を植えて収穫し臼でついて殻から引きだし、それを炊いて飯となし、おかずを添え、それを食べて満腹になり、荒れた肌もよるこび、筋肉も骨も強固になる。これは穀物の効用である。もし年中勤勉に働き、野良仕事で忙しく、炊事仕事で疲れ果てながら、同時に一つもその穀物を味わわないとすれば、穀物を種蒔くのは何のためであるか。近ごろの人は往往にして書を読むことと理を明らかにすることを分けて別々のこととし、經書に精通して世務に活用することをまわりくどくて役に立たないものとみなす。学識の浅い者は科挙の試験のためにし、学識の広い者は著述して名声を得るだけである。自分にとつても身につかず、世間にとつても影響がないのは、それはちようど収穫しなから食はず、食べても太らないのと同様である。とりもなおさず『説文』・小学のようなものは、まことに經書を読む鍵である。そこで毛を吹いて小さな疵を探し求めるような枝葉末節のことばかりして本質のことをきわめず、柱を膠^{にかわ}でくつつけたように硬直化して変化しないのは、この鍵だけを守ってそのままその身を終えることであり、（それは）なお門外漢であることを免がれない。何によってよいところをうかがい見ることができようか。こ

れがどうして六書の本来の意味に通じることであろうか。その他、考証家たちの弊害もこのたぐいのものが多い。世の中の人に漢学をそしらせるようにしたのは、彼らのせいである。しかるべき時に書を読み、しかるべき時に理を窮め、これを農家に譬えると、その年に耕してその年に食し、必ず残らず百穀を賞味し、富が、千の倉に積み上がるのを待って、はじめてひとたび満足することを謀るなどとは聞いたことがない。心も清明で、人柄も自然に正直となり、これにしたがつて古今のことに精通し、人事を調べ尋ね、もし普段から講求することができれば、才能知識のあるかないかを論じるまでもなく、仕官して朝廷に出仕し、大に小に必ず實際に役に立つことがあるものだ。『易』大畜の象に「君子は先人のことばと行いを多く記憶して、「識」は、『釋文』に劉は「志」に作る。それによって自分の徳を蓄積する」と言う。知識を多くし徳を蓄えるのは、事はもとと互に関係するからだ。もし書物を読む者が理に明らかでないうえに、役立てることがなければ、また苦勞して書を読むことはないのである。使者（である私）がくどくと諸生に読書を勧めるのは、その意図は蜀全土の士大夫階級のすばらしい資質をみな有用な人材となし、上の者はは國家にとつて役に立ち、その次の者も心正しく上品な人物になり損なわないようにすることにある。人の才能を無理に引張つてみんなが書物を食い荒らす虫になることを求めるものではない。この條は特によく書を読む者のために立てた。